

日本サウンドスケープ協会誌

サウンドスケープ

SOUNDSCAPE

Journal of the Soundscape Association of Japan (JSAJ)

Vol. 15(2)

会長 西江 雅之

特集 サウンドスケープのこころ

土田義郎、兼古勝史、小菅由加里

論文

神林哲平

レポート

船場ひさお、鈴木秀樹



Soundscape

May, 2015

ISSN 1345-4404

目次

特集 サウンドスケープのこころ

「サウンドスケープのこころ」のこころ	土田義郎---	2
「サウンドスケープのこころ」ポスターセッション&フォーラムー	兼古勝史---	3
第1部 ポスターセッション（13件）	-----	8
第2部 フォーラム（報告）	-----	35
総合司会：小林田鶴子		
ファシリテーター：土田義郎		
話題提供：池田邦太郎、鈴木秀樹、小菅由加里、神林哲平、兼古勝史		

「サウンドスケープのこころ2ー音と環境、音と教育ー」	小菅由加里---	55
第1部 ポスターセッション（15件）	-----	62
第2部 フォーラム「環境教育における音」	-----	68
モデレーター：兼古勝史		
話題提供：嶋 和彦、大野嘉章、岩田茉莉江、土田義郎		

論文

サウンド・エデュケーションのねらいに関する実践的研究		
ー現代的課題に応じた新たな可能性を探る	神林哲平---	82

レポート

20周年展「音風景の地平をさぐる」 概要報告	船場ひさお---	92
関連行事 「サウンドスケープの教室」	鈴木秀樹---	95

編集後記

特集 サウンドスケープのころ

「サウンドスケープのころ」のころ

2012 年度例会

「サウンドスケープのころ—ポスターセッション&フォーラム—」

創立 20 周年記念例会

「サウンドスケープのころ 2—音と環境、音と教育—」

「サウンドスケープのこころ」のこころ

The Spirit of “Spirit of Soundscape”

●土田 義郎（サウンド・エデュケーション WG 代表）
Yoshio TSUCHIDA
金沢工業大学
Kanazawa Institute of Technology

「サウンドスケープ」という考え方は、一つの環境デザイン論である。人は「デザインする」といった時に、どうしてもモノのカタチをはじめからイメージしがちである。途中いろいろと音についても含めて考えることはあるかもしれない。しかし、音の事を一顧だにせず、モノがつくられてしまうことも多々見られる。

また、「サウンドスケープ」という考え方は、一つの音楽論である。環境の中に垣間見られる原始のオンガクに喜びを見出すことができる。楽器や楽譜で表現しきれないものがあることを思い出させる。

「サウンドスケープ」は音から物事を考える。すると、モノのカタチではなく、環境の有様や人の行動、歴史や文化といったものを考えることになる。ヒトはなぜ、オンガクに心ふるわせるのかを考えることになる。モノへの働きかけから、ヒトへの働きかけへと大きな考え方の変化を伴うのが、サウンドスケープの本質と考えられる。

マリー・シェーファー氏がサウンド・エデュケーションを重んじ、そのままのタイトルの本まで出したのは、音に対する意識の転換を図ることこそが、サウンドスケープそのものと考えていたことに他ならない。

もちろん、人それぞれ異なる立脚点がある。アプローチは多様なものになる。そのなかで、自分なりのサウンドスケープ論を展開してゆくためには、ヒトへの働きかけを伴う実践が欠かせないステップの一つになっているのではなかろうか。

実を言うと、私が協会に入会した時、あるいは「サウンド・エデュケーション」をテーマとしたワーキンググループを発足させた頃ですら、このようなことははっきりとは意識してはいなかった。「実践的な活動は、なんだか大事そうだし、何より楽しい」というおぼろげな思いしかなかった。

しかし今ははっきりと思う。「身をもって体験し、意識すること」は、とてつもなく世界を広げてくれる。様々な事例は、至る所に隠されたその入り口である。

「サウンド・エデュケーション WG」は、2008 年度に立ち上げられた。事例紹介や実地体験による「手法の紹介」を中心とした各種のワークショップを重ねてきた。しかし、手法論以前の「考え方」についての議論が乏しいのではないかという反省があった。そういった点から、サウンドスケープの本質に関する思いを共有し、拡散させてゆくために行われた行事として、2012 年度と 2013 年度に「サウンドスケープのこころ」という例会を実施してきた。

これらの例会は、第 1 回目が東京、第 2 回目が浜松で行われた。ところ変われば人も変わる。内容に関しては、同じものであっても、重複して事例紹介していただくことも可とした。

フォーラムも同時に行い、立場の違う方々の素直な意見交換を試みた。そうやってあらためて話してみると、新たな発見もあり、自分の思いを再確認する機会にもなったと思う。

今回、協会誌においてこれらを再録することとなった。改めて振り返ってみると非常に面白く、また、事例集としても活用可能なものとなった気がする。参加できなかった方々にも、その一端をお見せできることになり、そういった点からも意義のあるものであると思う。

今回の特集は、各例会の実行委員長であった兼古勝史氏、小菅由加里氏の奮闘の賜物である。サウンド・エデュケーション WG 代表として両氏の労に感謝の意を表し、これをもって本特集の序としたい。

日本サウンドスケープ協会2012年度例会報告「サウンドスケープの こころ—ポスターセッション&フォーラム—」

A Report on the Annual Meeting of the Soundscape Association of Japan, 2012,
“Spirit of Soundscape”: Poster Session and Forum

●兼古 勝史

Katsushi KANEKO

武蔵大学・立教大学・目白大学・放送大学

Musashi University, Rikkyo University, Meiji University, The Open University of Japan

キーワード：サウンドスケープ、サウンド・エデュケーション、実践活動、ポスターセッション、フォーラム

Keywords: soundscape, sound education, practical activities, poster session, forum

1 はじめに

2013 年 3 月、青山学院アスタジオ（写真 1）において、日本サウンドスケープ協会（以下「協会」と略）2012 年度例会「サウンドスケープのこころ—ポスターセッション&フォーラム—」が開催された。本例会は、2013 年、協会が設立 20 周年を迎えるにあたり、「サウンド・エデュケーション」という観点から、サウンドスケープの意味や意義を考えることを目的に、サウンド・エデュケーション WG（以下「SEWG」と略）が中心となり、青山学院大学総合文化政策学部鳥越研究室との共催で実施したものである。サウンド・エデュケーションはサウンドスケープ概念の支柱のひとつであり、サウンドスケープ・デザインの重要な方法である、という想いを込めての企画だ。2008 年度に協会



写真 1／青山学院アスタジオ

内ワーキンググループとして活動を始めた SEWG は、それまで、事例紹介や実地体験による「手法の紹介」を中心とした各種ワークショップなどを企画・実施してきたが、全国様々な地域で個別に実践されているサウンド・エデュケーションの成果や経験を共有し合い、掘り下げる機会を持ちたいとの思いがかねてからあった。また、協会 20 周年の節目に鑑み、個人や集団、地域など、ひとりひとり（あるいは個々）の音との係わり合いへのまなざしを大切にするサウンドスケープという考え方によって、協会会員個々の

活動や取り組みの中での、発見や疑問、課題や展望の中にも、サウンドスケープの知の真髄があるとの期待を込めての開催であった。



写真 2／会場入り口

参加者は 35 名（協会会員 18 名、一般 6 名、学生 11 人）、参加人数は特別多くはなかったが、学生参加者の数が比較的多かったこと、教育分野以外の人を含む一般参加者などもあったことは、特筆すべきであろう。

本稿ではその開催概要とポスターセッション出展者の本例会への感想等を記す。出展者の個々の実践内容を紹介するシート（当日配布資料より、展示者の許諾を得て掲載）及び、第 2 部として行われたフォーラムの記録については、別稿として本誌に掲載しているのでご覧いただきたい。尚、本稿中の所属・氏名等はすべて開催当時のものである。

2 開催概要

本例会は以下のように行われた。

日本サウンドスケープ協会 2012 年度例会「サウンドスケープのこころ —ポスターセッション&フォーラム—

日時：2013 年 3 月 10 日（日）13:00—17:00

会場：青山学院アスタジオ（東京都渋谷区）
地下多目的ホール

プログラム：

■第1部 ポスターセッション 13:00～14:30

サウンド・エデュケーションに関わる教育実践活動をパネル展示（音具等の実物やビデオ映像等の展示を含む）にて紹介、トークタイムでは各展示者が自身の展示パネルの前で実践について説明した。



写真3／第1部ポスターセッション開会前の様子

■第2部 フォーラム 14:45～17:00

様々な地域、フィールドでサウンド・エデュケーションに取り組む6人の実践者・研究者を囲んで、参加者全員でサウンド・エデュケーションについて話し合った。

メインスピーカー（五十音順／敬称略）：

池田 邦太郎（帝京平成大学）

兼古 勝史（武蔵大学・立教大学）

神林 哲平（早稲田実業学校初等部）

小菅 由加里（作曲家）

鈴木 秀樹（慶應義塾幼稚舎）

ファシリテーター（敬称略）：

土田義郎（金沢工業大学・SEWG 代表）

情報交流会 17:15～18:30



写真4／関連企画展示

関連企画展示：（写真4）

- ・震災プロジェクト・ダルムシュタット会議参加の記録（日本サウンドスケープ協会・震災プロジェクト）
- ・渋谷フットパスプロジェクト（青山学院大学総合文化政策学部鳥越研究室）

主催：日本サウンドスケープ協会

共催：青山学院大学総合文化政策学部鳥越研究室

企画：SEWG

なお、会場入り口等に設置するイメージポスター（パネル）およびチラシ、配布資料の表紙（写真5）等は協会事務局スタッフでもあった松田陽子氏がデザインしてくださった、大変美しい、企画趣旨にふさわしいポスターであった。ここにあらためて謝意を表し紹介したい。



写真5／例会のイメージポスター&配布資料表紙

2.1 第1部 ポスターセッション

ポスターセッションでは、13組の実践事例が展示紹介された。展示タイトルと展示発表者は以下の通りである。（プログラム掲載順）

- 音ではかる？ 音でわかる！／土田義郎（金沢工業大学）、松田尚子（公益財団法人野々市市情報文化振興財団）
- 科学教育指導書「自然の観察」における音の記述の分析／土田義郎（金沢工業大学）
- ランドスケープ・エデュケーションの実践／曾和治好（京都造形芸術大学）
- 子どもの聴く耳を呼びさますために～「音のノート」の

実践から～／東海林恵里子〈山形市立南沼原小学校〉

● 静寂を聞く／佐故圭子

● 「都市を聴く」ための音楽イベント～＜名橋たちの音を聴く＞を事例として～／鳥越けい子（青山学院大学）、鷺野宏（都市楽師プロジェクト）

● 10分でできる！感性を育てるサウンド・エデュケーション／神林哲平（早稲田実業学校初等部）

● 音風景でつづる「家康の散歩道」～まちの音の耳をすまして、まちを再発見～／小菅由加里（作曲家・「音の泉サロン」はままつ分室）

● 音を楽しむONGAKU／池田邦太郎（帝京平成大学）

● 音のメディアリテラシー／兼古勝史（武蔵大学・立教大学）

● 教育の零度の実現／鈴木秀樹（慶應義塾幼稚舎）

● 美術大学におけるサウンド・エデュケーションの実践報告／佐々木 幸弥（武蔵野美術大学非常勤講師・ヤマハ株式会社）

● レッジョ・エミリア市の幼児教育に見るサウンド・エデュケーション／小林田鶴子（共栄大学）



写真6／第1部ポスターセッション～展示紹介ツアー

出展者は、午前中から会場に集まり、各自の実践活動を紹介展示するために持ちよった素材（文章や図表、写真など）をあらかじめ用意されたパネルに貼るなどしてポスターを制作し、展示を行った。また、第1部の時間の中で1時間ほどかけて、来場者が皆で会場内を移動しつつ展示をめぐり、それぞれの展示パネルの前で出展者が自身の実践・展示内容を説明し質問も受ける「紹介ツアー」（写真6）を行った。各出展者の各々の実践の詳細については、別項として、当日の配布資料の中から、ポスターセッションの内容紹介の部分、展示者の許諾を得て掲載したので、参照していただきたい。

2.2 第2部 フォーラム

第2部のフォーラムでは5名の実践者・研究者をメインスピーカーに、SEWG 土田義郎代表が司会・ファシリテーターを務め、フロアの参加者も交えて活発な討議が行われた。

「自己紹介・サウンド・エデュケーションとの出会い」「お薦めアクティビティ」「心がけていること」「失敗例」「悩んでいること・課題」などをテーマに充実した意見交換の時間となった。このフォーラムの全容については、別稿「サウンドスケープのこころ 第2部フォーラム」に掲載する。



写真7／第2部フォーラム

3 出展者の感想

ポスターセッション出展者から寄せられた本例会への感想を以下に紹介する。（順不同、敬称略）

小菅由加里（作曲家・「音の泉サロン」はままつ分室）

「サウンド・エデュケーションとは何か？」「サウンド・エデュケーションでは、どんなことをしたら良いのか？」「音に対して耳をひらく（ひらかせる）とは？」・・・

サウンド・エデュケーションの入り口に立ったばかりの私にとっては、以上のような問いかけが常に頭を駆け巡っており、この例会へは、何処で、どのような人々が、どんなことを実践しているのかなどについて、見識を広げる良い機会になるのではという期待を持って参加しました。様々な実践や取り組みの発表があり、皆様それぞれ長きにわたって情熱を持って活動を続けていらして素晴らしいと思いました。何事にも言えますが、手応えを得るには時間をかけて試行錯誤しながら取り組んでいくことが大事であると、また言い換えれば、地道に活動していけば自分なりの手法やノウハウが蓄積され、成果に繋げることができるだろうと、皆様の発表を聞いて（見て）大いに刺激を受け、また大変励まされました。

ポスターセッションでは多くの方に熱心に活動内容を聞いていただき、展示物をご覧になっての感想や質問をいただきました。実践について伝えたいことをA1用紙1枚に収めるのは難しく、ポイントが絞られていない展示でしたが、自身の活動について知っていただく機会を得たことを嬉しく思いました。フォーラムでは、パネリストとして貴重な経験をさせていただきました。ご経験豊かな方々に混じってのディスカッションは、自身の経験不足や認識不足を痛感することしきりでしたが、示唆に富んだ提案や問

題提起について共に考え、深めていったことは大変有意義でした。また、「答えがない」「理由を聞かない」「指導者と生徒が同じ立場／目線に立つ」「スタンダードを作る？作らない？」など、今後の活動へのキーワードを発見することができ、大いに勉強になりました。

「サウンドスケープのころ」は、手探りの状態でサウンド・エデュケーションを始めた私にとって、聴く耳を育てるための様々なアプローチを知ることができた実り多い例会でした。このように、各地のサウンド・エデュケーションの実践者が一堂に会して、それぞれの活動について発表し合ったことは大変価値のあることだと思います。今後は、互いに実践現場を訪問し合うなどして、さらなる交流の輪が広がっていくことを希望します。どうも有り難うございました。

神林哲平（早稲田実業学校初等部）

「サウンド・エデュケーションのねらいについて」

評価の話題とも関わってくるが、「サウンド・エデュケーションを何のためにやっているのか」ということを常に意識している必要があると改めて感じた。活動ばかりになってしまうと、どうしても目的意識が希薄になりやすく、そうしたところに形骸化という問題も生じてくるように思われる。

現時点（2013 年 3 月）での私にとっては、サウンド・エデュケーションによって「自己肯定感」と「感性」を育てていくのがねらいであり、最終的には「それぞれの感じ方を尊重し、共感しあえる」子どもを育てたいと考えている。もちろんこれはサウンド・エデュケーションだけでなく、自分自身の教育観や教育目的にもつながる。サウンド・エデュケーションは自分の教育観や教育目的を実現するための方法論として有効だということである。

自己肯定感については、偶然複数の方々がキーワードとして用いていたことに驚き、また確信を深めることができた。子どもの多様な発想、感じ方を教師が受け入れる。それはいい、悪いということではなく、存在そのものを受け入れる、という感覚である。普段の授業でも子どもの発言には必ず価値があるという前提で話を聴くようにしている。教科によっては誤答の発言もあるが、そこから学ぶことは大きく、価値のあるものなのである。

感性については、「日常では当たり前になっていることに気づく感覚」と捉えている。サウンド・エデュケーションは、まさに日常的には当たり前で関心も持てないようなことに意識を向けることができる有効な活動である。当たり前のことが当たり前でないと感じるとき、子どもの心が動く。レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー（不思議さに驚嘆する心）」を実現できるのが、サウンド・エデュケーションなのだと思う。

そして、自己肯定感と感性が育てば、他者に対しても認め合うことができるのだと考える。一方で、何でもありの相対主義に陥るという問題は回避したい。私が定式化した「構造構成的サウンドスケープ論」はそれぞれの関心を明確化し、共有できるような枠組みである。他の知見と統合的に活用することによって、サウンド・エデュケーションについての共通理解が進むことを願っている。その先に、

フォーラムでも話題に挙がっていた「スタンダード」が見えてくるのではないか。フォーラムでは方法論と内容論が明確に区別されていなかったように感じているが、方法論においてはスタンダードを作ることができると個人的には考えている。

「意識の二重性について」

私はサウンド・エデュケーションの実践において、音を聴いたときにそれをどのように感じたのか「理由」を書かせている。また、活動の終わりには一言感想も書かせている。今回のフォーラムで学んだのは、「感じたことの全てに果たして明確な理由があるのか」ということだ。少なくともそう感じた直後には理由は明確でないこともあるだろう。むしろ後付けの理由を考えることで意識が変わってしまうことも考えられる。サルトルが言及している意識の二重性の問題である。一方で、意識の二重性ということを明確にしていれば、理由を書く活動にも意義はあるとも思う。理由付けをすることは自分の活動をメタ認知するためには有効だからだ。直後の意識と理由付け後の意識が変わってしまう可能性は否定できないことを念頭に入れながら、今後も実践を積み重ねていきたい。

鈴木秀樹（慶應義塾幼稚舎）

「ポスターセッション」

サウンド・エデュケーションに関する様々な試みが一望できた貴重な機会だったと感じる。会場で見て初めて知る活動も多かったし、出展者との対話を通して得られた発見も数多くあった。

会場の広さ、雰囲気も調度良いものであったように感じる。使えるスペース等の情報がもう少し詳しくわかっていたら良かったかな、と思わないではないが、初めての試みとしては十分成功であったように思う。

「フォーラム」

サウンド・エデュケーションについての深い討論というものにほとんど出会ったことがなかったので、非常に刺激的な体験になった。

「議論が学校教育の話に偏り過ぎ」という反省はあったかと思うが、テーマが「サウンドスケープのころ」という間口の広い、どうとでも捉えられるようなものになっていたのも、議論が自然とサウンド・エデュケーションが抱える課題に向かっていったのだろうと考えている。では、「サウンド・エデュケーションが抱える課題」とは何か。その一つは、サウンド・エデュケーションをどう広めていくかということであろうが、そのためには、これを学校教育の中にどう入れていくか、どう位置づけていくかは重要な課題であると言わざるを得ない。いずれは「学校教育の中のサウンド・エデュケーション」というタイトルでフォーラムが開けたら良いのではないかと感じている。

佐故圭子（協会会員）

今回、会場にうかがえませんでした。ポスターだけの参加を快諾していただいたこと、感謝申し上げます。

マリー・シェーファーの『世界の調律』を読むとき、沈

黙、つまり心を鎮めることの大切さが、まさに「基調音のように」述べられていると、私は思います。そして、瞑想をする「沈黙の寺」だけの音の公園を、提案しています。私はサウンドスケープ協会の草創期からの会員で、これらのことの大切さを、直観しながらも、具体的にはどうということなのか、はっきりとはよくつかめないので来ました。しかし、今は、人生の柱として、沈黙、瞑想を大切に生きています。そして、静寂を聴くことは、サウンドスケープの根幹と言ってよく、このことの重要性を、何度でも、確認すべきだと思っています。

もし、「沈黙の寺」をつくるとしたら、そこに瞑想のマスターとして私が居てほしいのが、野村昇平先生という方（ブログ「いのちの塾」<http://oneall7.blog.fc2.com/>参照）です。初心者が自我の塊としての瞑想を続けても埒があきません。精神的な柱としての存在が居て下さることが、どれだけの助けになるか、はかり知れません。ブログを是非一度のぞいてみて下さい。

サウンドスケープ協会の理事長提言に「サウンドスケープからのメッセージは、音の大切さだけではありません。そこには、音を通して、私たちが自分自身の存在、世界との繋がりのなかに全体性を取り戻すという大切な意味合いが含まれています」と、あります。全体性を取り戻す、ということが具体的にはどのようになされるのでしょうか？ばらばらの個人的考えをいくつ集めてみても、全体にはならないと思います。それは、すべての存在は「不可分一体」であるという、存在の真実について自覚することによってなされると私は思います。そしてそれは、静寂を聴く中で自得されます。

ちょっと、わかりにくいかもしれませんね。

それを私に身体的に教えて下さるのが野村奈央先生（野口整体指導者）です。野口整体では、頭に調律点と呼ばれるポイントがあります。腰を立ててきちんと座るとき、深い呼吸の中で、大自然、宇宙とつながって、身体のゆがみが自然と整います。瞑想状態の中で、身体の中で固まっていた何かがほどけると、同時に遠くの鳥が鳴いたり、蝉が鳴き始めます。身体を貫く息と、自然の息がつながっていること。すべてのいのちがつながっていることを、内的聴覚とでもいうようなもので感じます。そして同時に、自分の中に生き方の気づきが起こります。

近いうちに、これらのことについて、日本の文化や身体性と音との関連から、発表したいと思っています。（その後、2014 年度秋季研究発表会にて発表）

4 まとめ

ポスターセッションという協会としても経験の少ない手法を中心に据えて行った本例会は、準備の段階から初めてのことも多く実行委員会としても議論を重ね、試行錯誤をしながらの取り組みとなった。そのため、協会会員の皆様への出展の募集や開催告知などに際して、十分な時間的余裕を持って行うことができず、日程調整などがかなわず当日会場に来られなかった方もいらしたことをお詫び申し上げます。そうした中であって、参加人数こそ特段多いとはいえないにしても、全国の様々な地方や地域から、研究者、教育実践者、自治体関連団体職員、デザイナー、アーティ

スト、一般市民、学生など、これまであまり参加されていなかった方も含め、多彩な展示と多様な参加者を迎えることができたことは、喜ばしいことであった。サウンド・エデュケーションをテーマにして様々な実践事例に触れ、議論を深めることができたこと、従来のシンポジウムやレクチャー、口頭発表という形ではなく、ポスターセッションという形式で充実した時間を持つことができたことは、今後の協会活動を考える上で貴重な経験を得ることになったと思う。本例会の経験を翌年の浜松でのポスターセッション&フォーラム「サウンドスケープのこころ2」へ引き継ぐことができたことは、協会活動の大きな成果といえるだろう。

謝辞

本例会の開催にあたって、共催団体として、関連企画の展示の一部を行うとともに、会場使用について便宜をはかってくださった青山学院大学総合文化政策学部・鳥越研究室、関連企画の展示やポスターセッションの展示についてご助言ご協力をいただきました協会常務理事の川崎義博氏、そして朝早くより会場入りして展示ポスターの制作を行い、例会終了後も会場の片付け、機材等の撤収等にご協力いただいた展示発表者の皆様をはじめ、多くの方々のご助力・ご協力をいただきましたことを心より御礼申し上げます。

「サウンドスケープのこころ」実行委員会

実行委員長 兼古 勝史

実行委員 神林 哲平

小菅由加里

小林田鶴子

鈴木 秀樹

土田 義郎

鳥越けい子

(五十音順)

日本サウンドスケープ協会2012年度例会「サウンドスケープのこころ - ポスターセッション&フォーラム -」

第1部 ポスターセッション

Part 1 Poster Session

会 場 : 青山学院アスタジオ
日 時 : 2013年3月10日(日) 13:00~14:30

第1部のポスターセッションでは、サウンドスケープやサウンド・エデュケーションに関わる実践活動について、13組の発表があった。以下に、当日の配布プログラムに掲載された各発表者の実践概要を掲載する。

■ポスターセッション発表者（配布プログラム掲載順）

- 音ではかる？ 音でわかる！／土田義郎(金沢工業大学)、松田尚子(公益財団法人野々市市情報文化振興財団)
- 科学教育指導書「自然の観察」における音の記述の分析／土田義郎（金沢工業大学）
- ランドスケープ・エデュケーションの実践／曾和治好（京都造形芸術大学）
- 子どもの聴く耳を呼びさますために～「音のノート」の実践から～／東海林恵里子〈山形市立南沼原小学校〉
- 静寂を聞く／佐故圭子
- 「都市を聴く」ための音楽イベント～＜名橋たちの音を聴く＞を事例として～／鳥越けい子（青山学院大学）、鷺野宏（都市楽師プロジェクト）
- 10分でできる！感性を育てるサウンドエデュケーション／神林哲平（早稲田実業学校初等部）
- 音風景でつづる「家康の散歩道」～まちの音に耳をすまして、まちを再発見～／小菅由加里（作曲家・「音の泉サロン」はままつ分室）
- 音を楽しむONGAKU／池田邦太郎（帝京平成大学）
- 音のメディアリテラシー／兼古勝史（武蔵大学・立教大学）
- 教育の零度の実現／鈴木秀樹（慶應義塾幼稚舎）
- 美術大学におけるサウンド・エデュケーションの実践報告／佐々木 幸弥（武蔵野美術大学非常勤講師・ヤマハ株式会社）
- 「レッジョ・エミリア市の幼児教育」に見るサウンドエデュケーション／小林田鶴子（共栄大学）



音で測る？ 音でわかる！

土田義郎（金沢工業大学）

松田尚子（公益財団法人野々市市情報文化振興財団）

（実践の概要、これまでの取り組み）

金沢工業大学の所在地は金沢市と野々市市にまたがっています（登記上は野々市市）。そのため、協定を結んで連携事業を推進しています。

野々市市のシンボルの花は椿（カメリア）とされており、カメリアの名称を冠した施設や事業がいくつかあります。「カメリアキッズ」という事業もその一つで、小中学生に対する啓発事業として位置づけられています。この事業に大学教員も協力し、いくつかのアクティビティを実施しています。

私は 2010 年度から関与し、「空間サイエンス編」の中で音に関する講座を担当してきました。サイエンスというくくりの中ですので音の物理的な性質の解説もしますが、実際に様々な音響現象（ロングパスエコー、チャープエコー、音の焦点）を聴き取ってみたり、自分たちで音サインを作成して音を頼りに目隠しして歩いたりといった、感覚に訴える体験を重視した活動としています。

参考：<http://camellia.nonol.jp/2012/05/h24camelliakids/>

・対象者層

地元の自治体（野々市市）と連携しているので地元の小学生

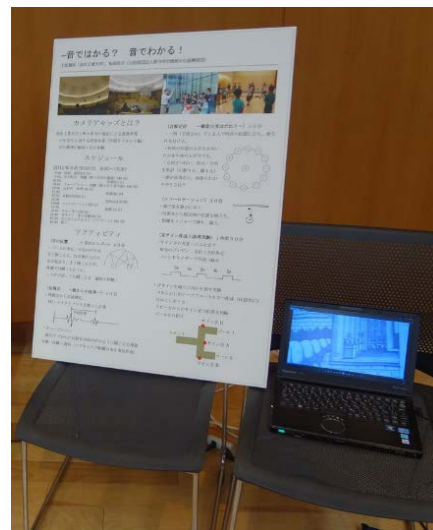
（実践の目指すもの＝そのころは！）

子供たちに環境を感じ取ることのできる感覚を！それが将来暮らしやすい、健康で快適な生活環境を実現する基礎となるのではないかと考えています。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

小学生といってもその年齢によって理解度も異なり、また面白いと感じるポイントも違います。どのようにすれば楽しく活動できるかについて試行錯誤してきました！

(実践等の写真)



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ ②. 実施展開する拠点 3. 多数の参加者
- ④. 周囲の理解 5. 反響（意見や助言、評価や批判） ⑥. 他の実践等に関する情報
- ⑦. 成果の報告・発表の場 8. 継続するための資金 9. 自身の技能・技術や知識
10. その他（具体的に） （ ）

(来場者へのメッセージ)

子供から大人までいろいろな活動を行ってきました。石川における一連のサウンド・エデュケーション活動を振り返ることもしてみたいと思います。ぜひ、ご意見・ご感想を!!

科学教育指導書「自然の観察」について

土田義郎（金沢工業大学）

(実践の概要、これまでの取り組み)

2009 年に出版された『自然の観察』という書は、第二次世界大戦前の 1941 年に発行されたものの復刊です。尋常小学校から国民学校へと教育制度が変わる際の教師用テキストとして作られました。児童用はつくられませんでした。それは「強いて編さんすれば、『自然の観察』を教室において、教科書の上で指導するようなことに傾きやすく、かえって悪結果を生ずるおそれがあるのである。」という考えがあったと記されています。「合理創造の精神」を養うことを目的に据え、単に「理知」の働きだけでなく、「知情意」の発達を目指した体験的な学習を重視するという方針が特徴であるといえます。ページをめくると、随所にその実際を垣間見ることができます。校庭で歌を歌い、文章を書き、絵を描き、体を動かし、地域で働く人々に話しかけるような活動を含み、その過程で「音」にも多く着目させています。総合学習の精神を先取りしていたといえるでしょう。理科以外の内容がいろいろな所にちりばめられているのは、マイクロ・インサージョン(micro-insertion)という技法をすでに行っているものと考えられます。

注) 本展示は以下に示すように過去に協会誌に掲載されたレビューです。

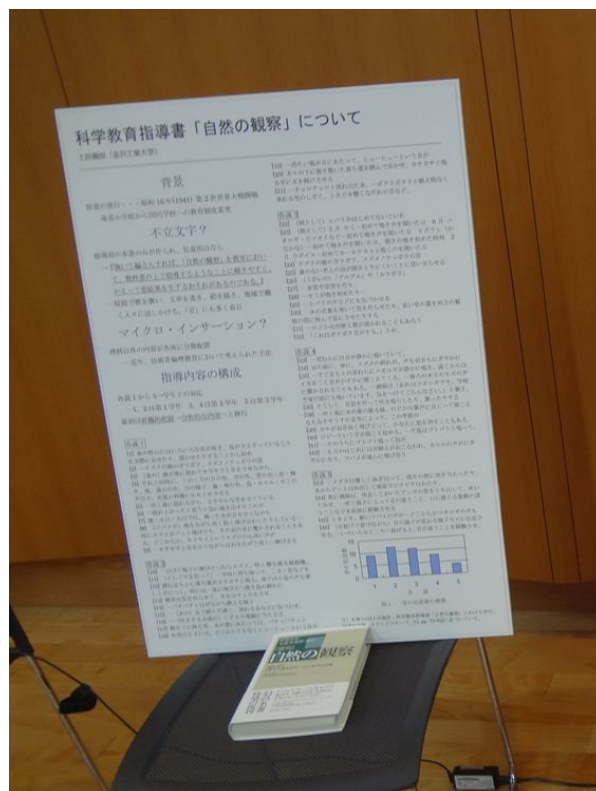
土田義郎：科学教育指導書『自然の観察』における音の記述の分析, サウンドスケープ, Vol.13, pp.79-82, 2012.

(実践の目指すもの=そのころは！)

過去を振り返り、知を継承すべきではないでしょうか。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

この本を読んだときに、それほど期待していたわけではないのですが、現在にも十分通じる内容が戦前にもあったことに驚かされました。



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ
- ②. 実施展開する拠点
3. 多数の参加者
- ④. 周囲の理解
5. 反響(意見や助言、評価や批判)
- ⑥. 他の実践等に関する情報
- ⑦. 成果の報告・発表の場
8. 継続するための資金
9. 自身の技能・技術や知識
10. その他(具体的に) ()

(来場者へのメッセージ)

本例会の展示のもととなった協会誌の記事も是非ご覧いただければと思います！

ランドスケープ・エデュケーションの実践

曾和治好（庭園 SSWG・京都造形芸術大学）

（実践の概要、これまでの取り組み）

主に保育園児～小学生を対象としたランドスケープ・エデュケーションに取り組んでいます。ランドスケープ・エデュケーションとは、聴覚・視覚・嗅覚など五感を通して自身が生活する風景(ランドスケープ)を楽しみ、学ぶことにより、将来、美しい五感環境(風景・音風景など我々を取り巻く街や村の在り様)を大切に思い、それらの保護・保全・管理・創生に価値を見出せる人間を一人でも多く育てることを目標とした教育活動です。

今回は、京都市左京区浄土寺真如町において、自治会と京都造形芸術大学・曾和研究室・白川 LD 研究会が共同で取り組む地蔵盆での実践例を紹介します。サウンドエデュケーションの要素としては、風鈴づくりを通して風を感じ、白川の水音へと意識を誘うワークショップが含まれています。

・対象者層

小学生・保護者・高齢者を主として、可能であれば地域住民全員

（そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど）

身近な景観の意識化を通して、子どものランドスケープ・サウンドスケープに対する感性を涵養します。

活動を通して、子ども自身が住み続ける町への愛着心を育て、自然の素晴らしさを知ってもらいます。

これら教育活動は、美しい五感のランドスケープを維持・創生しようとする社会づくりを目指します。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

このような活動を通して、地蔵盆への参加者が増加しました。高齢者の参観もあり、異世代間の交流も生まれました。また、小学生が取り組む活動を見て、地域住民の生活環境への気づきがみられました。



(課題 今欲しいものは)

- ①. 一緒に進める仲間やスタッフ
- ②. 実施展開する拠点
3. 多数の参加者
4. 周囲の理解
5. 反響 (意見や助言、評価や批判)
6. 他の実践等に関する情報
- ⑦. 成果の報告・発表の場
- ⑧. 継続するための資金
9. 自身の技能・技術や知識
10. その他 (具体的に)

(来場者へのメッセージ)

美しいランドスケープやサウンドスケープを実現することこそ、
「豊かさを実感できる社会」への近道だと考えています。

子どもの聴く耳を呼びさますために ～「音の日記」「音のノート」の実践を通して

東海林 恵里子(山形市立南沼原小学校)

(実践の概要、これまでの取り組み)

これまで気づかずにいた身の周りのかすかな音にも耳を傾け、その音の存在に気づき音に何かを感じる子どもを育てたい、自分の耳で「意識して音を聴く」こと「音を感じる」ことのおもしろさやしあわせを子どもたち一人一人に体感させたいと考え、私は「音を聴く」活動（音の日記・音のノート）や、「音楽をつくる」活動（音づくり）の実践を25年間試み続けてきた。

～音の日記・音のノート・音づくりを通して～

様々な音に耳を傾けると、子どもたちは、聴こえてきた音の響きのおもしろさに気づいてくる。瞬時に消えてしまう音の印象を忘れないように記録していくのが、私と子どもたちの間を行き来する「音の日記」「音のノート」であった。

子どもたちは、音を聴いて感じると、その聴こえてきた音に何かを思い描く。思い描いたものは目には見えないものであり、他のだれでもない自分だけの感じる世界である。自分の感じたものや思い描いたものを、より客観的に捉え記録するために、子どもたちは音の印象を、オノマトペのような音言葉・線・形・模様・色などで表していく。「感じる→思い描く→記録する（表す）」ことを子どもたちは、「音の日記」「音のノート」を通して繰り返し私に伝えてきた。「音の日記」「音のノート」に自分の思い描いたことを記録し表し伝えることは、「こういう自分でもいいんだ」という自分自身の発見であり、なおかつ相手にも自分の感じ方が受け容れられる活動である。言い換えれば、一人ひとりが違った人間であること、その人らしさ、人格が認められ受け容れられる「自己肯定」の活動、そして、他の感じ方や表し方を排斥するのではなく受容する活動であった。「みんなと同じがよい」「みんなと同じが安心」といった意識から、子どもたちを解放していったのである。

五感をはたらかせて聴きとった音を感じとり、記録し（表し）、伝える。この活動を繰り返すことで、子どもたちは、自分自身を発見し他を受け容れることができるようになる、と考えた。

しかしながらこれらの実践は「主観的であり、客観性に欠ける」という先輩方からの指摘も多々あった。そこで、分析枠組をつくり、子どもの変容過程を活動を通して読みとっていくことを試みた。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

活動の継続によって見出された5項目を下記に示す。

- ①音の聴取・表現と造形表現の相関
- ②表現媒体の拡大→個性化
- ③五感の一体化による聴取（全感覚的聴取）
- ④音に対する認識の拡大・創造的聴取
- ⑤音に対する価値観形成

未分化な子どもの時期に「音の日記」「音のノート」といった総合的な芸術教育が重要である。

(課題)

子どもの変容過程を読みとる方法のほんの一例にすぎない。今後は学際的研究に広げたい。

音の日記



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ
2. 実施展開する拠点
3. 多数の参加者
4. 周囲の理解
- ⑤. 反響（意見や助言、評価や批判）
- ⑥. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場
8. 継続するための資金
- ⑨. 自身の技能・技術や知識
- ⑩. その他（具体的に）
- （研究のための時間）

(来場者へのメッセージ)

上記実践の最初の時間について、ご意見をいただきたいのです。また、10月にワークショップを行う予定です。是非、子どもたちに参加してもらい、「音を聴く」「音を感じる」「音を描く」体験をしてもらえたらと思っています。

静寂を聞く

佐故 圭子

(実践の概要、これまでの取り組み)

絶対的な静寂。声なき声、音なき音を聞く。ただ、それだけ。
瞑想を続け、深めてゆくにつれ、静寂は深まり、澄み渡ることに、限りない。
静寂な世界はすべてぶっ続きで、ひとつつながりのいのち。
それこそが、本来の自己。気の世界。
この状態で、ただただ、当たり前の人間として生きること。
そこに、サウンドスケープデザインの本質がある。
禅が独自に発展し、文化の根底をなすこの日本において、
静寂を聞くことの意味、あるいは人間存在の本質が明確になった。
人間の本質、それは、絶対的な静寂。そして、サウンドスケープのこころ。

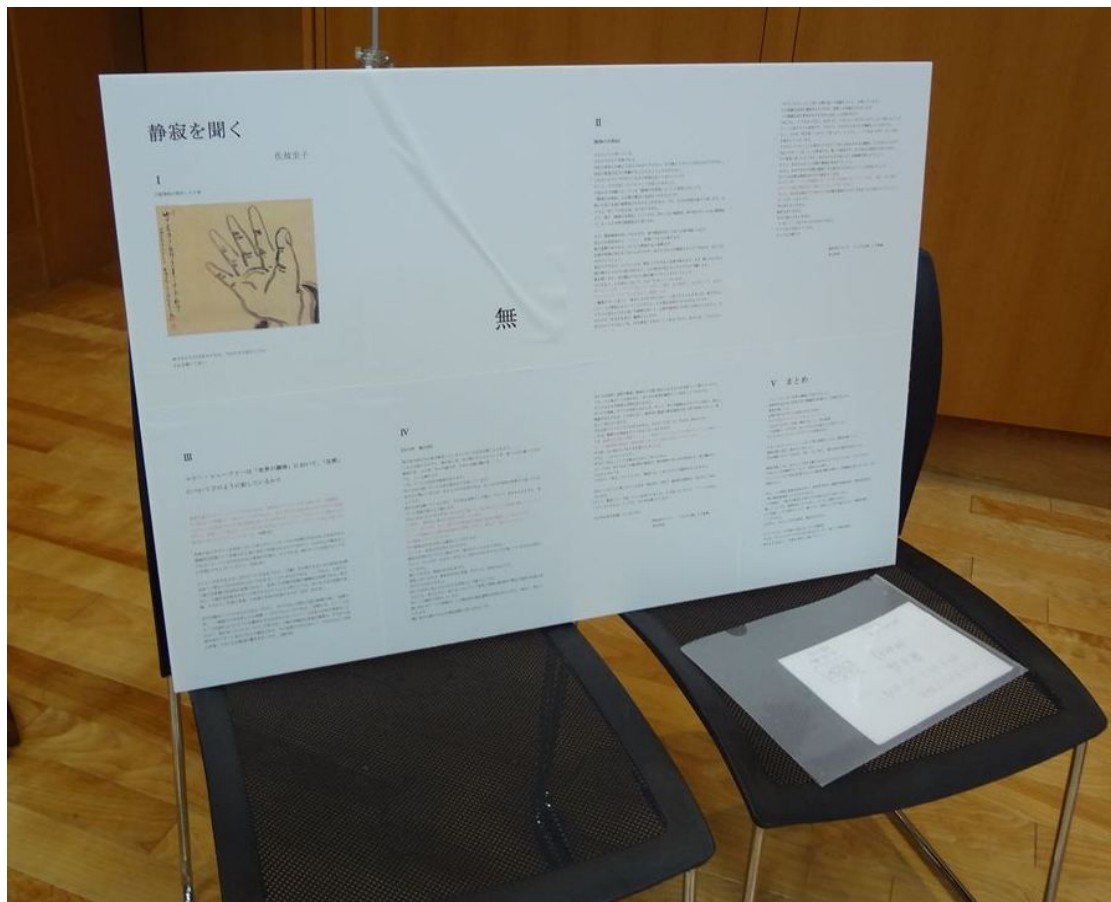
なお、この実践の重要な部分は全て、野村昇平先生（環境平和総合研究所）、
野村奈央先生（野口整体指導者）によるものである。
この実践は、難しいことでも、神秘的なことでもない。幻でも、抽象でもない。
ただ実践し、日々深めることで、誰にでも、事実として手に取るように、
静寂を聞くことができる。

(そのこころ=目指すもの、大切にしていることなど)

シェーファーは「世界の調律」で「沈黙」の一章を設け、
「世界の音のデザインを改良したいと望んだとしても、それは沈黙が
われわれの生活の中で積極的状态として回復された後に初めて実現されるもので
あろう」と述べ、エピローグで瞑想の重要性について述べて本を締めくくっている。
しかし、ある意味、不徹底というか、シェーファー自身、その域に達していたと
はいえないようだ。けれども、直観と研究によって、方向性を指示していたことは間違いない。
サウンドスケープ論を、深化、進化させてゆきたい。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

こころの底からのやすらぎ。
いのちの世界の豊かさ。
天の声なき声を聞く。
身体も、整うようにできています。



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ
2. 実施展開する拠点
3. 多数の参加者
4. 周囲の理解
5. 反響 (意見や助言、評価や批判)
6. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場
8. 継続するための資金
9. 自身の技能・技術や知識
- ⑩. その他 (具体的に)
何もない。「いまここ」に足りないものはありません。すべては完璧です。

(来場者へのメッセージ)

ぜひ瞑想を体験して下さい。
瞑想にはさまざまなものがありますが、静寂を聞くことは、日本の文化の根幹といっ
てよい。判断しないこと。「思い」や「考え」、頭の世界は、事実ではありません。

「都市を聴く」ための音楽イベント - <名橋たちの音を聴く>を事例として -

鳥越けい子(青山学院大学)・鷺野宏(都市楽師プロジェクト)

URL <http://toshigakushi.com>

(実践の概要／これまでの取り組み)

「都市を聴く」ための音楽イベントとは、鳥越と鷺野が、東京のいくつかのフィールドで、それぞれの地点の歴史や環境など、幾層ものレイヤーで構成される「その場所らしさ」を複合的かつ直感的に体験することを目的とした音楽イベントのこと。

その背景には、音楽には、聴く人にそれが成立する場所の環境そのものの特性に気づかせ、その土地の来歴や物語を発掘・発信する機能があるという考え方と、楽器の音、言葉、建物その他の構造物のもつ音響特性、都市の喧噪から自然界の音までを総合的にとらえる「サウンドスケープ」概念とその考え方がある。

それぞれの音楽イベントのつくりかたは、各フィールドのもつ環境文化的特性に応じたものとなっている。これまで取り組んできた主なプロジェクトとその以下のものがある：

○ <キャンパス遊歩音楽会>

2009 年 4 月、青山キャンパスとその主要な建物を利用して実施した青山学院大学総合文化政策学部新入生歓迎会の音楽会。

○ <SCAPE WORKS 百軒店>

渋谷百軒店をフィールドに、その文化資源の発掘・発信のために、新しい風景(SCAPE)を創り、地域の力を引き出していくためのいくつかのユニットからなるイベント。

2009 年 11 月より 2013 年 2 月まで、5 年間にわたり実施している。

○ <池の畔の遊歩音楽会>

武蔵野三大湧水池のひとつ善福寺池(杉並区)をフィールドに、「音風景案内人」と「放浪の楽師」が、池の畔を歩きながら、善福寺の池と土地の記憶を紐解く音楽会。

2010 年より 3 年にわたり、毎年 11 月に開催される「トロールの森野外フェスティバル」に参加。

○ <名橋たちの音を聴く>※今回事例としたプロジェクト

日本橋周辺の都市環境を、日本橋川を運行する船上から「音楽」とともに体感することで、都市空間を日常よりセンシティブに味わい街への愛着につなげていくことを意図して企画した作品。2010 年 5 月より 2012 年までの 3 年間、異なる季節にわたり、既に 7 つのヴァージョンを実施している。

(そのころ=大切にしていることなど)

これらの実践例においては、いずれも「サウンドスケープ概念」とそれに関する以下のような鳥越の問題意識を大切にしている：

音によるコミュニケーションという、これまでは音楽や言語といった人間特有の営み、あるいはレコードやラジオといった音の記録・再生装置や通信技術を問題にするのが一般的だった。これに対して、そうした「人為・人工の音」のみならず、「自然界の音」から「都市の喧噪」、さらには「記憶の音」に至るまで、近代の枠組みにおいてはとかくバラバラに扱われていた音の世界を、特定の場所にこだわりながら、総合的に扱おうとするところに、サウンドスケープ概念の文明史的な意義がある。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

実践によって見えてきたことは、参加者が音楽の聴取をきっかけとして、普段は騒音とされるようなものですら場所のもつ特徴として受け入れていくことができる場合があり、非常に多くの人々に音環境への気づきを促し、それらの刺激によって地域環境への関心をも引き出すことができるという確信である。実践にあたって中心となってきた手法は、音楽を聴くこと、言葉を聴くこと、周辺の音環境を感じる、景観を感じる、歴史を感じるなどの複数のレイヤーを参加者が縦横無尽に横断できるような仕掛けをつくるというもので、今回のパネル展示では、これを「都市を聴く」ための「レイヤー横断スキーム」と名付けている。



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ ②. 実施展開する拠点 ③. 多数の参加者
4. 周囲の理解 5. 反響（意見や助言、評価や批判） 6. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場 8. 継続するための資金 9. 自身の技能・技術や知識
10. その他（具体的に）

(来場者へのメッセージ)

2013年も＜名橋たちの音を聴く＞をはじめ、この資料で紹介しているプロジェクトをいろいろな時期に開催しますので、サイト等で検索し、みなさま是非、ご参加ください！

10分でできる！ 感性を育てるサウンドエデュケーション

神林 哲平（早稲田実業学校初等部）

（実践の概要、これまでの取り組み）

小学校では基幹教科の時数増加や外国語活動の必修化に伴い、「生きる力」を育むための総合的な学習の時間は削減されました。また、学校現場では基礎学力の定着のために多くを費やし、時間的にあまり余裕がないこともあります。その一方で、知識偏重型の学力育成に陥ることなく、徳性や感性の育成といった全人教育的な視点も求められるでしょう。

そうした状況を踏まえて、感性を育てるために有効な活動である「サウンドエデュケーション」（マリー・シェーファー著）を参考に、比較的短時間でできるワークシートを作成しました。ワークシートの構成は「児童が理解しやすい手順の記載」「表や絵も可能な自由記述欄」「児童の感性をみとるための感想欄」「活動へのフィードバック」といった内容で、どの指導者にも取り組みやすいようになっています。授業はもちろん、朝学習や帰りの会などのちょっとした時間に活用することも可能です。

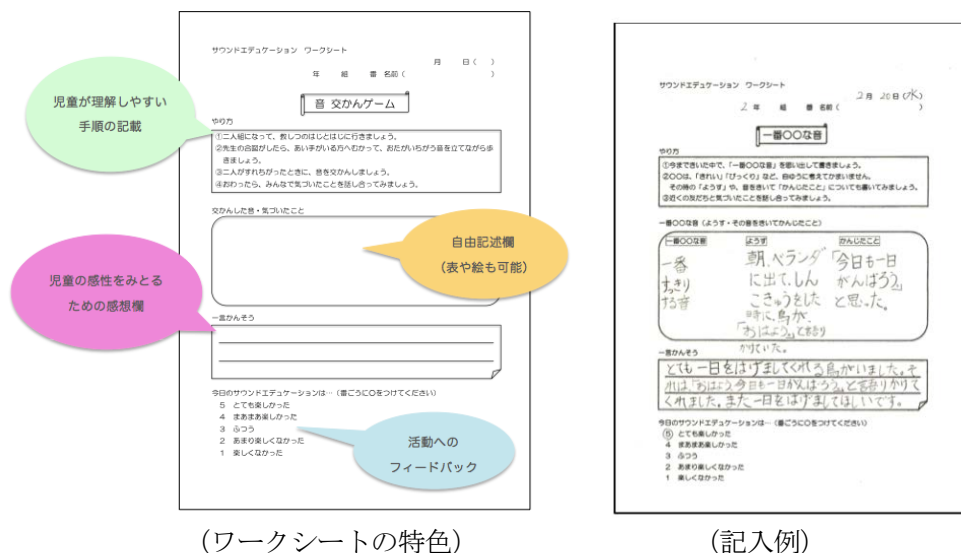
昨年度は5年生で朝学習や総合的な学習の時間に、今年度は2年生で生活科の時間に実践してきました。また、他学年の教員に協力してもらうこともあります。週1回の実践で少しずつの積み重ねではありますが、感性を育てるのに有効な手立てだと考えています。

（そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど）

感性を「日常では当たり前になっていて気づかないことについて、感じたり考えたりすることのできる能力」と捉え、現象学的聴取（「立ち現れた聴取という経験の全て」を出発点とする概念）を通してそれを育てていくことを目指しています。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

児童の記述からは、指導者が予想できないような感性の豊かさに驚くことが度々あります。活動の幅を広げることで、自己肯定感を育むとともに他者理解にもつなげることができるのではないかと考えています。



(課題 今欲しいものは)

- ①. 一緒に進める仲間やスタッフ ②. 実施展開する拠点 ③. 多数の参加者
4. 周囲の理解. 5. 反響 (意見や助言、評価や批判) ⑥. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場 8. 継続するための資金 9. 自身の技能・技術や知識
10. その他 (具体的に)

例 活動を同時に多くの参加者が行うための機材 (ノート PC) PCM レコーダー)

(来場者へのメッセージ)

子どもの成長は長い目で見る必要があります。感性を育てるということもまた、一朝一夕では難しいでしょう。しかし、サウンドエデュケーションにはその力があると信じて、今後も実践していきたいと思っています。

音風景でつづる家康の散歩道 ～まちの音に耳をすまして、まちを再発見～

小菅 由加里（音の泉サロンはままつ分室）

（実践の概要、これまでの取り組み）

静岡県浜松市において、一般市民を対象に、徳川家康ゆかりの史跡を巡る浜松市の散策コース「家康の散歩道」をサウンドウォークする企画を定期的に行っている。史跡を訪ね歩くことで、現在の音環境を体感するのみならず、「当時きこえていた音」や「昔の人々の暮らしの音」を想像し、「音」からまちの成り立ちや、歴史・文化の営みを認識するきっかけづくりをめざしている。

これまでに 2012 年 3 月、8 月、11 月の 3 回にわたって開催（4 回目は 2013 年 3 月に予定）。実施の際には上記プロジェクト名に、それぞれ〈春の章〉〈夏の章〉〈秋の章〉と季節を含むフレーズを添え、年間を通じて継続的に行っていることをアピール。同じルートにて季節毎に開催することにより、季節の違いによる音風景の変化を体感することをうたってリピーターの獲得をねらい、継続的に地域の人々に音環境に目を向ける働きかけを可能にしようと試みている。

対象者：小学生～一般大人。市民参加型のイベントにおいては対象者層を制限している場合が多いが、本企画では年齢枠を広く設け、おとなも子どもも一緒に地域を知る・語る世代間交流の場でもありたいと願っている。

本企画は「地域活動においてサウンド・エデュケーションは可能か？」の自問に端を発している。サウンドウォークをはじめとするサウンド・エデュケーションのプログラムは各地で様々な趣向で行われているが、一般市民を対象としたものは単発的な取り組みで終わってしまう事例が少なくない。本企画では、音を聴く耳を育て、聴覚を通して環境を感じる取る能力を養う働きかけを定期的・継続的に行い、地域における環境教育に繋げていこうと試行錯誤している。

（そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど）

「地域の人々と語る音風景」：エデュケーションを行う（教える）という目線ではなく、私自身も参加者の一人として人々とともに音風景を楽しみ、音環境についての気づき・発見を共有することを心がけている。

- ・「想と創」：現実にきこえる音への意識のみならず、昔の音や未来の音を想像する、自ら音を表現するなど、培った「聴く感性」を想像力と創造力に広げることを目指したい。
- ・「継続は力なり」：地域活動によるはたらきかけは、周囲の理解を得られるまで時間がかかると実感。とにかく「続けること」が大切と考えている。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

- ・ 年齢も育った環境も異なる人々に、一様に聴覚に働きかけることの難しさを感じる
が、参加者それぞれの興味深い反応を見ることができて面白い。
- ・ リピーターは、あきらかに「聴く姿勢」「音への反応」が積極的になっている。継続的なはたらきかけの効果を実感している。
- ・ 同じルートを用いて定期的に行うことで、前回の反省を次回に生かして実施内容をブラッシュアップできる。
- ・ 定期的な開催により、チラシや Web・新聞等のメディアを通じて情報発信の機会が増え、本企画に参加しなくとも、地域の人々に音風景に意識を向けるきっかけとなっているのでは？
- ・ この企画を実施していくことで、自分自身にとっても様々な発見・学びの場となっている。



左：周りの音にじっと耳を傾けている参加者たち（〈夏の章〉より）

右：サウンドウォークで作成した音のリストをもとに音の地図を作成中（〈秋の章より〉）

(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ
2. 実施展開する拠点
- ③. 多数の参加者
- ④. 周囲の理解
- ⑤. 反響（意見や助言、評価や批判）
- ⑥. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場
- ⑧. 継続するための資金
- ⑨. 自身の技能・技術や知識
10. その他（具体的に）

(来場者へのメッセージ)

地域に根ざしたサウンド・エデュケーションの実践を目指して試行錯誤（奮闘？）しております。活動を始めて間もないため、サウンド・エデュケーションの手法やプログラムの内容などについて、経験豊富な皆様との情報交換を切に望んでいます。ぜひ、ご意見・ご感想・アドバイス等、宜しく願いいたします。

第4回〈春の章〉を2013年3月31日（日）に開催します。歴史のロマンを感じながらの「音聴き歩き」に興味のある方、本企画のルートを実際に歩いてみたいと思った方などなど、ぜひご参加を！

音を楽しむONGAKU

池田 邦太郎（帝京平成大学）

（実践の概要、これまでの取り組み）

「聴く」取り組み

私は小学校音楽専科時代に音楽の授業の中で、自分の気に入った音を友達に聴かせる活動や天気の良い日に屋上に寝ころんで音に耳を傾ける活動を行ってきました。

児童は自分の気に入った音を見つけることにより自分の価値観を知ることになります。そして教師や友達がその価値観（それぞれの児童が気に入った音）を認めることで児童の自己肯定感が育ちます。

「つくる」取り組み

聴く活動とともに、自分の気に入った音を友達の音と組み合わせてグループでアンサンブル曲をつくる活動も行ってきました。

自分の音と友達の音とを組み合わせて、何もないところから自分たちだけでアンサンブル曲をつくる活動は、互いの価値観を共有する活動でもあります。他人の価値観を認め、自分の価値観とすりあわせて新たなものをつくりあげる活動は児童のコミュニケーション能力を高めることになります。

（そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど）

価値観が多様化し情報が氾濫している現代の日本社会は、いじめや虐待・失業不安や老人の孤独死の問題など、かつては考えられなかった様々な問題を抱え、残念ながら昨年まで14年連続自殺者数3万人以上という先進国ワーストワンの国となっています。こうした社会の影響をもろに受けているのが今の子供たちです。

そんな子供たちに笑顔あふれ、自分らしく生きられる未来を提供するために、私は小学校現場で「音を聴く活動」「音を組み合わせてアンサンブル曲をつくる活動」を通して児童の自己肯定感をほぐし、友達とコミュニケーションする力を育ててきました。

私は再現芸術としての音楽ではなく、全ての人を笑顔にする“音を楽しむONGAKU”の考え方を広めていきたいと考えています。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

昨年神戸で開催された私のワークショップに、東京八王子市で私が初めて小学校音楽専科として教えた女子児童が、なんとお母さんになって小学生のお子さんを連れて参加されました。その時の感想を全文紹介します。

『約20年ぶりに池田先生の音の世界に触れることが出来て、私の人生のベースはここにあるな～と感じました。学校の屋上に上がって“目かくしバンド（児童全員にオリジナルアイマスクを作らせていました）”をして、聞こえてくる音を体と心全部で聴いたあの時間。「あの音もステキ!」「この音もステキ!」と夢中になって音探しをしたあの時間。友達の出す音をみんなで聴き合ったあの時間。あれは自己肯定感を存分に受けて受け止めてもらった時間だったんですね。だから大人になった今も忘れないし、思い出すたびに心が穏やかなあたたかい気持ちになるんですね。

今日は幸せな楽しい時間を有り難うございました。先生の益々のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。』

小学校3年生だったあの女兒からこんな立派な感想をもらえるなんて、教師冥利に尽きる感動！



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ
2. 実施展開する拠点
3. 多数の参加者
4. 周囲の理解
5. 反響（意見や助言、評価や批判）
6. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場
8. 継続するための資金
9. 自身の技能・技術や知識
- ⑩. その他（具体的に）音を楽しむONGAKUを広めるために「親子のための手作り楽器ワークショップ」や「子育ての講演」などをやらせてほしい。

(来場者へのメッセージ)

私は障害児（者）や認知症のお年寄り達と“音を楽しむ池田式即興連弾”を実践しています。インターネットで【音話の森】を検索すると動画がご覧頂けますので、ご感想などをメールでお聞かせ願えれば幸いです。

音のメディアリテラシー

～テレビを音から読み解く&音をテーマにしたメディア表現～

兼古 勝史（武蔵大学・立教大学 他）

（実践の概要、これまでの取り組み）

私たちを取り巻く放送・通信等様々なメディアは、コミュニケーションや表現のツールであるだけでなく、既に私たちにとっての日常の“環境”、あるいは“風景”の一部であり、私たちの記憶や記録を支えつつ、世界と私たちとをつなぐ大切な窓でもあります。こうしたメディアの役割や意味、可能性や限界・課題を知り、メディアを自ら使いこなして生きていくことは現代を生きるすべての人々にとって必要な「生きる力」であり、社会や学校でメディアリテラシー教育が行われているゆえんでもあります。

しかしながら、こうしたメディアリテラシー教育の実践の中では、「音」が注目される機会はあまり多くはありません。音の「メディアリテラシープロジェクト」では、一般的には「映像」メディアの代表と思われる、テレビなどの音の側面に注目し、音からメディアとそこに連なる世界を読み解くとともに、「音」をテーマにメディア表現をしてみる実践活動等を展開しています。

これまでの主な実践

【社会教育】

- ・早稲田大学エクステンションセンター、メディア系講座（講師）
『あなたの知らないテレビの世界』『メディア戦国時代～テレビとネット社会の今を読み解く』
～「テレビを聴く～ニュース・ドラマ・CMの音の世界」（2005—2007）、
～「テレビを聴く～音のメディアリテラシー」（2009-12）

- ・としま音の道しるべ

（公益財団法人としま未来文化財団タウンデザインセッション）（講師）

音から地域を発見し、映像作品として表現するワークショップ（2012）

- ・「みんなでつくる四日市フォトCM」ワークショップ他（音の泉サロン）（2009,2010,2011）

【学校教育】（小中高等学校）

- ・千葉大学教育学部附属中学校「音楽科」での“聴く力”の学習の一環としての、
“音のメディアリテラシー”授業の実践（講師）（2007-2008、2009）、公開研究会（2009）
（椎名尚子 千葉大学教育学部附属中学校音楽科教諭（当時）との共同研究）
- ・千葉市立西の谷小学校「おんがく」（5・6年生）での
“音のメディアリテラシー”授業実践（2009）（ゲスト講師）
- ・神奈川県立相武台高校情報科授業「メディア論」
“音のメディアリテラシー”授業実践（2008）（ゲスト講師）

【専門教育】

- ・駿河台大学メディア情報学部～サウンドデザイン演習Ⅰ「テレビを聴く」（非常勤講師）
（テレビ番組をジャンル別に音から分析しグループ発表）
- ・立教大学社会学部メディア社会学科TBS寄附講座「論」これからの放送メディア」
～「テレビを聴く～ニュース・CM・ドラマの音風景」（講師）（2009）
（大河ドラマの効果音、ジブリ映画の日米効果音比較、ニュースの音今昔） 他

(そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど)

映像の中に音を見つけ、音の中に光景を感じる想像力。作品の中に表現されていることだけでなく、何が表現されていないかを考えること、伝えないことの豊かさ。沈黙の雄弁さ。

地域の市民一人ひとりの“暗黙知”が、それぞれのメディア表現を通して共有され“集合知”となることで、既存の地域像や価値観にゆさぶりをかける。メディア＝風景。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

- ① テレビには音の器であり、そこには放送以前からの音の文化が息づいている
- ② 音楽の授業の一環としても、メディアリテラシーは大きな可能性がある。例えば、音や音楽を「使う」「選ぶ」「デザインする」という発想で対峙するとき、従来の演奏・歌唱・鑑賞・作曲とは異なるアプローチで音や音楽の価値と児童・生徒が向かい合うことができる。
また、教科としての「音楽」がなかなか乗り越えられなかった「楽音」と「非楽音」といった区別をメディア表現の中ではしなやかに乗り越えられる。
- ③ メディア教育やメディアリテラシー、メディア研究の中で音の重要性を訴え行くために
サウンドスケープの研究・実践の分野からのアプローチが重要。映像＝視覚中心だと見えにくいテレビ等の別の側面が見えてくる。今後のテレビ研究やテレビ批評の中に「音」の部分は大きな可能性と意義をもっている。
- ④ 音をテーマにしたメディア表現は、地域を音から発見し、耳の感性を開く上で可能性がある。
- ⑤ サウンドスケープに関する、地域・市民の暗黙知を集合知にして発信していく手法として有効

(実践等の写真)

まちの音取材風景



写真と録音による映像作品づくり



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ ②. 実施展開する拠点 ③. 多数の参加者
4. 周囲の理解. ⑤. 反響（意見や助言、評価や批判） ⑥. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場 ⑧. 継続するための資金 ⑨. 自身の技能・技術や知識
10. その他（具体的に）

（ハンディ録音機、撮影機材、PC、編集機器・ソフトなどの機材の確保、参加人数が増えるほど確保が難しい。公立学校などで行う際にネット接続なども特に制約があり難しい。学校「音楽」科の先生にもっとメディアリテラシーのことを知ってほしい。）

(来場者へのメッセージ)

私たちはメディアを通して風景を体験している、ともいえます。メディアを考えることは世界とのかかわりを考えることであり、サウンドスケープの考え方や深いつながりがあると思います。サウンドスケープとメディアリテラシー教育、メディア研究の接点は、とても重要な領域だと思います。皆様のご意見、ご助言、ご指導、ご支援をよろしくお願い致します。いっしょに「音のメディアリテラシー」を広め深めて行きませんか？

教育の零度の実現

鈴木秀樹（慶應義塾幼稚舎）

（実践の概要、これまでの取り組み）

2000年に慶應義塾幼稚舎（小学校です）でサウンド・エクスプローラ部を創部。2005年から2010年までは慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ・統合研究機構でサウンド・エデュケーション・プロジェクトを実施。クラブ活動をメインフィールドにして、小学生を対象としたサウンド・エデュケーションの実践や、教育カリキュラムの開発に取り組むと共に、親子向けのワークショップや教員向けの研修会の講師なども行っている。

（そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど）

近年は、子どもたちと共に音を聴き、積極的受動態へ誘うことが「教育の零度」の実現であることを認識し、サウンド・エデュケーションを広く教育現場で実践していくことの重要性を研究している。

「教育の零度」には2つの意味がある。1つは、「そこに教育は無い」という意味での教育の零度。つまり、サウンド・エクスプローラ部の活動は、基本的にはただ子どもたちと並んで音を聴いているだけで、特に何かを教えたり指導したりということがない。と言うことは、所謂「教育」は無いと言わざるを得ないだろうということ。もう1つは、しかしこの「共に音を聴く」ということが、「教師は上から教えこむだけでなく、自分と共に対象（世界）に向き合ってくれる存在なのだ」という意識を子どもたちにもたらし、そこに築かれた関係性が後の教育を支えていくだろうという意味での「零度」である。

教育のスタイルを「教師－子ども」の二項関係から「対象(世界)－教師－子ども」の三項関係へと移行させていく。その力がサウンド・エデュケーションにはあると信じている。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

音を聴くことで感性が大きく醸成される場面に何度も立ち会ってきたのだが、その時、人は「積極的受動態」と呼ぶべきモードになっていることを発見したのが最大の成果だと考えている。



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ ②. 実施展開する拠点 3. 多数の参加者
4. 周囲の理解. 5. 反響（意見や助言、評価や批判） 6. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場 8. 継続するための資金 9. 自身の技能・技術や知識
- ⑩. その他（具体的に）

例 活動を同時に多くの参加者が行うための機材（ノート PC）PCM レコーダー）

(来場者へのメッセージ)

積極的受動態へ誘って音を聴くことで「教育の零度」が実現される。このことがサウンド・エデュケーションの持つ大きな価値である。
この考えについてのご意見をいただければ幸いです。

美術大学における サウンド・エデュケーションの実践報告

佐々木 幸弥（ヤマハ株式会社・武蔵野美術大学非常勤講師）

（実践の概要、これまでの取り組み）

- 武蔵野美術大学デザイン情報学科で実施している授業「音響文化研究」を、サウンド・エデュケーションの実践の一例として紹介します。
- この授業は、音を単なる物理現象としてではなく、音楽や音環境など様々な視点からとらえ、さらには音を取り巻く文化的背景から社会現象に至るまで、実例を挙げながら幅広く考察します。音への関心を深め、これまで気づかなかった新たな価値を発見することが出来ます。
- 開講から今年度で10年目を迎え、受講生は既に300名を超えています。受講した学生は、その後も音への興味を持ち続け、卒業制作において、あるいは卒業後も音と取り組んで、新たなサウンドデザインの提案をするなど、多くの成果を上げています。
- 発表内容
 - 授業概要
 - サウンドマップ
 - 学生による制作音具
 - 授業風景紹介

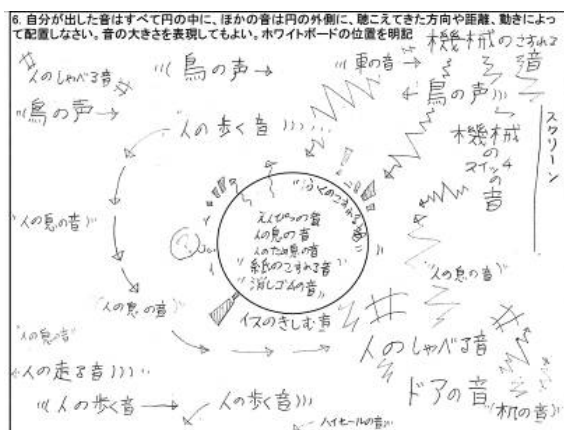
（そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど）

- 聴くことや音具に触れるなどの実体験を通じて、音の魅力を徹底的に追求します。
- 音に対する幅広い知識と感性を身につけ、今後の創作活動の要素の一つとして「音を大切に活用できる力」を養います。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

- イヤークリーニングで聴く事の出来た音のリストは年々増加していますが、反対に音の想像力は年々乏しくなっています。また、高校までの教育課程で、何らかの形でサウンド・エデュケーションを体験したり、あるいはサウンドスケープを知っている学生が年々増えています。
- 課題の音具制作では、美大生ならではの斬新な発想と共に、音との関わりを丁寧に探求する姿勢を見出す事が出来ます。
- この授業を受講した学生はその後、音と環境、音と文化について明確な問題意識を持って学習や研究を継続しています。サウンド・エデュケーションは20前後の大学生でも十分に効果があります。決して遅すぎることはありません。

(実践等の写真) サウンドマップ(左)と制作音具(右)



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ ②. 実施展開する拠点 3. 多数の参加者
4. 周囲の理解、⑤. 反響（意見や助言、評価や批判） ⑥. 他の実践等に関する情報
⑦. 成果の報告・発表の場 8. 継続するための資金 9. 自身の技能・技術や知識
10. その他（具体的に）

(来場者へのメッセージ)

是非たくさんのご意見をお聞かせいただければと思います。よろしく願いいたします。

「レッジョ・エミリア市の幼児教育」 にみる サウンドエデュケーション

小林 田鶴子(共栄大学)

(実践の概要、これまでの取り組み)

レッジョ・エミリア市はイタリア北部にある小都市であり、ここで行われている幼児教育は 1990 年代から世界的に注目されている。この教育は第二次世界大戦後、保育者を中心とする市民が集まって「自分たちの保育園を作ろう」としたことから始まり、現在も市民との「学びの共同体」を形成していることが大きな特徴である。30 年以上にわたって「創造性」と「共同性」を重視した独自の実践を重ね、小グループの子ども達による長期間のプロジェクト学習を基本とする。クラス担任教師以外に「アトリエスタ」と呼ばれる芸術家（教師）と「ペタゴジスタ」と呼ばれる教育学者が配置され、子ども達の活動が展開されている。その活動は、もちろん「音楽」や「美術」といった枠は無く、子どもは環境（周りの人間も含む）から学び、直感を得、自ら働きかけていく。このことは、まさにサウンド・エデュケーションが目指そうとすることではないか。

発表者は前任校の美術教員よりレッジョ・エミリア市のことを聞いたが、2011 年 4 月に東京のワタリウム美術館で開催された展覧会にて「階段の声」というプロジェクトを知り、以前、自身が北海道江差町で小中学生を対象に実施したプロジェクトとほぼ同じことを幼児がやっていることに驚く。その後昨年 9 月 16 日から 1 週間現地を訪れ、幼児学校を見学し、その教師から話を聞いた。

ポスターセッションでは、その時の写真とともに具体的な教育環境を紹介する。またこれまでの出版物等から示唆を得たものも紹介する。

(そのころ＝目指すもの、大切にしていることなど)

サウンドエデュケーションは音楽教育の中では「創造的音楽学習」や「音楽づくり」の分野で扱われることが多いが、レッジョ・エミリアでの教育は、まさにこの子どもたちの「創造性」を思う存分発揮させ、活かしている教育である。またこれは、幼児教育に留まらず、小学生以上のどの年代にも通じるものであり、その範囲も芸術教育全体に及んだ内容である。

(実践によって見えてきたこと、発見・成果等)

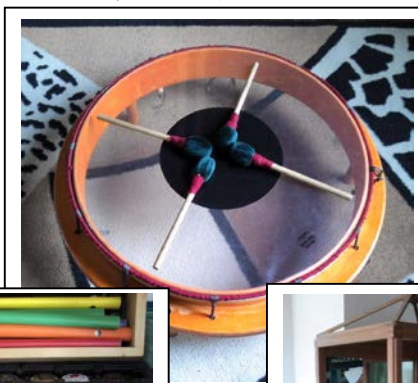
日本の幼児教育でも、見た目には同じようなことがなされているが、レッジョ・エミリアでのそれは、あくまでも子どもが主役で、子どもからの発想であるところに意味がある。教師たちは保護者と話し合いを持ち、共に子どもに寄り添って子ども達の活動を見守る役割に徹している。

(実践等の写真) レゴマゴ幼児学校にて

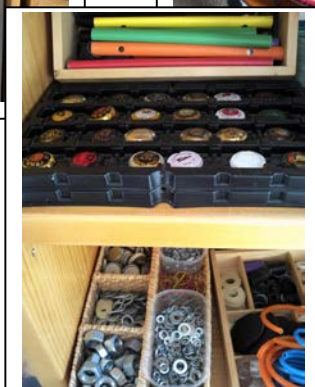
手作りのチャイムや小物楽器



マレットの置き方も工夫しているドラム



廃物利用の素材



上下左右が姿見の箱



(課題 今欲しいものは)

1. 一緒に進める仲間やスタッフ
2. 実施展開する拠点
3. 多数の参加者
4. 周囲の理解
5. 反響（意見や助言、評価や批判）
6. 他の実践等に関する情報
7. 成果の報告・発表の場
- ⑧. 継続するための資金
9. 自身の技能・技術や知識
- ⑩. その他（具体的に） 研究するための時間

(場者へのメッセージ)

とにかく「幼児教育」というと幼児のレベルに合わせた方法論が語られるイメージが大きいですが、ここで行われている教育はそうではない。そこに現れることものの姿は「小さなアーティスト」であり、自由でのびやかな表現者である。

日本サウンドスケープ協会2012年度例会「サウンドスケープのころ - ポスターセッション&フォーラム -」

第2部 フォーラム(報告)

Part 2 Forum

話題提供者 : 池田邦太郎(帝京平成大学)、鈴木秀樹(慶應義塾幼稚舎)、小菅由加里(作曲家)、
 神林哲平(早稲田実業学校初等部)、兼古勝史(武蔵大学・立教大学)
 ファシリテーター: 土田義郎(金沢工業大学)
 例会総司会: 小林田鶴子(共栄大学)
 会 場 : 青山学院アスタジオ 地下多目的ホール
 日 時 : 2013 年 3 月 10 日(日) 14:45~17:00

本報告は 2012 年度、日本サウンドスケープ協会例会「サウンドスケープのころ~ポスターセッション&フォーラム」の第2部として行われた、サウンド・エデュケーションをテーマとしたフォーラムの様子を、録音記録をもとに、当日の登壇者(メインスピーカー、ファシリテーター)、及び、会場からの発言者の許諾を得て、文字化し掲載するものです(ただし、連絡を取ることができず掲載の可否を確認出来なかった一般参加者の一部の方の発言部分については省略してあります)。

登壇者(メインスピーカー、ファシリテーター)プロフィール

メインスピーカー(話題提供者)



池田邦太郎(帝京平成大学)

27 年前、まだサウンドスケープという言葉さえ知らなかった小学校音楽専科教諭時代に、屋上で日向ぼっこをしながら目を閉じて、ただただ音に耳を傾けるという授業を行っていた。諸先輩から「聴いた音を図形譜等にして再現したりするのなら良いが、ただ音を聴くだけでは音楽の授業にならないのでは。」と意見された。音楽を鑑賞すれば音楽の授業になるのに音を鑑賞するだけでは音楽の授業にならないと言うのだ。音楽と音の違いは何処にあるのか。その疑問に自分なりの答えを出してはいたが、決定的な答えを見出したのは 2001 年にイギリスの小学校で「音を楽しむ音楽(ONGAKU)」の公開授業を行った際に、私の授業を参観していた現地の音楽教師や作曲家によってミュージックと音楽の違いを気づかされた瞬間だった。

音を楽しむONGAKUの授業を追求し続けた結果分かったことは、この教育が自己肯定感を育てるということであり、その根底にあるのは“森羅万象を愛でる日本人独特の感性が生んだ音を愛でる文化”だということ。現在は小学校現場を離れ国内外を問わず幅広く“ONGAKU”の素晴らしさを伝える活動を行っている。

音楽専科教諭として“音を楽しむONGAKU”の授業を追求し続けた結果分かったことは、この教育が自己肯定感を育てるということであり、その根底にあるのは“森羅万象を愛でる日本人独特の感性が生んだ音を愛でる文化”だということ。現在は小学校現場を離れ国内外を問わず幅広く“ONGAKU”の素晴らしさを伝える活動を行っている。

鈴木秀樹(慶應義塾幼稚舎)

2000 年に勤務校でサウンド・エクスプローラー部を創部。以来、クラブ活動をメインフィールドにして、小学生を対象としたサウンド・エデュケーションの実践や、教育カリキュラムの開発に取り組む。近年は、子どもたちと共に音を聴き、積極的受動態へ誘うことが「教育の零度」の実現であることを認識し、サウンド・エデュケーションを広く教育現場で実践していくことの重要性を研究している。教育のスタイルを「教師—子ども」の二項関係から「対象(世界)—教師—子ども」の三項関係へと移行させていく力がサウンド・エデュケーションにはあると信じている。





小菅 由加里 (作曲家)

サウンドスケープの思想に出会った時、自作品に風景音から想を得たものが多いことから興味を持ち、さらに認識を深めるべく日本サウンドスケープ協会に入会。以来、マリンバ、打楽器アンサンブル、合唱などのために意識的に音風景をイメージした作品の創作や、音風景をテーマにした演奏会を行う。一方、楽曲を介してではなく、直接人々に「音環境を感じる」ことをはたらきかけたいとの思いから、2012 年より一般市民を対象としたサウンドウォークを定期的実施。地域に根ざしたサウンド・エデュケーションの実践への試行錯誤を繰り返している。

神林 哲平 (早稲田実業学校初等部)

大学にて学際的な領域である人間科学を学ぶ。野外で鳥の調査をしたり、音楽活動を始めたりと当時から音については高い関心をもつ。2004 年に公立小学校教員となり、2006 年より現職。2007 年に私学研修でサウンド・エデュケーションの存在を知るとともに、サウンドスケープ思想の学際性にひかれ、関心を深めていく。その後、環境教育の視点からサウンドエデュケーションの授業実践を行う。現在は「現象学的聴取」という原理を方法論に、自己肯定感や感性を育てていくことを目的として、日々の実践にあたっている。



兼古 勝史 (武蔵大学・立教大学)

酒場のピアノ弾き、高校音楽講師の後、サウンドスケープ研究機構にて音からのまちづくりや音の環境教育等を担当。その後 BS ラジオ放送局「St.GIGA」ディレクター、CS テレビ放送「旅チャンネル」プロデューサー等を経て現在は再び教育の世界に。「音のメディアリテラシー」教育をテーマに小中高등학교・大学、社会教育などで、日常を取り巻く環境でもあり世界への“窓”でもあるメディアとりわけテレビについて音から読み解く授業や、街の音風景をテーマにしたメディア表現のワークショップ等を実施。

ファシリテーター

土田 義郎 (金沢工業大学)

大学にて建築を学ぶが、環境と人間に対する関心から、大学院では音環境の心理に関する研究をはじめ。音の持つ意味への興味からサウンドスケープ思想に出会う。博士(工学)学位論文は「記号的機能を有する音に関する研究」。金沢に拠点を移してからは、環境保全やまちづくりの活動の中でサウンド・エデュケーションを試みるようになる。複雑な系としての人間と社会をとらえる事を目指している。現在は金沢工業大学環境・建築学部教授。日本サウンドスケープ協会の他、日本建築学会、日本音響学会、日本騒音制御工学会、日本デザイン学会、各会員。



小林（例会総合司会）：只今から、第 2 部・フォーラムの方に入りたいと思います。では、ファシリテーターの土田さん、このあとよろしく願いいたします。



土田（ファシリテーター）：フリップボードの方は皆さんお手元に回りましたでしょうか。ペンとフリップボードがあれば OK です。

まずは、今回 5 名の話題提供者をお招きしております。最初に自己紹介及びサウンド・エデュケーションに取り組み始めたきっかけ、これを各自口頭でいただこうと思います。サウンド・エデュケーションへの原点を問うという形で会場とやりとりをしたいと思います。



■サウンド・エデュケーションとの出会い

～音を楽しむ～

池田：帝京平成大学の池田です。もともと小学校の音楽の選科の教師をやっておりまして、今から 28 年前にある友人から「音を楽しんでもらう、音楽じゃなくて音を」といわれた時に、音とはなんぞや、音楽とは何ぞや？を深く考えていくうちに、いろんな音を楽しむことを始めて…。そうしたら結果的にそれがサウンド・エデュケーションというものだった。その頃はサウンドスケープという言葉も知らなかった頃だったんですけど、「ああ、なるほどこういう風な見方があるのかな」と。ただそれを学校教育の中にどういう風にやったらよいか…結果的には、僕は取り入れてやったんですけども、なかなか浸透しないまま今に至っているという感じがしています。

サウンドエデュケーションというのは一つの言葉ですけども、そこには大きな問題提起が含まれていると思っています。再現芸術の場合には答えがある程度ありますから、その答えに向かって皆がやる、当然教師は上から指導する立場になりますけれども、サウンド・エデュケーションというのは音の感じ方ですから、答えがない。答えがないだけに、今までの既成の教員のやり方だと、答えがないものを子どもに教えることができないんですね。でも子どもと同じ目線で、寄り添いながらそれを見ていく、脇で同じように見ている大人がいるっていうことが子どもにとってどれだけ必要なことか！それがサウンド・エデュケーションのきっかけになる…浸透のひとつのキーワードになるんじゃないかなと思っています。

僕が始めたのが、「音を楽しむ」ってどういうこと、その質問から謎を解いていくうちにサウンド・エデュケーションに行き着いたわけです。

～サウンドエクスプローラーとの出会い～

鈴木：慶應幼稚舎の鈴木と申します。早稲田の神林さんと私を見比べるだけでも慶応と早稲田では、どちらの教員が真面目かというのがすごくよくわかるという（笑）もちろん向こうの方がまじめなのですけども。

1995 年くらいですか、インターネット博覧会で「サウンドエクスプローラー」というサイトがありました。それが、すごく面白いサイトだったので大好きだったのですが、スポンサーが外れてそれが失くなるという時に、何かできないだろうか、とサイトのファンの人たちで集まったときがありました。結局、結論としては「各自何かできることをやってみようか」みたいな感じになったのです。それで、では自分にできることは何だろうかと思ったときに、自分の仕事の中でできることという…クラブ活動だったらちょっと何かできるかも知れない、と思って立ち上げたのが西暦 2000 年でした。と言うと格好いいですけども、実はそのサウンドエクスプローラーというサイトの中で西表島の音をライブ配信していたのです。それが大好きでずっと聴いていて、ああこの音をこの場所で聴きたいなあ、どうやったら仕事で行けるだろう…そうだ！クラブを作って合宿をすればいいんだ!! と思ったのがきっかけで、それ以来ずるずるとはまって今に至っております。

～捜し求めていたものに出会った～

小菅：静岡県浜松市から参りました小菅由加里と申します。普段は作曲・演奏活動・音楽指導などの音楽活動しております。サウンド・エデュケーションをはじめたきっかけは、もともと自分の曲に、お琴やガムラン、打楽器アンサンブルなどの作品に、風景を描写したものや風景音からインスピレーションを得たものが多いとは感じていたんですが、ある時、サウンドスケープという概念に出会い、大変興味を持ちました。しかも私はカナダのトロントに住んでいたこともあって、マリー・シェーファーもカナダのトロントの出身ということで、何かすごく、自分が捜し求めていたものに出会ったという気持ちになりまして、3 年前にサウンドスケープ協会に入りました。新人ですので、この

ようなところにやってきて申し訳ありません、という感じです。(笑)

サウンドスケープ協会の会員になったあとは、意識的に音風景を作品にすることをしていたんですけども、そのうちに作品を通してではなく、直接人々と語りあったり、人々に何か働きかけをしたいと思ひまして、地元でサウンド・エデュケーションの実践を昨年から始めました。始めてからまだ日が浅いので、この場で勉強したいと思ひます。よろしくお願ひします。

～環境教育的視点からのサウンド・エデュケーション～

神林：早稲田実業学校初等部の神林です。よろしくお願ひいたします。私は、大学では環境教育に関する卒論を書きました。当時からバンドで音楽活動をやってたり（今もやっています）、野外調査で鳥の声を聞いたりという経験があって、昔から音に対する関心は高かったと思ひます。

「教師は話が長い」とよく言われるので、なるべく喋るのではなく聞く方を大事にしようという問題意識を持って、ずっと教師生活を送ってきました。そうした中、私学研修という東京都の私立小学校が一堂に集まる機会がありまして、2007 年は慶応義塾幼稚舎が会場でした。その研修の特設部会でサウンド・エデュケーションを鈴木先生がご担当されており、参加した時に「これだ！」と思ひました。それがきっかけです。その後は、環境教育的視点からサウンド・エデュケーションを行ったり、今日紹介したようなワークシートで実践を重ねたりしているところです。

～音楽を学ぶ先にあるもの～

兼古：兼古と申します。僕はもともと高校の音楽の教師になりたくて、教育学部というところに行っていたんですが、それでサウンドスケープという、当時まだデビューしたての鳥越けい子先生が、確か『現代詩手帳』というところにサウンドスケープのことを書いていらして、それを読んで「これだ！」と思ってしまった(!?) のがきっかけといえばきっかけです。で、それから、実は環境教育とか、まちづくりとサウンドエデュケーションみたいなことを鳥越さんなどと一緒にやらせていただいた時期もあったのですが、あるきっかけがあって、メディア…ラジオ、というか放送の世界に関るようになりました。実はそこで僕は大きなショックを受けたことがあったんです。

その、セント・ギガという放送局に行ったときに、最盛期には 100 人くらい制作関連のいろんなスタッフ…社員も契約のスタッフも含めていましたけれど、その中で…音の放送局ですよ、音楽専門局です、でも、いわゆる音楽大学を出ているとか、あるいは教育系音楽学科だとか、いわゆる音楽を専門に学びましたという人が数えるほどしかいない、3 人とか 4 人とか…で、音楽というよりはむしろ美大を出ていますとかね、それから放送学科や放送芸術学科を出ました、とか…で、それがいけないと言っているわけではないのですが、すごく僕はそれが不思議に思えて…つまりその美大を出た人はいっぱい音の放送の世界にきているのに、どうして音大や音楽教育系学科を出た人はいないんだろうか…。考えてみると、自分たちが学校でずっと小中高と、

下手したら(?) 大学いっても「音楽」を学んで、その先に「放送する」とかそういうことが全然つながっていないんだっていう現実にびっくりしてですね…その先の社会につながっていない…当事と比べれば、今は多少つながっているとは思ひんですけど…そういう状況に驚いて、じゃあ学校の「音楽」っていったい何のためにやるんだろう? 学校で「音楽」を学ぶ皆が音楽家になったり音楽教師になったり研究者になるわけじゃない、だとしたらそれはどういうところで仕事や社会に結びついていくんだろう…っていうことを考えるようになりました。それがひとつのきっかけで自分がメディアの世界、特にラジオ・テレビとかインターネットの世界に関るようになったときに、そういうものと学校の音楽というものが、遠いようで実は近いかも知れないということ。意外と本当は音楽っていろんな場面で使われているし、音も効果音など多様に使われているので接点があるんじゃないか、ということが興味関心のひとつでした。

もうひとつは、実は、学校の音楽の先生はよくご存知だと思うのですが…“楽音”つまり音楽で使う音と、それからいわゆるサウンドスケープなどでよく対象になる“環境音”(非楽音)＝自然音・都市の音…実はサウンドスケープという枠組みの中では、それはあまり峻別するという事ではないと思ひのだけれども、学校の音楽の中では、それらが結構、分け隔てがあるというか、楽器の音とそうじゃない音…最近授業の中で少しは取り入れるようになってきたけれども…やっぱりでも最後は楽音の方が大事、みたいなところがあるじゃないですか。どうしても、これは音楽用の楽音、これはそうじゃない自然の音・その他の非楽音…という峻別というかヒエラルキーを乗り越えなれないでいるという印象があったんですね。ところが、実はメディアの世界、放送とかそういうところで番組や作品を作ったり送ったりしていると、これ全部「等価」なんです。「人間の声」それから「音楽」「環境音」「沈黙」…それらの音をどう組みあわせて作っていくかっていうことを日常的にやっているわけで、こういうものと接点を作っていくことによって実は(教科としての)「音楽」科がこれまで乗り越えられなかった壁を乗り越えやすくなるんじゃないかって言う気持ちがありました。

そんなことで、あえて学校の「音楽」科の中でメディアリテラシーという視点を持って、音とメディアのことをやっていこうというのがひとつ、それからもうひとつは「音楽」という教科の枠をはずして、社会教育とか生涯教育とか、そういうところで音からテレビを読み解くみたいなことをやっています…こうした自分の実践が、果たしてサウンド・エデュケーションなのか…僕もよくわかりませんが(笑)、でもメディアの体験というのは恐らく僕らの風景とか環境の体験の中のひとつだと思えば、根底のところではサウンドスケープの発想とすごくつながっていることじゃないかな、という思いでやらせていただいています。

土田：はい、どうもありがとうございます。まずはその辺でとりあえず…。

それぞれ、立場は様々ですね。音楽教育がひとつ大きな柱

にはなっているかなと思いますけれども、環境教育も柱になっているし、メディアも関わってくるし…マリーシェーファー自身もエコロジー思想との関りがあったわけで、そういった点から、世界をつなげるための、世界をつなぐ装置としてのサウンドスケープという視点があったのではないかと感じます。つなぐために何をするかという、やっぱり音をしっかりきくことなのではないでしょうか。

さて、サウンドエデュケーションを行ってきた方々としては、どういったアクティビティ、イベントがお薦めかをお尋ねします。フリップボードの方にキーワード的に書いていただけたらいいかなと思います。その間に会場の方は、これからどんなことをやるかというのかなとか、抱えている悩みを書いていただきたいと思います。この際、聞いておきたいことなどがあれば、これもフリップボードの方に書いておいてください。

まずは「お薦めアクティビティ」ですね。私も実はまだ、皆さんの答えは知らなくて…一応軽く打ち合わせはしてきてはいるんですけれども、どんな風な答えを皆さんがご用意されてきているかというのは私も知りません。それでは皆さん一斉にお願いします。



■お薦めアクティビティ

土田：端っこから読んでいきますね。池田さんが「自分の気に入った音の紹介」、鈴木さんの「旅」、小菅さんが「昔の音、今の音」、神林さんが「ゲーム性の高い活動」…ちょっと抽象的ですが、兼古さんの「あつちよつと小さいですね」「テレビを聴く…大河ドラマ・トレンディドラマ…誰の耳?」なんかいくつかキーワードが並びました。…えー、ちょっと最後の方が気になりますけれども…じゃあどなたにやってもらいましょうか。小菅さんの「昔の音、今の音」っていうのは、これはポスターと関わるのかと思いますけど…あらためてその辺の説明をしていただけますでしょうか。

～昔の音、今の音～

小菅：これは私が企画実施してあらためて気がついたことなんですけども…今の音しか聞いていない、やっぱり聞くとすると今の音にしか集中していないというか…今聞こえ

ている音がうるさいとか、静かだとか…でも、歴史を訪ね歩くサウンドウォークをしてみて、昔の音を想像するということが大変面白いということに気がつきました。聴覚だけではなくてイメージーションを刺激するというか、そこからまた未来の音も想像してみることにつながるというか…音から街の移り変わりを眺めるというのは非常に面白いなと思いました。ぜひこれは、いろんな意味で五感プラスアルファの部分があると思いますので、やっていただきたいと思います。

土田：たとえば、どんなものか、昔の音は想像できるんですか？

小菅：今、史跡巡りをしながらワークショップをやっているんですけれども、ガイドさんから歴史にまつわるお話を聞くんですね。犀ヶ崖古戦場というところがあって、そこは昔、三方原の合戦で徳川軍が武田軍と戦って負けて敗走した際、その崖に布の橋を架け、そこに追ってきた武田軍が落ちた、という逸話があるところなんですけれども、その落ちた時の音を想像してみるとか、その崖から落ちた人たちのうめき声が聞こえたときの人々が怖がって、その落ちた人々を成仏させるために唱えた念仏が、遠州大念仏という郷土芸能に発展したということとか、トンネルの中でも、そこは昔、軽便鉄道が走っていたので、じゃあ周りの人たちにはどんな風に聞こえていたのだろうかとか、その駅のあった近くにはどんな賑わいがあったのだろうか、ということを想像してみます。今は大変静かなところですけども、当時は賑わっていたんじゃないかというのを想像するのが面白いです。

土田：はい、ありがとうございます。

鈴木：大賛成で、「昔の音を想像する」というのを一回やったことがあります。慶應義塾を創立した福沢諭吉が長崎に一年いたときに逗留していたお寺があるんです。そこへ子どもたちを連れていったことがありました。建物は代替わりしていますが、庭の石だけは昔のままなのだそうです。その庭の石の上を下駄を履いて歩いてみるということをやったら、カラコロンと音がするわけですが、「これ、福澤が聴いたんじゃない?」みたいな話で、かなり盛り上がりました。そのお寺を、ただ福沢先生がここにいました、というだけで見に行くと3分で見学は終わってしまうのですが、そういうことを始めると1時間でも2時間でもやっているんですね。昔の音を想像するって割といいのではないかと思います。

小菅：今、石の話が出ましたが、浜松城の石垣は当時のまま残っているんです。当時の石を見ながら、どうやってこんなに重たい石を運んだとか、その時どういう音が出たか想像するというのを前回のワークショップでやったんですけど、非常に盛り上がりました。

土田：はい、ありがとうございます。では次は…旅の話を

聞きましょう。鈴木さんお願いします。

～音の旅～

鈴木：旅と言ってもそんな大げさなものじゃなくて、別に西表島まで行かなくてもいいのです。ちょっといつもと違う隣の駅で降りてみる、というぐらいのことでもいいので、普段の自分と違うところ、非日常に身を置いてみると音を聴くモードになりやすいかな、というのが子どもたちと活動していて感じます。ですから学校の中で聞くよりも、ほんの 100 メートルでも離れたところで「ちょっと違う所で聴いてみようか」と言うだけで違うのですね。そういう風なことがなんとなく実感としてあるので、一歩足を伸ばしてみると、何か聴きやすいのではないですか、ということを感じました。

土田：今、散歩番組が結構はやってますけども、一歩路地を入るだけで今までと知らない場所に出会えたり、そうすると今まで聞こえていた音が遠くに聞こえて、異次元に迷い込んだような感じを受けたりとか、そういうこともあります。身近な生活の中の旅っていうのも非常に面白いと思いますね。

では次は…池田さんをお願いします。

～自分の気に入った音を伝えよう～

池田：この「自分の気に入った音を友達に紹介する」という活動なんですけども、今、保育園や幼稚園でもワークショップをするんですけれども、目を閉じると音と心が一直線で結びつく。僕は子どもたちに「目を閉じると聞こえてくる音があるんだよ」と伝えてたりします。僕の授業では、全員が手作りのアイマスクを持っていて必ず目を閉じます。で、それぞれ音の紹介をするんですけれども、自分の気に入った音を選んでくるって言うのは、これ自分の価値観で選ぶわけですから、自分の価値観を人に紹介するって言うことに結果的になりますね。最初は、音を楽しく聞くためには目を閉じたら面白く聞こえるぞっていうことから始まったんですけれど、やり始めたらこれが 1 年から 6 年生まで、もうとにかく今日はここに 5 人いたら、この 5 人の中で探してきた音を見つける…本当に年間を通してこれは飽きないですね。それこそ例えばこの爪をこする音とか、もうわけのわかんないめちゃくちゃ小さい音を持ってくるんですけれども、その中であったのが、卵の殻の音っていうのがショッキングでしたね！あの卵の殻の薄皮を剥いて、こうやってパラパラとやると金貨の音がするんですですよ！…もう想像もつかない音を子どもが持ってくるわけです。で、そういう音、自分がこれがいいなって思っただけで音を持ってくる。それを友達に紹介したそのときに、同じ価値観を共有する。「わぁ！凄いな!!」。それから絶対に聞こえっこない音を持ってきたときに、聞こえっこない音なのに「すごくよかった」って（皆が）いうんですよ。つまり出しているだろうと子どもはたぶんイメージするかと思うんですね。そうすると本当に聞こえない音まで聞こえてきたりとか、今まで創造もしたことがない音に対する価値観を自分と友とで共有する…。ところが中に、時々いる

んですね。いじめられっ子…つまり、あんな音なんか聞きたくないよって言う反応。そうすると彼が持ってきた音に賛同する子は一人もないわけですよ、誰も手をあげない。気に入った音、どういう風にするか…「これは君が一人だけで感じられる君スペシャルな感性なんだね。なんて君は素敵な感性を持っているんだろう！俺もおもしろいと思うけど、他の方にはわからない。なんて俺たちはいいんだろう！」とこういう風に言い合ったりします。それから、毎回「その音つまんねえよ」「その音つまんねえよ」って毎回つままない方に手を上げる子…実はこれとても大事なことで、他のみんなが「楽しい音」「おもしろい音」って言うっているときに一人だけ「つまんねえ」。これすばらしいんですね。たいていの場合には、その子のために思っているから、その先生がこれを望んでいるだろうと思うので、いい方に手を上げるんですよ。でも悪い方に手を上げたときに、もう「君は素晴らしい！」他の子たちがみんな言っているときに一人だけ悪いといえる。これこそあなたがどういう感じだかをちゃんとと言っている。自分の意見を持っていることだよ。これが大事なんだよ、と伝えます。

こういう取り組みを始めて、その子の価値観で言うのは、自分がこれを大切だと思っただけでことは素敵なんだよっていうことが、子どもたちに段々浸透してきたときに、僕ひとつ、大失敗したことがあるんですよ。ある時、お茶碗で…ここに茶碗がありますね…連合音楽会の最初に 5 つのお茶碗を、カンキンコンコンカンキンコンコンカン…って鳴らす音から始まる音楽会だったんですね、僕たちが作った音楽。そのうちのお茶碗の一個が、叩いているうちにひびが入って、カンキンコッ！コンカンカンキンコッ！コンカン…って、音がそこで止まっちゃうんですよ。で僕は、同じ音がする…結構難しいけれど…同じ音がするコップを持ってきた取り替えといたんですよ。…そしたら怒られました（笑）。カンキンコンコンカッ！…って「それが止まるのがよかったのに!!」どうして、カンキンコンコンカン…って「いい音持ってきたの？」…その時に彼…彼女は「あたしはこっちの方がいい」という風にちゃんとと言えることにホッとしたんです。ああ…よかった！この子は自分の価値観でちゃんとやってくれた。翌年、僕また失敗しちゃいました。いやあ、やっぱり教師は「これがいい」と思ってしまうところがあるんですよ。その子は椅子の天板を叩いて、コンコンコン、コンコンコン、コンコンコン…それが叩いているうちにネジが緩んできちゃって、コンガーコン、コンガーコン、って…。それで、その椅子と同じ音がするやつを学校中探して、椅子の座る部分の天板って結構いい音するんですけど、なかなかその音とそっくりの音がなかったんで、学校中探して、ようやく同じ音の椅子を見つけて替えてあげたんですよ。…そしたらまた怒られました。「先生よけいなことしないでくれ」って、あの、コンコンガー！ってあれがいいんだって。自分では、「子どもがいい」音って言っときながらやっぱり教師というのは、どうしても「あの音がよかっただろう」って思ってしまうって替えてしまう。子どもの価値観を大切にすることっておきながら、まだまだ、やっぱり僕は、こっちの音の響きの方がいいだろう…と。先ほど鈴木先生の方からお話し

があった、教師というのはどうしても、子どもの身の丈にあったサイズというか、子どもにはこっちの方が素敵じゃないかな、こっちがいいんじゃないかな…と考えてします。でも、こっちの方がいいじゃない？こうやったらもっとよくなるよ、って言うことは、下手すると、今の君はダメだよって言うことになるんですよね。なので本当に子どもの価値観で選ぶことが非常に難しいところにもってきて、このサウンド・エデュケーションというのは、答えがないものを教師と子どもとが、同じ地点から見られる。



今までの学校、音楽科教育というのは、すべて再現芸術ですから、教師が答えを持っています。だけどこれは、そうじゃない、新しい価値観で何かものを作っていく。しかし、子どもの感じ方と僕の感じ方は違う。「でもそれがいいんだよ、そして二人で…みんなでやる。ひとつのものを作ってこうよ。」こういうような価値観をつくることができるのが、このサウンド・エデュケーションであり、今、音楽教育で言われている「音楽づくり」、これも下手をすると、昔の「創造的音楽学習」のように、結果的には「きちんとした音」をつくるための音楽の構成を知るとか、そういう風になってしまうので、ここで思いきってサウンド・エデュケーションということの意味を前面に持ってきて、答えのないものをみんなで考えていく、それが大事なんだよ、というような教育概念を植え付けていくということによって、僕は、音楽という教科は、これから伸びていくと思います。(現実には)今どんどん削られています。何故かという、「音楽」が巷にあるわけですから、今までのような再現芸術を教えるような学科ならもうどんどん廃れていく。新しい価値観を生み出すという意味でのサウンド・エデュケーションを学校音楽科の中に広めたい。学校音楽科は、プロの音楽を作るんじゃないと言っておきながら、結局、音楽専科の先生が、教えている…唯一ですね、あの「算数専科」はいませんものね、まあ教科によっては若干最近います、国語専科っています…でも本当は専門性がなくてもできなきゃいけない、このサウンド・エデュケーションというのはかえって、音楽大学じゃない、専門じゃない人がやる方がいい。地方に行けばそういう先生方がいっぱいいます。音楽専科ではない先生が自信を持って、この日本中にサウンド・エデュケーションの

考え方を広めていけば、とてもいい出発点になるのではないかと思います。だから「サウンド・エデュケーション元年」といってもいいんじゃないか、去年ぐらいからね。…というような思いで、これを広げていくために今、取り組み始めていることがあります。今日本当は、NPO法人を立ち上げてこの会場で賛助会員を募ろうと思ったんですよ。そしたら今日申込書を持ってくるのを忘れて、せっかくみんな集まるっていうのに、忘れちゃって(笑)、またお声がけしますので、ぜひ、私の「音を楽しむ音楽の会」、NPO法人でございませう。賛助会員募集してますので、また何かの折には、お話しさせていただけたらと思っています。

土田：ポスターのところに名刺も置いてありましたから、それをね持っていけば…。

池田：あ、ぜひよろしくお願いします。

土田：えー、気に入った音、は私も、小学6年生を相手にやったことがあったんですけども、ま、中にひねくれている子もいてね、あのお、尾籠な話だけど、トイレで自分のウンコする音がいいとかって(笑)、そんなこと言う子もいるんで、どうしようかと…。

池田：でも最高ですよ！！(皆笑) あのお、それこそ正に、その子が感じた世界ですよ。例えばその子はもしかしたら、先生を困らせようと思って言っているのかも知れない、でもそれは子どもたちは普通にやることですよ(笑)。だから、まともに「なるほど！ぜひみんなで聞きたいから、今度録音してきて」なんて、やってもいいと思うんですよ。(皆笑) それくらいに、本当に子どもの立場に立って、子どもが面白いと言ったものを、それはぜひ聞いてみたい、…もちろん聞きたくない人は耳ふさいでいいんだよっていう、聞かない権利も認めながらも…、やっぱりそれをまともに取り上げてあげることで、新しい何か…それこそサウンド・エデュケーションの第一歩として、答えがない世界を拓いていくように思うんです。

土田：それで私、なんでその音がいいの？って理由を聞いたんですよ。そしたら、トイレね、ちゃんとうんこが出ることはいいことなの、…そういうのが健康を表す音だから、それはいい音なんだ、って理由づけしてくるんで、あっそうなんだ！って(笑)びっくりしましたよ。

池田：僕はそこでね、理由づけとか、そういうの好きじゃないんですよ(笑)。なぜかっていうと、感じるものは感じるだけですから、それに理由をきいてみてもどうなのか…。

土田：でもききたくなりません？

池田：ええ！?なんで？(会場笑) そこがまたおもしろいところで、さっきあの、(第1部ポスターセッションでの、神林さんの展示と説明にあった)「10分間でできるサウンド・エデュケーション」、あれちょっと僕ぜひ、実際に

どういことやっているのかおききたかったんですけれども…。感じたものを感じるっていうのを、その、文章に書くと非常にね、…確かに良さもある、結果的に見えますからね。でも、危険でもあるわけですよ。なぜかってその、それが書けないといけないっていう風に思っちゃう子がいる可能性があるんでね、なので、僕はなるべく結果はきかないようにしてるんです。ききたくないもん。

土田：わかります。なかなかそのきかない勇気っていうのは、必要なんだなってことがわかりました。そうか…きいちゃいけないのか…

池田：いやいや、いけないわけじゃないですよ。（皆笑）あの、屋上で聞いた音、屋上で目をつぶってリラックスしてきいた音を、あとで感想…よく「音楽」って、きいたときに感想書くじゃないですか、あれ、嫌っすよね。（笑）

土田：確かにあれはいやですね。

池田：でも、気をつけないとそれに近いものが…例えば、うんこの音なぜいいのって言われて…いいからいいわけで、それを理由をきかれても困っちゃう子たぶんいると思うんですよね。

土田：その子は立派に答えてくれましたけどね。

池田：それは素晴らしいと思いますけども。

土田：ま、あのお、ま、年齢にもよると思うんですけれども、自分の嗜好をきちっと形にできるっていうようなことも、ひとつあるかなって思っってそういうようなことを訊いて、まあ6年生ぐらいだったんでね…。

池田：難しいのは、教育の世界って、本当にすぐ答えを求めてしまうことが多いと思うんですよ。僕は、あなたがどういう風に感じるかっていう、感じ方をやっているの、極力訊かないことで、子どもが安心して感じられる、その場を保証するのは、僕は大切だと思ってるんですね。でも学校現場では、それを、今特に日本の教育っていうのは、文章で表せるとか、一見いかにもよさそうなんですけれども、もっと感じたままでほっといてくれないかなって（笑）そういう気持ちはあります…

土田：なるほど…。続いては、ちょっと抽象的だったので、ゲーム性など…ゲーム性の高い活動ってことで、神林さんお願いします。

～ゲーム性の高い活動～

神林：はい。私もきかない勇気が持てずに、その…。きいてしまうので…（ご指摘）ありがとうございます。私はゲーム性の高い活動と書いたのですが、要するに遊びの要素が入ったような活動は子どもたちに人気だということです。今は小学校 2 年生の担任ですが、子どもは単純な面もあっ

て、ワークシートに「なんとかゲーム」と書いていただけても、配ったら大喜びです。「やった！ゲームだ、ゲームだ！」という風になる。例えば今日発表した音追いかけゲームとか、音作りゲームとか、「ゲーム」をつけると子どもは楽しんでくれるという面があります。最近おもしろかったのは、音交換ゲームという活動です。二人でペアになって、端っからそれぞれ好きな音を出しながら歩いて行って、真ん中でその自分の出した音を交換するというゲームです。クラスにはだいたい数人お調子者がいるので、その子達はもうノリノリで、それこそ顔まで作って、本当に全身感覚的に音を出してきます。それだけでも面白いのですが、そのペアがすごく真面目な女の子の場合でも、音を交換したときには、お調子者の男の子の動きをやらないといけません。それがまた面白くて。これはペアの組み合わせ次第だとは思いますが。

池田：おもしろい（笑）

土田：はいありがとうございました。ゲームと銘打つだけで子どもは、ついノってしまうところがあるわけですね…逆にそれは、社会人向けとなってくると、ゲームという子ども向けととらえられてしまうことがあるかもしれませんね。今、結構社会人向けの講座も盛んで、なんとかを「学ぶ」ってなると 60 歳以上の方がどんと押し寄せたりしますけど、またその、年齢に応じた引き寄せ方みたいのもあるかもしれませんね。はいどうもありがとうございました。じゃ最後に、に兼古さん…。

～百年前からある音を探せ！～

兼古：はい、先ほど小菅さんのほうからもお話が出ていましたが、実は、昔の（今はもう）「ない音」を想像する、というのもとても楽しいんですけど、僕がやってみて面白かったのは「（今も残っている）昔の音」を探すっていうアクティビティをやったら結構盛り上がり、この間も、埼玉県川口駅前「百年前からある音を探せ」みたいなお題でやるとですね、意外となかなか見つけられなくて苦労するんですけど、地元の中学生在が「あそこの工場は古いよ」とか連れて行ってくれて、今度はその工場の人に「あそこの梵鐘は古いらしいよ」とか、「その学校は 103 年前からあるんだ」とか教えていただいて、結構意外といろいろ時代を超えて受け継がれている地域の音というのが見えてきて、皆で「一番古い音を持ってくる」みたいな、そういうアクティビティも面白いなあといいながら聞いていました。

～テレビを聴く～

兼古：で、その古い音という話とちょっと関係するんですが、「テレビを聴く」というアクティビティ。これは本当におもしろいと僕は思っていて、誰でもすぐできるんですね。簡単なんです。テレビを壊さなくても、別にテレビつけて、目をつぶってもいいし、観てて音に注目してもいいんですけれども、例えばニュースを「聴いて」みてください。NHK…、最近は少し違ってきていますけど、NHK

ニュースは、音楽がなしで始まることも多いんですけども、音楽があったり、環境音…現場音ではじまるんですけど、オープニングが終わって、4秒沈黙するんです、4秒。最近違うんですけどね； 4秒っていうのは、実はスピーチの極意でも、何か言いたい時があるときに、「そして私の言いたいことは…（沈黙4秒間）…実は…」この4秒の間ってのは実はすごい大事ですよ、というようにNHKではこう「沈黙」というものをものすごい上手に使っているんですよ。（会場 ほう、うん…）で、この沈黙って言うのは実は、こういう風に「起立・礼」でも、柔道などの試合でもそうですけど、すごくなんか、真剣に集中してきけよ、みたいな時の儀式というか、儀礼だと思うんですよ、そうやって考えていくとNHKはやっぱり上手にあの公共放送っぽい「フォーマル感」っていうのを、あの沈黙を使って出してるのが、わかるんですね。この2-3年は民放化してきて崩れちゃってるんですけど…、とかです



ね。ドラマとかで、大河ドラマの中のいろんなシーンにあの、音効さんの隠れたメッセージがあってですね、まあ、有名どころでいうと、あの、人が死ぬか、死ぬ直前の予感のところとか不幸の前兆という場面では、結構トラツグミが鳴いています。だいたい、あのお（口笛でトラツグミの鳴き声の真似）「ヒー、ヒー」っていう、夜とか白晝の場面で…。これ聞くと、ああ「もうすぐ死ぬな」この人っていう（会場笑）…。最近だと『アテルイ伝』にも入りましたし『天地人』でも『篤姫』でも、しばしば死を暗示させる場面とか不幸の前兆みたいな所でトラツグミの鳴き声が聞こえてきます。それから「企む」ところや「謀りごと」の場面に必ずといっていいほど、フクロウの声が入ってたりですね…。こうしたお約束の音っていうんでしょうか、それ一つ知ってるだけで、大河ドラマが何倍も楽しめます。

他にも色々な事例があるのですが、もう一つは現代もののドラマなんですけどこれも面白くて、実は僕はトレンドドラマとかはあまり見ない方なんですけど、あれは同じテーマとか同じ原作を昔と今で何十年か隔ててやったりするんですよ。ちょっと前のNHKの『氷壁』なんてあったでしょ？あれは井上靖原作のものですが、ああした今と昔で同じストーリーのものを観比べてみると同じ会社のシーン、駅のシーン、街のシーン、でもその音の違いに驚くんです。

20年前、30年前のタイムカプセルなんですよ、テレビって。なぜ今こんなことを言うかという、テレビは今年、放送開始60年でNHKなんかは積極的に昔の番組を『NHKアーカイブス』なんかでやっています。これは60年という節目の年だからそういうチャンスがより多くあるのだと思いますが、本当に面白いです。ドラマも昔のドラマなんかやったりします。そんな時に注目してほしいのが、その音は「誰の耳」なのか…つまり、「聴取点」の問題ですね。その中のシーンの音が、誰の聞いた音として表現されているか、これを注意して視聴するだけで、発見があります。例えば「事件モノ」「刑事モノ」。『事件記者』（1958-1966）とか『太陽に吼えろ』（1972-1986）、或いは最近の『相棒』（2002-）とか聴き比べてみると…一番わかりやすいのは電話のシーンなんですが…電話のシーンって「もしもし」って言って相手の声が聞こえているってことは、その時テレビから出ている音は、電話をしている人の耳になっている。「もしもし」って言って相手の声が聞こえてこない場合には、横にいるかカメラの位置に耳があるわけですね。或いは物語りのト書きみたいに「神の視点」だとその両方の音が入っていたりする。答は今敢えてこの場では言いませんけれども、昔の刑事物、今の刑事物とで違いを比べると見えてくる。ちょっとマニアックですが、テレビというのは映像だけではなくて、実は聞いてみようと思って付き合うと実に面白い発見が色々あります。そんなことで「テレビを聴く」というアクティビティを私はお薦めしています。

土田：ありがとうございました。確かにテレビのCMなんか聞いてみると面白いかもしれないですね。今年はまだですが、6、7月くらいになると、テレビからやたらと風鈴の音が聞こえてきます。ただ、その風鈴の音が、画面にはガラスの江戸風鈴が映っているのですが、音は南部風鈴。これ、実際に経験して「えっ」となったんですけども、メディアの人が意図してやったのか、それとも外してしまったのか・・・（笑）

兼古：それで言うんですね、最近、私が観て（聴いて）笑っちゃった映画があるんです。ビデオ屋さんにも置いてありますけれども、確かアメリカ人の女性が制作した、東京を舞台にした怪獣みたいなのが現れる不思議な映画なんですけど…（※『バトルフィールド TOKYO』（2003））、二人のアメリカ人ビデオジャーナリストが取材中の東京に巨体怪獣が出現して街中パニックになる中逃げ惑う、見るからにあまりお金かけていないB級映画があるんですね、それが実に面白くて…。それこそ東京の表参道とか青山とか渋谷とかの場面が出てくるんですけどそこについている音がめっちゃくちゃ（笑）で…。まず救急車のサイレンの音が「トーテートーテー」ってヨーロッパ風です。完全に。あの人がそうだと思っている音の、なんて言うか、あれはミスなのか、あれはあれで真実なのか、というくらい誤解に満ちた音の風景が面白いです。そういうふうに時代だけではなく国や地域の音の違いを比較するのも面白いなおもいます。

土田：なんかイメージの世界と現実の世界のギャップというかね、音に注意している人と注意していない人の違いが見えてくるのかもしれないし、じっくり見ると面白いですね。色々とおすすめのアクティビティを聞いてみましたが、さて、次の話題にいきたいと思います。

三番目は「心がけていること」です。色々なノウハウがあったり、ノウハウ以前の問題であったり。どういう意識でやるべきか、例会のタイトルも「サウンドスケープのここ」なので、その「ここ」となる基本の部分。姿勢と言っているかもしれませんが、そういうことについて何かあれば書いていただきたいな、と思います。

これは書かれた人から伺いましょう。悩んでいる方もいらっしゃるの。それでは兼古さん、ひき続いてお願いします。

■心がけていること

～スタンダードは必要か～

兼古：はい、これはすぐに書きました。僕は2つ書きました。1つは「スタンダードをつくらないこと」。先ほどの池田さんのお話にもありましたが、これが正しい、これがスタンダードだとこちらで決めてしまわないこと。メディアでも教育でもなんでもそうですが、一番怖いのは、教育の中でそれを取り扱うことによって「これがもっともその中心だ」「スタンダードだ」と、こちらに伝える気持ちではなくても伝わってしまうことがあると思うのです。例えば沖縄料理を紹介しようという時、料理って本来、同じ沖縄料理だって家庭ごとに、地域ごとに、様々な味があるわけですが、だけど「はい、沖縄料理です」とメディアや教科書で紹介した途端に、それが沖縄料理の中のもっとも標準みたいなことになっていくようなところがあります。そういう風にならないように、本当は一人一人個別だということをととても大事にしたいなと思っていて、一人一人の体験や感覚の中に真実があるんじゃないかな、というふうに思います。もう一つは、特に「テレビを聴く」なんていうことを実践する時に重要なことなんです、そこに何が（どのような音が）「表現されているか」ということも大事なんです、同時に何が「表現されていないのか」ということをいつも注意して僕は観る、聴くようにしています。そこにはないもの、ないこと、伝えられていないこと、隠されてしまっているものは何なんだろう、あるいは本来そこにあってもおかしくないのに、抜け落ちてしまっていることは何なんだろう、ということを考えて見ていくことによって、メディアの向こう側の世界が見えてくるようなことを気にしています。

土田：はい、ありがとうございます。まず「スタンダードをつくらない」というお話でしたけれども、基本的なものがないと困りませんか？

兼古：あの、基本的なものがないと困るのは僕なんですけど、それは「誰が困るのかな」ということなんじゃないかな

と思うんですね。生徒は困るんだろうか（？）もちろん世の中色々な枠組みは必要だと思うんだけど、何かを問うたり作っていく時に、答のないものの中では、僕は取ってここを作らないようにした方が面白いんじゃないかなと。

土田：まあシェーファーさんも本を書いて、みんなそれをスタンダードにしつつ、それをやるなっていうことが大事なんじゃないかと私、そう思っているんですが。

兼古：スタンダードを知りつつそれを破る、それに囚われないっていうことは大事だと思うんだけど、一度スタンダードの安心感を知ってしまうと、そこから飛び出せない。たぶん対小学生とか対中学生とかって言った時に、特に答えが決まっていなかったものに関して、スタンダードっていうのを、どこでどう持たすかっていうのは、とってもこの我慢のしどころのような気もしているのですが、どうでしょうかね。

土田：この辺は、私なんかはやっぱりスタンダードはあった方が取り組みやすいのかなという意識もあるんですけども、その辺は見解の相違もあるところかな、とも思います。スタンダードはあるんだけど、それに囚われずにやっていくという方が幅が広げやすい。サウンド・エデュケーションっていうことも世間に広まりやすいんじゃないかなという思いもあります。

兼古：スタンダードっていうのはどういう意味で？

土田：やり方においての標準というかやり方、こんな風なやり方があるよ、ということですね。こういう場合はこんなふうにするとどんな風な想定できるものがあるので、想定できないかもしれませんが、こういうやり方をまずやってみようかなということもあるんじゃないかな、と思いますけれども。

兼古：たぶん私がイメージしていたのは「答にスタンダードはない」みたいな感じではあったんですけどもね。一つの作法とかやり方のスタンダードというのはあった方がいいとは思いますが、確かにスタンダードがあってそれを崩していく方がやりやすいんだと思うんですね。何もなくて自由より。もしかしたらそんなに違わないのかもしれないんですけど、スタンダードっていうことをどう提示するかということで、受け止める方が「それでいいんだ」「それに近いほうが価値が高いんだ」みたいな、「これこそ正しい声の出し方だ」とか、もちろん、あるんですけど、なんかそれを前面に出すことにすごく躊躇しているんですけども、どうしたらいいでしょうね。（笑）

土田：考え方としては色々あると思いますが、答え方においてのスタンダードは確かに不要かなと思います。すべてのやり方を受け取るようなところがサウンド・エデュケーションにはあると思います。ありがとうございます。そうしたら次は神林さん。

～自分が楽しむ～

神林：私は「自分が楽しむ」ということを心がけています。これはサウンド・エデュケーションに限らず教育全般に対して言えることですが、授業でもなんでも教師が楽しんでやらないと、子ども達には楽しさが伝わらないと思います。今は真面目なふりをしていますが、おじいちゃんキャラの「かんじい」とか、オネエキャラの「かんねえ」とか、「なんとかかんとかよお」と言うだけで子どもが楽しんでくれます。このように色々な工夫をしながら、日々実践をしています。サウンド・エデュケーションで言うと、先ほどの答え方という話と似ていますが、子どもたちの多様性を楽しめるようになると、なんでも楽しめるようになりますね。実践を始めた当初、失敗してしまったのが「1分間静かに音を聞こう」というアクティビティです。子ども達は緊張していると、ついついクスクスとか笑い声とかを出してしまうと思いますが、その時に叱ってしまったのです。「なんで静かにしないんだ！」って（笑）。これは大失敗でした。笑ったら笑ったで、それは問題のないことだと今は考えられるようになりました。そうした子ども達の多様性を受け止めていくことが、自己肯定感や他者理解につながっていくと思います。このように、多様性を楽しむということを今は大事にしています。



土田：ありがとうございました。「エデュケーション」という言葉は何かしら上から目線と言う気がしますけれども、自分が楽しむとなると同じ目線になるような感じがしています。自分が楽しめるようなことをすると「これ、楽しいんだよ」というのに相手も乗ってくるというようなところもあるかな、と思います。それにしても、神林さんの「オネエ」なところも見てみたいような気がします。（笑）以後、「オネエ」でお願いします。（爆笑）では、小菅さん、お願いします。

～参加者・子どもから学ぶ～

小菅：今のお話と思いは同じなんですけれども、私もサウンド・エデュケーションという、エデュケーションは「教育」なのですが、「教育する」という目線だと違うかなということを感じました。私自身も参加者のひとりとしてその場にいることを楽しみ、参加した人からいろいろと教えてもらっています。音の感じ方というのは人それぞれ

で、私の場合、大人も子どもも一緒にやっていますから、子どもから学ぶことって意外と多いので、今は固まってしまった脳細胞を子どもによって柔らかくしてもらっているというような姿勢をこころがけてやっています。私の活動の中では、○、△、□の音を探そうということをしているのですが、最初のうちは「なぜその音が△だと感じたの？」と問いかけてしまっていたんです。でも問いかけても答は返ってこないんですね、子どもから。「なんでかわかんないけれど、そう思ったんだ」と。それを聞いた時に、それ以後、問いかけないようにして、子どもが△だと感じたなら、それは△なんだと、自分も教えてもらうような感覚で一緒にやっています。

土田：ありがとうございます。臨床心理で「オウム返し」というのがありますよね。相手の言ったことを、そのまま相手に繰り返す。それによって相手側は鏡を見てようになるんですね。「ああ、自分は今こう言ったんだ」ともう一回受け止めることになる。それで自発的に出てくるものであればいいのではないかと思いますけれども、確かに「なぜ」って聞かれると対決になってしまうようなところがあるのかな、と。それは私も気をつけたいと思います。では、鈴木さん、お願いします。

～説明しない、アウトプットを求めない～

鈴木：「説明しない」ですね。実はサウンドスケープ協会の発表でもたまにあるのですが、何か音を聴いていただくことってありますよね。その時に、音を流しながら説明してしまうことってあります。私も昔よくやってしまっていたのですが、あれはやはり良くないな、と思うのですよ。とにかく説明しない。説明してしまうということは、その音を聴いてどう感じるかという選択権を相手に渡さないで自分で握ってしまうようなところがあるんですね。ですから、説明しない。子どもたちと音を聴きに行った時も、説明してしまったら、横に並んでいるのではなくて上に立ってしまいますから、説明しない。じっと音を聴く。何か言いたいことがあっても聴いている最中は我慢する。説明しないということを心がけています。

土田：理由を聞かない、説明しない、かなり禁欲的な立場ですね。

鈴木：まあそうなのですが、学校教育って子どもにすごくアウトプットを求めるんですよ。作文を書かせたり、テストで何点だとか、音楽だったら歌をちゃんと歌えているとか、すごくアウトプットを求める。でも、本当はインプットだけでもいいのではないかと感じる場面もいっぱいあるんですね。それを大事にするようなことも心がけています。

土田：私もついつい説明したくなりますね。私の出したパネルなんかもそうですけれども、やっぱり理由とか根本原理とか、言わなくていいところを、興味を持って自分から動くところへ誘導してやればいいものを、ついつい「これは

こうなんだよ」って言いたくなっちゃう。確かにありますね。その対象が誰かにもよりますけれども、相手が興味を持ってのってきたらその時に対応するのがいいのかな、というようなことを感じています。さあ、満を持して池田さん、お願いします。

～ムカデのダンス～

池田：自分の考え方、感じ方を相手に押し付けないっていうわけだけれど、僕は押し付けているっていうわけではないのだけれど、「僕はこう考えている」っていうのを前面に出しすぎてしまうきらいがあるので、今ずっとお話があったように自分の考え方をやる前に相手に「これは僕の考え方、感じ方なんだけれどキミはどう？」っていうのを常に教師側が意識していないと出てしまう。今、ひとつ説明をする、説明をさせるのに、昔、自分が楽しんでこのサウンド・エデュケーションをやっている時に「どうして池田さん、楽しいの？ それのどこがいいの？」と聞かれた時に、「だって楽しいんだもん、この楽しさをどうやって説明すればいいの？」と思っていたんですね。それはミハエル・エンデの書いたある逸話の中に「とても踊りの上手なムカデがいた。意地悪なカブトムシがムカデに手紙を書いた。あなたは何番目の足を動かした後に何番目の足を動かすとあんなに上手に踊れるようになるんですか？ それを読んだムカデは、考えた。考えたら踊れなくなってしまう。」というのがあります。僕も、どうして楽しいのかを考えたら楽しめなくなってしまうのではないかな、というところはあります。ただ、アウトプットとインプットの話、これも強烈な圧力で、音を僕達、聴きますよね。「聴きっぱなしでいいの？」って聞かれるわけですよ。それが実は聴きっぱなしってことはインプットの音楽だ、非常にいっぱいインプットしているからそれが結果としてアウトプットされるのだけれど、ある時、こんなことがありました。僕の音楽会、合同音楽会をやっていますけれども、既成の曲をやったことはほとんどありません。全部、石っころとか足音とかそういうものだけで音楽を作っています。石っころの音を出している時に、この石っころで自分だけにしか聞こえない音を出してごらん、て言うんですね。石っころをカチッとすると、もうそれだけでみんなに聞こえてしまう。自分にはしか聞こえない音を出すにはどうしたらいいんだろう、とみんな必死にやるんですよ。ものすごい緊張するんですよ。音をだす時にすごく気を遣う。合唱でピアノで高い音を出すので、ファの音をだす時に弱々しい声で出していたんですね。石っころで出してごらんって言った時とガラッと変わっちゃうんですね。緊張感のあるピアノニッシモ。それからある子が乱暴に楽器を叩いていた。木の切れっ端を叩くとき、どこでやればいい音がするだろうって言った時、ものすごく注意してやっていたんですね。だから「音を大事にごらんよ」って言ったらがらっと変わっちゃう。つまり音の聴き方をいっぱいやっていると、そういうことができる。そうしたらある先生が「池田さんのやっている『音を聴く』っていうのは非常にいいことだから、池田さんの合奏や合唱、あれだけいいんだから、いっぺん連合音楽会で普通の演奏をして、こういうことをや

ればこういうことができるようになる、ピアノの音も出せるようになる、音も大切にする、そういうことをすればみんな池田さんのようにやるよ。」と言われたんです。その話を聞いた時に「絶対やっちゃいけない」と思いました。なぜかという、インプットの音楽が、アウトプットの音楽を上手に演奏するために、そのインプットがあるんだ、っていうことじゃ意味がないんですね。感じるっていうことを大切にしていますから。でも、今のたぶん音楽の授業に入ってきている「音楽づくり」というのも下手をするとかにアウトプットするか、アウトプットされたものをどう理解するかのために音楽作りをしましょうってなってしまう可能性はすごくあります。ちょうど日本の伝統音楽をやりますよって言った時に、和楽器、琴とかやりますよね。あれは結果的に言うとピアノが琴に変わっただけで何の変化もないんです。日本の音楽というのは非常に難しいもの、やっかいなもの、僕は尺八や詩吟をやるんですが非常にやっかいです。やっかいなものを一生懸命やるから意味があるんで、それをドレミで表しちゃったらあれはもう文化の伝承ではまったくないわけですね。本当のことを考えるとアウトプット、インプットはともにとても大事。それから説明することも大事。でも同時に、我慢することとても大事なんです。スタンダードという考え方も、そういうものをスタンダードとするかという捉え方で全然変わってくるし、もっと言うとエデュケーションって一般に教育と訳されますが、僕はエデュケートっていうのもともと「引き出す」っていう意味があるって聞いたことがあるんです。僕の場合は子どもの中にある何かを引き出すこと。お前それいいじゃん、面白いよ、他の人とは違って君はそう感じたの、面白いねって、気がつけば再現芸術としての音楽がエデュケートする音楽に替わっていく。完成品があるんじゃないでサウンド・エデュケーションに関してはまさにエデュケートすることが中心になる、そういう画期的な方法だと思います。エデュケーション、何かを引き出すっていうことというサウンド・エデュケーション、まさに答がない問題、あなたがどう感じるかを大事にする、だからこそそれがとても大事だと。僕も反省を含めて、自分の感じ方を大事にして「こうなんだよ」ってなるべく言わないようにする、僕が子どもに言うことが相手から引き出す、結果的にサウンド・エデュケーションの真骨頂なのではないかという気がしています。もともと僕は自分が楽しいのがよくてやっているんですよ。だけどついつい「これ楽しいだろ」「これいいだろ」って言いすぎてしまうような気がしますので、ちょっと自戒の意味を含めて思いました。サウンド・エデュケーション。これからの日本の子どもに絶対必要だとおもいます。

土田：はい、ありがとうございます。ムカデのダンスね。ちょっと後で調べてみます。なにか暗黙知みたいなものってありますよね。それは音楽にしても何にしてもそうなのかもしれませんし、何か美を感じるものは「なんでいいの」なんて本来、言えぬもので、それをまず感じてもらうことでまあどの段階かで評論することによって出てくるのかもしれませんが、それはまたその話で、子どもたちには特にそ

ういう話ではないのかなと感じました。

池田：特にですね、説明できた方がいいっていうことになると、結局、見る側が「この子は説明できたからいい」ということになると、特にこのサウンド・エデュケーションの場合は気をつけないといけないと思うんですね。学校教育の場合にはそれを自分の言葉で言い表せるとか文章にかけることがいいとされていますから、感じるということは違う分野だと考えないと、難しいですね。

土田：はい、ありがとうございます。次が「私の失敗例」と思ったんですが、皆さん、失敗例、どんどん晒しちゃったので（笑）ちょっと勇み足だなと思いながら、さっき打ち合わせしたのにと（笑）でも、まあかぶってもいいし、新しい失敗のネタでもいいので、ぜひとも失敗例を書いてください。あなたの失敗例から学ぶこともあるかと思います。フロアの方もぜひフリップボードに質問等書かれています。こちらからふりますので。

土田：書けた方が既にいますので、じゃあ神林さん、お願い出来ますか。

■私の失敗例

～聞くのが苦手なのは教師～

神林：具体的なエピソードというよりは、また教育全般になってしまいますが、『教師が話を聞かない』ことです。典型的な教師の口癖は、「静かにしなさい」や「話を聞きなさい」が多分ベスト5に入ると思いますが、そう言っている割に教師側が話を聞いていないことが多い。どうしても一方的な教え込みになってしまったり、なかなか子どもに寄り添って考えられなかったりすることがあります。私はなるべく「静かにしなさい」、「話を聞きなさい」とは言わないよう心がけているつもりですが、それでも日々の授業の中で、結局こちらの価値観を押し付けてしまったな、とか、子どもの考えを引き出せなかったなということがあります。そういう意味では、毎日失敗をしています。

土田：ありがとうございます。最近は大学生もなかなか話を聞いてくれなくて困ることがあるんですけど「静かにしろ」って言うてもなかなか静かにできないんで、そこはね、やっぱり先ほど兼古さんがおっしゃっていた4秒の沈黙ですか、沈黙すると「あれ？」と思って注目してくれたりするんですね。そういうテクニックを我々生かしながら進めていったほうがいいのかな、と思いますね。

神林：私も沈黙はすごく使いますね。なるべく喋らないようにしようと思って、静かにしてほしい時は沈黙をしています。

土田：ありがとうございます。それでは二番目に書き終わっていた鈴木さん、お願いします。

～つい、きいてしまった一言～

鈴木：「面白かった？」と聞いてしまったことがありました。合宿で沖縄に行った時に浜比嘉島っていう島があるのですが、そこで夜明けの音を聴いていたんですね。子どもたちと並んで。一時間近く。いい所なんですよ。波の打ち寄せる音も聞こえて、岩に囲まれていたので音の反響がすごく良くて鳥も鳴いて本当にいい所だったのです。



聴き終わって、みんなで朝ごはんの支度に向かった時、一人わりとやんちゃな子が私のところに来て「ねえねえ、今、何分くらい聴いていたの？」って言ったんで「んー、1時間近く聴いていたんじゃない？」と答えたら、彼が「ふーん」って言ったんです。ついそこで「面白かったの？」って聞いちゃったんですね。言った瞬間に「あー、聞かなければよかったなあ」と思ったのですが、向こうの方がずっと上手で「うーん、それはわからない」（笑）って言ったんです。

池田：それはやられたなあ！

鈴木：彼がそう言うてくれて助かったのですが、やっぱりそこは聞いちゃダメだったんですよね。我慢しなければいけなかったな、と思いました。それと、ちょっと話は違いますが、神林さんがおっしゃっていた「静かにしなさい」という話ですけれども、ポスター発表で佐々木さんが書かれていたことはすごくいいですよ。ブライアン・イーノの音楽をかけていて、というお話し。あれは、すごくいいな、と思いました。

土田：ありがとうございます。私なんか、大学生相手だと「面白かった？」じゃなくて「わかった？」って聞いちゃうんですけど、みんなわかったような顔はしているんですよ。ま、だいたいわかっていないんでしょうね。だから、理解っていうのは難しいですね。理解とか感じることも難しいし感じることも難しい。でも、「わかった？」と聞きたくなっちゃいますね。はい。では三番目に書き終わった小菅さん、お願いします。

～“自主性”と“メソッド”～

小菅：私は「自主性にまかせ過ぎてしまった」というのが失敗の一つです。もちろん「音を聴く」というのはそれぞ

れの能力で聴くので、こうしなさいとか、ああしなさいとか言っただけなんですけれども、地域の活動としてやっていますと年齢も含めて、色々な方がいらっしやって、しかも、どんなことをしているんだろうと興味本位で参加する方もいらっしやるし、音に興味を持っている方もいらっしやるし、色々な方がいらっしやるのでばらつきがあるんですよ、聴き方に。アンケートを見ますと、耳で聴くよりも目で見る方に集中してしまって、歩きながら聴くって難しいと感じている方が多いようです。今まで三回やりましたけれども最初の1、2回はわりと自主性に任せていて、最初に簡単なオリエンテーションをしたのですが、その後は、聴きながら歩きましょう、歩きながらメモしましょう程度に抑えていたんですけれども、アンケートで「どうやって聴いたらいいのかわからなかった」「意識が目についてしまって音を聴く方に集中できなかった」というのがありましたので、3回目を実施した時には、ここでは何を聴いてみようというのを決めまして、ここでは何の音を聴く、ここでは何のアクティビティをする、そういうのを決めておくことで、ワークショップの後半では、参加者もどうやって音を聴いたらいいかというのがわかってきて、自ら音を聴こうという自主性が出て来ました。ですから自主性に任せていたら、ただ歩くだけになってしまったかな、と。それは反省点とさせていただきます。

土田：はい、それは難しいところですね。さじ加減というか。特に小さい子どもたちなんかですとわらわらとあちこちバラけてしまったりしますし、安全の話も考えながらの街歩きをしているとそういうことも出てくるでしょうし、自主性とその辺の絡みっていうのは大変かな、と思いますね。

小菅：学校教育であれば段階的に「教室の中で音を聴いてみよう」からだんだん外に、広い所に出て行こうとなると思うんですが、地域活動だといきなり外で音を聴いてみようということで、しかも歩きながら、景色を見ながらとなりますと、何をどうしていいか、焦点をしばれないんじゃないかな、と。サウンドスケープという概念がある程度わかっていて、興味を持っている人ならいいのですが、そうでないごくごく一般の方にとってはまだまだわかりにくい。そう思います。

土田：はい、ありがとうございます。

池田：ちょっといいですか。今、それ自主性、あのその場合のオリエンタリングで音の聴き方についてやりますよね。例えば初めての人は音の聴き方ってわからないんですけれども、音を聴く方法は事前に教えていらっしやったんですか？

小菅：オリエンテーションでは、まず、1つ目の場所でじゃあ耳をすませてみよう、周りの音にすませてみようというのをやって、聴こえた音を書きだしてみようということをやっています。そして、じゃあこのようにして地図にき

こえた音を書いていこうね、だけだったんですよ、1回目と2回目は。

池田：つまり1箇所止まって聴くのは確かに方法を教えられましたね。歩きながら聴く方法はおしえていらっしやったんですか？

小菅：その時は教えてなかったです。

池田：そうですね、つまりたぶんそれは自主性ではなくて、方法をしっかりやっていたらその自主性というのとメソッドというのは別のもので、その方法をしっかり教えた中の自主性、サウンドスケープの場合、方法が決まるとかなりその中で自主性が伸びると思うんですね。ですから自主性に任せすぎではなくて、多分メソッドの問題じゃないかという気がします。

小菅：それもあると思います。自分自身もどのようにしたらよいか、わからなかったのと、1回目の実施ではうまくいっていたものですから。1回目はトライアルとしてやったので、参加者は知り合いだったりサウンドスケープに対して興味のある方だったのでできたんですけれども、それを2回目に全く知らない一般募集で集まった人たちで同じようにやったら大変だったんです。

池田：そうですね、その時に反省点、失敗点は自主性に任せすぎっていう失敗ではなくて、メソッドについての反省であったと。やっぱりこのサウンド・エデュケーションの場合には、自主性にうんとたくさん任せる部分がないと、いけないと思うので、それはメソッドについての配慮が足りなかったと捉えられた方が、本当にサウンド・エデュケーションは自主性に任せ過ぎちゃって失敗するようなことではないと思うんですよ。それこそ自主性は一番重んじられるところなので、メソッドについて考えていく方向がいいんじゃないかと思います。

～学校教育と地域活動～

来場者・池田明子：すみません、よろしいでしょうか。音を聴くというのを学校では段階的に出来る、というお話が出ましたけれども、実は学校では全くできません。ですから、民間のところで聴く活動を浸透させていくことが一番いいことではないかと思います。私は40年間、東京で音楽専科の教員としてやってきたんですけれども、しかも音を聴くのと創る活動で授業を組み立ててきたんですけれども、この音を聴くということは、文科省の聴く活動というのは、例えば低学年では身の回りの音を聴きましようということで、音を聴くことが心を育てるって思っているんですけれども、そういう活動かなと思うとそれは結局五線譜の曲を理解するためにそれをじゃあ次はどういう聴き方をするかという話で、確かに段階的にはなっているんですが、それはあくまでも曲をイメージしたものになっているので、本当に子どもたちの自主性を育てる活動にはなっていないと思います。ですから、本当に街の中で音を聴くこ

とがどれだけ大切かということで、ぜひ続けていかれたらいいなと思いました。

小菅：そうですね。学校の中では難しいことは私もわかります。もし、これを学校でやるとしたら、ということで発言しました。同じ年齢層の子が集まっているわけですから、先生がプログラムを組んで段階を踏んで計画的にできるでしょうが、地域の活動だと何も予備知識がないまま集まってくる人たちに「さあ、聴きましょう」というのが難しいということです。

来場者・池田（明）：そうですね。音楽の時間にずっとたとえば5分か10分、自分で用意してきた音、私が用意してきた音、目を閉じて音を聴くということを、ずっと続けてきたんですけれども、そこには技能もなく本当に自由に聴く時間ということだったので、そういう子が街の中で音を聴くということだったら素直に聞けるようになるかな、と思ったんです。

小菅：多分子どもたちは学校での様子と地域活動の様子とでは、違う顔を見せていると思うんですね。父兄の方もおっしゃっていましたが、普段は全然違うと。全然違う顔が見られて面白かったとおっしゃっていました。学校では多分、後で評価されることを意識してやっているのでしょうけれども。ですから面白くなくても面白かったと言っているのかもしれませんが、集中していなくても集中しているかのように書いてしまう子もいるだろうし。でも、こういう地域の活動だと素直に、面白くなかったら本当に面白くなかったと言いますからね。



来場者・池田（明）：私も子どもと一緒に外に出て音を聴く活動をした時に、噴水のところまで行ったら立って聴いた時の噴水の音と、目を閉じて聴くんですが、座って聴いた時の噴水の音って違うんだねって言われた時、全員でやってみたら「確かに」って言ったっていうこともあって、本当にあの集中して聴くっていうことが大事ななって思ったんですね。で、一つ質問があるんですが、さっきの発表の時にイヤークリーニングというのがあっておっしゃっていたんですが、どういうものなのでしょう。

小菅：イヤークリーニングはマリー・シェーフアーが提唱

したサウンド・エデュケーションのプログラムの一つで、耳をクリーニング、耳を掃除するっていうことなんです。聴こえた音を全部書きだすという音を聴く方法の一つです。だから、まあ何気なくこれまで聴き逃していた音も聴こえるように耳を集中させましょうというアクティビティです。

来場者・池田（明）：はい、私もそれやってみたんですけども、私の仲間たちもやった時に、そのイヤークリーニングをした時に、すごく上がったって、ま、高まったっていう表現だったんですけど、それはどういうことかという、聴いた音を書いた数がとても増えたので、それはすごく高まったっていう表現をされた方がいたんですけども、数の問題になってしまうとすごく危険かなと、教員としてはたくさんあった方が「この子って伸びたんだな」って捉えがちになってしまうんですけども、聴こえた音はひとつしか聴こえなかったよっていう子もいるんですね。ですから、そういうところも難しいんだと思います。どうしても数が増えると、私の聴かせ方が良くなったんだけって思っ感想を言われた教員がいたんですけども、そこも難しいなと思いました。

小菅：多分学校でやると、「たくさん聞こえる＝優秀」というような図式になりがちで、学校でやると多分聞こえなかったような音でも書きちゃったりとかっていう場合はあるかもしれませんが、地域でやると、評価はないわけですからここでは、正直に本当に1つか2つしか書かない方もいます。

来場者・池田（明）：どうもありがとうございました。

土田：そしたら次は、兼古さんお願いします。

～言葉化しない、感じ方～

兼古：失敗談ということで、「最後まで学生の名前を覚えられなかった」（笑）。本当に僕は名前を覚えるのが苦手で、高校の授業も経験したし、今は大学でもやっていますが、本当に覚えられないんですよ。ひとりひとりの顔立ちや姿や声はよく覚えていて雰囲気もわかるんだけど、本当に言葉化するというか、井上さんとか山本さんとかっていう名前を覚えるというのが正直苦手で、その人のことを覚えてないのかというと、決してそんなことはなく、すごくよく知っているんですけど、名前が出てこないだけで、言い分けっぽいですが、そういう覚え方ってあるんじゃないかと思っていて、名前はわからないんだけどその人のことはよく知っているし似顔絵もかけるみたいな…。屁理屈をいうと、音も似たようなことがあるのではないかと、何の音だから言葉としては思い出せないけれど、どこかで聞いた懐かしい音…とか。

土田：名前を呼んでもらえると嬉しいっていうのは確かにありますよね。この人名前覚えてくれたんだっていうのはあると思いますけれども…お名前何でしたっけ？（笑）

兼古：兼本です（笑）。でも、名前を間違えたりすると、やっぱり学生は本当に悲しそうな顔するし、すごく心が折れてしまいそうな感じなんだと思って、気をつけたいと思っています。

土田：私も時々名前がわからなくなります。はいじゃあ、次は池田さんお願いいたします。

～サウンド・エデュケーションと評価～

池田：僕は授業が始まる前に「僕は名前を覚えられない特別な病気です」って必ずいいますからね、講義の前に。「あの子転校生」っていうと「昔からいたじゃん」って言われる。

僕の失敗です。音楽づくりのアドバイスに失敗しました。どういうことかという、音楽づくり、自分達を選んできた音で、それを重ねて曲を作る、アンサンブルをつくるんですけど、そういうときに、大田区の研修会で先生方が作るそれぞれのグループに、「そこんところ消すと、もっと緊張感が高まってもっとよくなりますよ」ってアドバイスをしたら、ある方が「そっちがいいんだっちはじめからそっちを教えてください」と言われた。いいっていう答えをもっている、つまり僕は…15年くらい前だったと思いますけれど、どうしても教える側はある評価をもってしまいうんです。どこをどういうふうに評価するか、例えばイヤークリーニングで何個聞こえるかっていう課題は一度に3回くらいまでですよね、ぱっとやって、みんな聞こえてくればいい点数だと思ってたくさん書きます。でもそれでは意味がないですから。評価が非常に難しい。再現芸術は答えがあるから評価しやすい。音楽大学を卒業してきた人達は音の聴き方、作り方は習っていない。何も習っていないところでどういう観点で評価するかが難しい。サウンド・エデュケーションでも難しいところかもしれません。サウンド・エデュケーションでもそれがわかってくと浸透するのではないのでしょうか。学校現場でこれを広めるためには、評価の方法を考える必要があるのかな。私は評価とは別に、これは評価しません、僕は笛と歌だけで評価します、やりたい人は練習してくれば点数あげます、これは評価しません、それは心を育てる勉強です、と断った上で保護者にも積極的に理解を求めてきました。ただし残念ながら8年前に校長から「君のやっている音楽はわからん」と言われ、「誰でも、音痴でもいいから歌う子どもを育ててほしい」と言われました。歌を歌いたくないときは歌わなくていいんですよ、というのが通用しなくて、それで心が折れて学校を辞めるはめになりました。学校現場で広めるとすると評価が一番問題になってくると思います。僕の失敗でした。

土田：ありがとうございます。評価の話は難しいですね、確かにね。評価とはなれたところでやっている地域の話とかいうのはいいんですけども、学校教育では確かにそうかなと思いますね。大学でもちょっと入れているんですけども、どうやって評価しようという、何か書いてあればオッケーだよぐらいしか言えなくて、そういうところは

非常にやっかいなところだと思います。

土田：さて、時間の方が大体当初狙っていた時間なんですけども…。出展者の東海林さん、是非一言。

出展者・東海林：評価のことが出ましたけれども、結局、学校でも評価はしなくてはならないです。学校現場はとても忙しいものですから、第三者である誰かが客観的に納得できるような評価の仕方（項目の枠組み）を、示していただけると非常にありがたいと思うのです。個人で実践していると、他者に理解してもらうことがむずかしいというのが現状です。ですから、今回の「共通事項」が打ち出された時に、音づくりの評価においては、子どもがつくった音楽のどこがどのように音楽的要素結びついているか照らしあわせたり、言語表現も重視されたこともあり、子どものつくる音楽そのものが形骸化してしまったりする傾向ができてしまうことも否めません。言い換えれば、つくった音楽の形だけを評価をしてしまうという現状があるわけです。しかしながら、さっきの話とつじつまがあわなくなるのかもしれませんが、メソッドっていうのもすごく私は大事だと思っています。学校現場でもメソッドをしっかり教えて、音の聴き方にもたくさんあるという例をたくさん与えながら、その中で個々の音の聴き方を選んでいけるような、教育ができればいいなと思い、今回、千葉の博物館での発表（2013年10月）は、音を聴くスタートのメソッドをやってみようと考えているところです。ありがとうございました。

■今、悩んでいること

土田：そしたら今度はですね、ここにおられる方全員で悩みもろもろを出していきたいなと思っております。皆さん、フリップボードには既に何かしら書いていただけたかと。じゃ皆さん、出してみていただけますか。さっと出されたのは川崎さん。

～サウンド・エデュケーションは次の教育の形～

来場者・川崎義博：一番最初にこれを書いたんですけども。東京芸大の川崎です。先端芸術というところで音の表現全般を教えてます。といっても僕の受けてきた教育っていうのは芸術とか音楽ではないですけども。この仕事を色々している中で、今日のお話を聞いてて、結局さっき言ったように、評価しないとか、答えを聞かないとか。これは、ほどから何度も皆さんご確認されているように、こちらが上に立って教えるということではない。だからそういう意味では鈴木先生が言われているようにサウンド・エデュケーションは次の教育の形だと思うんですよ。ただ一方では、今の大学というのはアンケートということでその授業評価が出るようになってしまっただけで。アンケートは誰が作っているかという、コンサルが作っているんですね。結局、サウンド・エデュケーションや哲学はアンケートの評価軸に乗っかるかという、絶対乗っからないわけです。

よ。本来的に、ある意味、みなさんは素晴らしいことをしようとしているんだけど、今言われた評価っていうのは国全体で方向を決めている教育とぶつかる。非常に困難な現場に実はいると思うんですよね。そういう意味では、そう言っているかもしれないので、自分達で何らか出さないとダメだと思うんですけど。確かに言われているように、芸術の方でも新しいことをやる場合、結局新しいことなんだから、それに対しての評価軸って本当はないんですよね。むしろ、その評価しようとしている人が、旧来のものに基づいて評価軸を決めているので、それは推し量れないんですよ。そういうところを自分達で考えて、押し破っていくことが必要になってくる。全般的にはやっぱり大学全体はアンケートで授業が決まる。私もアンケート評価をウェブに載っけられています。そこから見えてくる授業なんて全然表面でしかないわけですよね。だからそういう意味では皆さん貴重な仕事をやられていると思う。

～子どもの耳になっているか～

川崎：同時に、一番最初に書いたんですけど、果たして僕たちが子どもの耳をもっているかどうか？ 本当にフラットな、ピュアな耳を持っているかどうか？ということが常に問われるのではないかって言うのは。アート作品で、金沢21世紀美術館にプールがあって、水の下に入れる。あの作品を作ったレアンドロっていうのがいるんですけど。彼の言葉ですごく残っているのは、「自分が小さい頃、子どもの頃は何を見てもすごい不思議で、もう毎日毎日が色んな冒険だと。つまりショーウィンドウに映る風景みても、ものすごく色んな発見があった。自分が作っているアート作品ってその時の体験を落とし込むこと。」つまり、我々がサウンド・エデュケーションを仕掛けている、我々がひょっとしたら子どもの耳になれているかどうか？ 本当にピュア といつかブランク（真っ白）なのかどうか。映像の作家でビル・ビオラという有名な人が固執しているのが、赤ちゃんが生まれて来たときに、目は見えないけど光を感じている。その時に何を感じているか？ 初めて映像を見たときに何を感じているのか？ ということ。つまり、それくらいになって音を聴くっていうか、ビビッドな体験がすごく必要だと思うのですが。一方では、大学に入ってきている人はもう最初からデジタルでできた音楽、しかも非常に狭い範囲、色々聴いているんだけど狭い範囲だったり、ゲームの世界でしか育っていない。彼らにとってゲームとは現実の一部。だからそういう意味で、サウンド・エデュケーションで、我々自身が問いかねないといけないのは、本当に子どもの耳を自分がもてるのかどうか？ という疑問。そのもとに、ちょっと書いてみたんですけど。

土田：なかなか、その評価の話にもつながる話で、難しい話なんですよ。例えばゲーム音楽で育ってきた世代が大きくなってそのゲーム音楽の音を否定されたら我々の人生ってなんだったんだということにもなってくるわけですよね。どうなんでしょうね。

川崎：逆にデジタルでしか聴いてきてないので、逆にアナ

ログの音を本当に聴いた時に、すごくビビッドな体験になるんですね。それは実例として田口さんというスピーカーのメーカーに来る若い子は、「こんないい音がスピーカーからするなんて知らなかった。」と言う。それは個人体験で、ミニコンか、安いイヤホンでしか育ってきていない子にとって、ビビッドな音が再現されるスピーカーはすごく魅力なんですね。一昨年「ちぐさ」という戦前からあった日本一古いジャズ喫茶の再現したときに、そこに残されていたスピーカーを再現しました。その時、若い人が「音を聴くって、こういうことなんだ！」と感激していた。つまり何かというと、でかいスピーカーが あってそれに包まれるということなんですね。いわゆる音を体感する。そういう体験がなかった。年寄りと一緒に座って、その中に自分がいて共通に音を体験してる。だから、まだまだそういう体験は逆にできるので、そういう場を設定してあげられるっていうのもあると思います。

土田：ありがとうございます。

～サウンド・エデュケーションから教師が学ぶこと～

鈴木：いいですか。評価のことなんですけど、サウンド・エデュケーションの評価って本質的には無理だと思うんですね。どうしたってインプットを重視するわけで、音を聴いた子ども達をAとかBとかCとかって評価するのは無理なんですよ、無意味なんですよ。ただ、さっきからお話が



出てる通りに評価できないということと学校教育の中で全然理解されないわけですね。入れなくなっちゃう。じゃあどうするかというと、最近思っているのが、ポスター発表にも書いてますが、これからの教師は本当に厳しくって、今までは教師が知識を持っていたんですよ。それを子ども達に伝達すればよかったんですけど、今は子ども達の方が先に色々な知識を持っていたりするわけですよね。だってウィキペディア引けば全部載ってたりするわけだから、例えば。そういう時代にあって、教師はどういう態度で臨めばいいのっていうと、子ども達と一緒に並んで、新しい世界にどうやって対峙していこうかというふうに、子どもと並べる教師じゃないとダメなんだろうというふうにいるんですよ。子どもと並ぶっていうことは教育学部じゃ中々教えてくれないことなんですね、今現在は。そうすると、実はサウンド・エデュケーションを実際することで教師が学ぶんですよ、その子どもと並ぶことを。それがこれからの時代の教

師にはとっても大切なことだから、学校教育の中では子どもにとっては長いスパンで見ればとっても大事なことで、非常に短期的に見れば、教師の能力としてサウンド・エデュケーションをやるのが大事ですよ、と言っていくことの方がもしかすると説得力があるのかなあ、とちょっと思ってますけど。

池田（明）：私もそう思いました。学校で音楽大学を出てきて、音楽の専科をして音楽の時間でこれを教えるということは全くできないんじゃないかと思うですね。例えば、今皆さんご存じですか、学校では、関係ない例えばセーフティー教室といって子どもが危険にあつたらどうすればいいかということで、警察の方が見えてお話しするのは必ずやらなければいけないわけです。それから道徳もちゃんと時間をとって道徳の時間を公開しなければいけないことになっているので、そういうことで時間も足りなくて教科の時間が減っているから、他の時間がどんどん増えているわけですね。ですから、例えばこういう時間を、心のノートというのも復活するんですがそういうことも含めると、心を育てることから言ったら、こういう時間を評価に関係ない時間でとってほしいと強く願っています。本当に子ども達は大変な、例えば 40 人のクラスで音楽を縛り通りに教えようとするとなんか楽しくない授業になってしまうので、是非こういう時間を使って、設定してもらって、心の教育ができるようになるといいなと思っています。

土田：道徳っていうのは、評価はしていないんですか。

池田（明）：道徳は、評価はありますね。

土田：どうやって評価するんですか。

池田（明）：どうやって…どうやってやるんでしょうね。

鈴木：早稲田ってあります？道徳。

神林：道徳はあります。私は最初の 2 年間公立で、そこは道徳の研究校だったので多少学んできました。授業をするには学習指導案というのがあって、それにはねらいも評価もあります。評価方法は非常に難しいです。私が実践していた頃は、「振り返りシート」に道徳の価値項目を書いて、それに対して○とか△とかをつけるというのをやっていましたが、本質的ではないと感じています。心をどう評価するか、というのはやっぱり難しいなと思います。

池田：評価あるのか。

神林：一応、道徳にもあります。

川崎：早稲田の方なんかは、積極的に評価軸をつくらうとしてますよね。それとか、10 分でできる、とか（笑）。本当は皆さんで話し合わないとかダメなんだけど。ただ、それが本当にうまくいくのかどうか。やっぱりこういう教育方

法があるんですよという、かなり売りの姿勢に入ってますよね（笑）。その理論武装として表象論が出てきているんだけど、そこに逆に落とし込んでいいものか、だめなものか、っていうのがあるじゃないですか。その辺のことをどういうふうに考えているのか。

神林：私自身は、サウンド・エデュケーションが価値のある活動だと思うので、売りの姿勢はすごくあります（笑）。感性の育成を時間で区切るのはよくないですが、色んな方に実践していただきたいと思い、タイトルもあえて意図的にそういう形で出しています。評価でも、とりわけ評定で 1、2、3、4、5 とつけるのは非常に難しいと考えています。評価は最終的には主観的なものだと思えていて、結局のところ言葉で説明していくしかないと思います。子どもの姿について、私はこのような視点でこう感じたよ、こうだったよ、と言葉で伝える。全く評価をしないというわけにもいかないので、そうやって自分の考えを伝えていくことで共有できるものもあるのではないかと、というところなんです。

～サウンド・エデュケーションは何のために～

兼古：すみません、一言。ここへ来て僕らが直面していることが、1 つ見えてきた感じがして。評価って難しく、評価しなくてもいいんじゃないかって思うくらいですよ実は。でも評価っていったい何だろうと考えたら、少なくとも教育という営みがあって、ある種の教育する側にとっての目標みたいのがあって、そこへの達成度を評価していくという考え方があるとすればですね、ここへ来てやっぱり今直面しているのはサウンド・エデュケーションは何のために僕らはやるのか、ということだと思うんですよ。それが短期的に評価できることなのか、そもそも評価にそぐわないのか、そうやって考えていくと多分 1 人 1 人思っているサウンド・エデュケーションを何のためにやるのかっていう目的みたいなものも一致しているかどうかもわからないのが現状じゃないかなと思って。でもこうして評価の問題を語るのっていうのは、本当はそこに今直面しているのではないかと感じてきて…。やっぱり本当にサウンド・エデュケーションを皆さんそれぞれ何のために、何処を目指してやっているのかというあたりを（それぞれ違っているということを共有するために）、あまり時間がないかもしれないけれど、僕はみなさんにぜひ聴いてみたいと思いました。

鈴木：兼古さんが踏み込んではいけな領域に踏み込みつつある気がするのですが。結局、どこにいてもそうなのですが、では教育とは何かという話になってしまうのですよ。実はさっきからちょこちょこ出ていますけれども、教育とは何かという定義は全然違いますよね、皆さんの中で。僕も違うし。教育学部とか教育専攻の人とか学会によっても全然違って、そこをとりあえず置いておいて議論をしているみたいなのはいっぱいあるのです。でも、本質的にはそれは語り合わなくちゃいけない部分だろうとは思いますが。少なくともサウンド・エデュケーションとは

何なんだ、というところは…

兼古：結論は出なくても、聴いてみたい感じはありますね。

鈴木：それでどつぽにはまるんですよ。でもやる必要はあると思います。

～「教育」の枠組みに捉われない眼差し～

出展者・鳥越けい子：本日のフォーラムの内容は、サウンド・エデュケーションのワーキンググループで引き続き考察し、さらに整理検討していくという重要なことが見えてくると思います。一方、サウンドスケープ協会全体の立場からもうちょっと引いて考えると、今日のフォーラムの内容は、サウンド・エデュケーションのワーキンググループのメンバーが企画したのでしかたがないとは思いますが、基本的に世の中で言う「教育」の領域のなかに留まってしまっているように思いました。確かに「教育の世界の問題」も、現代社会のひとつのリアリティだと思います。でも、このフォーラムを通じて、サウンド・エデュケーションに初めて出会った人もいたかもしれない。だとしたら、そういう人たちには、サウンド・エデュケーションというのはいわゆる「教育」として制度化されているところでやらなくても、いろいろな形で実践できるっていうところも伝えたい。

もともと、第1部のポスターセッションでは、その辺りの部分が明確に出ていましたね。佐故さんの展示内容もそうだし、私と鷺野さんの展示パネルで紹介した音楽イベント、あれはただのコンサートです。だけど、その活動は結果として、サウンド・エデュケーションとして成立するということなんです。サウンド・エデュケーションは当然のことながら「教育」の問題に絡んでくる。職業的にも大事なテーマになります。でも、鈴木さんは取ってクラブ活動としてやっていたりする。

さっきの議論にあった「評価」、私はあれが嫌でね、嫌だからって逃げちゃいけないので、是非評価のことも言ったらいいと思うんですけど。そういう問題にも関連して、サウンド・エデュケーションというのがあまりに「教育」の枠の中ばかりで語られてしまうと、そのよさがなくなってしまうようにも思います。むしろ、わざわざエデュケーションなんて言わなくても、逆に「サウンドスケープのころ」の中に、既にサウンド・エデュケーションが入っている。私としては、そういうということを、是非伝えて欲しいっていう気持ちでいるんです。

実は以前、今日のテーマをどういうふうにするかとか、いろんなことを土田さんと議論したんです。サウンド・エデュケーションはサウンドスケープの本質であるということも話しましたし、また、ワーキンググループでいつか、教育の現場に関わっている人の問題を取り上げようということも話しました。私は今、自分が「教育」とまるで関係ないようなふうに話しています。けれども、聖心女子大学で17年間教えてきたとき、所属は教育学科でしたから「評価」についても、いろいろな体験をしました。青山に来て、学生による「授業評価」とかはありますよ。学生

に評価をされて、いろいろ言われてすごく勉強になるところもある。でもそういうことに全然関係ないところ、まさに小菅さんのおっしゃってたような関係ないところでもできるんです。家に1人でいるときにもできる。それこそ、生活や人生のあらゆることのできる。結局、自分が楽しく生きていくために、というところもあるので、そこにも是非、ちょっとは光を当てて、このフォーラムを終えてほしいと思います。

会場・来場者：おっしゃる通りです。そうさそうさ。

土田：時間も気になりますが、フリップボードも書いていただいたので、せっかくですから佐々木さんに。

～ボトムアップのサウンドデザイン～

出展者・佐々木幸弥：話の流れ的にこういうことを言っているのかどうか分からないんですけどちょっとしゃべってみますね。私が心がけていることは自分が音の授業をやっている中で、「静かに」っていうことを絶対に言わないことです。これまで私、300人以上の大学生を9年間にわたって教えてきましたが静かになって言ったことは1度もありません。大学生ですよ、どんな連中か（笑）、どんな人達かわかりますよね。そんな人達に一度もないんです。でもイヤークリーニングに入れます。それはどういうことかという、ボトムアップのサウンドデザインと僕は言っています。静かにしてって先生から言うのはトップダウンのデザイン。何かいつもと空気が違うぞ、何か声落とさなきゃいけないかなと学生に思わせる、行動をデザインすること、それをボトムアップのサウンドデザインと言っています。その中で鈴木さんに紹介していただきましたけれども、ツイッター、学生が僕のやっていることを上手に文章にしたのがあるので、ちょっと読ませていただいてもいいですかね。

「音響文化」という授業の始まり。生徒がぎゃーぎゃーガヤガヤしている中、先生は「静かに」とも言わず、ただ小さな音でブライアン・イーノの曲を流した。段々曲の音量は大きくなり、全員が曲に気づくとまた音量は小さくなって、消えた。先生は「こういうことを勉強します」と小さくつぶやいた。全員が聴きとった。

ここから音を聴いてみましょうと言って、教室の窓と扉を全部開ければなしにしてイヤークリーニングを始めます。何かの参考になればと思います。ちなみに、本人はビートルズと書いているんですよ。僕はブライアン・イーノの曲を流したんですけど。いかに音は聴いていても先生の話は聴いていないかというのが（笑）。そういうオチでございます。失礼いたしました。

土田：サウンド・エデュケーションは雰囲気デザインの、ムードのデザインにつながってくると思うんですよ。そのために多様な捉え方を、色んなことに気づく、そういうふうなものだと感じますので、そういうようなことも

きっかけだと思います。

～サウンド・エデュケーションが拓く可能性～

来場者・石出和也：弘前大学の石出です、ありがとうございます。僕の場合はちょっと話を戻してしまうようで恐縮なのですが、サウンド・エデュケーションの拡がりというものを十分理解した上で、仕事柄、学校教育におけるサウンド・エデュケーションを掘り下げて行けば、当然、音楽科教育の知見も拡がっていくだろうという目論見を持ち続けています。「サウンドスケープ再入門」のときにもいくつか書かせていただきましたが、そこで問題提起をしたつもりだったことが2つありまして、1つは発達論です。教育ということを考えれば、ちっちゃい子どもから小中高、大人いわゆる老人まで、対象とする世代の広がりがあります。ですが、美術の中で子どもの造形や絵画の発達論が緻密に組まれているのに比べると、やはり音は残りませんから、音とか子どもの聴く姿を発達論として考えることは難しく、難しいからこそ研究していく醍醐味があるのかと思います。もう1つは、今日かなり話題になっていた部分だと思うのですが、僕も同感で、教える側と教わる側がある程度同じフィールドに立てるのがサウンド・エデュケーションの1つの可能性だろうと思います。従来の歌の授業でも楽器の授業であっても、何か教師側に教育内容があり、それを最適化して伝達する授業の構造とはやはり違うと思います。サウンド・エデュケーションを続けていくことは、そういう面で従来の音楽科教育よりも難しいのですが、そういう既存の授業構造みたいなものが当たり前になりすぎている面もありますので、それらを問い直す装置にはなるのかなと思います。あと評価の難しさという点についても、子どもが既に音とか聴くことに対して評価を下していますから、子どもの評価をさらにメタに評価する、つまり評価を評価するという難しさもあるのではないかと思います。それと、評価できる・できないということと、評価できないことを学校教育の授業ではいけないというのは、本当は次元が違う議論のはずですが、結びつけてしまうケースが多いと感じます。ただ、結びつけてしまうのにもきっと何かしら理由があると思うので、学校文化が抱える構造というのも考えないといけないと思います。サウンド・エデュケーションが拡がりをもっているがゆえに、僕の場合は、与えられた仕事としてあえて学校にもこだわっているところがあります。

土田：もう1つ私が加わっているワーキンググループが協会にありまして、庭園ワーキンググループっていうのやってるんですけど、庭園の中の音はすごいよねっていうのがあるんですよね。私は金沢在住なもので兼六園なんていうのが身近にあるわけですけども、大抵の方は目で見て通り過ぎてしまうだけなんですけども、実は音で聴くとすごい音のパラダイスなんですね。そういったところも気づいてほしいななんてことで、学生達と一緒に庭園巡りしてみようなんて言ってます。イヤークリーニングすると、音が実際2、3個しか書いてこない子もいれば10個くらいばーっと書いてくる子もいますし色々なんですけども。そうい

った環境や空間のデザインに大きく音が関わっていることに気づいてもらう1つの仕掛けとしてのサウンドエデュケーションがあるかなというふうに感じています。

来場者・西村昌子：四日市の西村です。サウンドスケープという言葉を全く知らずに、何かこう「一般の人にサウンドスケープを伝えるのにあなたがちょうどいいから」というお話で自分の活動が始まったんですけど、今日は本当に幸せな時間を過ごさせていただきました。（私とサウンドスケープ、サウンド・エデュケーションとのかかわりは）元はと言えば、我が家に水琴窟を作ったんですけれど、家族でスコップで穴を掘って作っていたら、パート先の保育園の子どもに「おばちゃんそんなスコップ持ってきたらあかんわ」って言われたんですね。「もっと大きいのもってきてどーんと作らなあかん」と言われて…保育園児がお父さんやお母さんの仕事を通して私を指導してくれるみたい。（笑）先ほど佐々木さんがボトムアップの話をしてましたが、最近やっと「年寄りがいることでいろんな場が見えてくる」、あのとき2歳児だった子達がもう大人になって子育てを始めて、たまにバスなんかで会うと、おばちゃんはあかん何も知らんで、もうかわりに私がしたー就職してから随分お父さんになったみたいでーって面倒見てもらって。地域の若い人がいるから、とりあえずこれまで学習をさせていただけて、たくさんの方にお世話になれたんで、やっと今、サウンドスケープってこんなに素敵なことだったんだ、幸せなことだったんだって実感させていただいた今日でした。本当にありがとうございました。

土田：では、フォーラムの部はこれで終了させていただきたいと思います。皆さん長い間ありがとうございました。（拍手）

（報告：兼古勝史）

日本サウンドスケープ協会20周年記念例会「サウンドスケープのこころ 2 -音と環境、音と教育-」報告

A Report on the Soundscape Association of Japan's 20th Anniversary Meeting "Spirit of Soundscape II : Sound and Environment, Sound and Education"

●小菅 由加里
Yukari KOSUGE
音の泉サロン
Oto-no-Izumi Salon

キーワード：音環境、環境教育、サウンド・エデュケーション、実践活動、意見交換

keywords : Sound environment, Environmental education, Sound education, Practical activities, Discussion

1 はじめに

2014年3月22日(土)、クリエート浜松ギャラリー31(写真1)において、日本サウンドスケープ協会20周年記念例会「サウンドスケープのこころ 2 -音と環境、音と教育-」が開催された。例会「サウンドスケープのこころ」の第1回は2013年3月に青山学院アスタジオにて開催され¹⁾、好評裏に終了した。その後、継続して行っこそ意味をなすという考えのもと2回目の開催を決定し、その開催地として小菅が居住している静岡県浜松市が選ばれた。

浜松市は古くから「楽器のまち」として栄えてきたが、近年では「音楽のまちづくり」を掲げ、国際的なコンクールや音楽セミナーをはじめ様々な音楽イベントの開催を通して、音楽文化の創造・発信・交流に取り組んでいる。そのような地でサウンド・エデュケーションをテーマにした集いを開催することによって、あらためて音と地域、音と環境について考える契機とすることを目的とした。

参加者には学校の音楽科教員や音楽家・音楽指導者などに加え、楽器会社社員の方々も含まれ、浜松ならではの顔ぶれとなった。

本稿では、その開催概要を参加者の感想も交えながら記す。



写真1 クリエート浜松

2 開催概要

本例会は、全体の大きなテーマとして「音と環境、音と教育」を掲げ、以下の内容で行われた。

日本サウンドスケープ協会 20 周年記念例会「サウンドスケープのこころ 2 -音と環境、音と教育-」

日時：2014年3月22日(土) 13:30～18:00

会場：クリエート浜松ギャラリー31(静岡県浜松市中区早馬町2-1)

参加者数：55名(協会員23名、非協会員32名)

プログラム：

■第1部 ポスターセッション 13:30～15:00

サウンドスケープやサウンド・エデュケーションに関わる研究や実践活動を、ポスター展示やトークによって紹介。発表数：15件

■第2部 フォーラム「環境教育における音」15:15～17:00
音と環境および教育との関わりについて、以下の登壇者を囲んでディスカッション。

話題提供者：

嶋 和彦氏(浜松市楽器博物館館長)

大野嘉章氏(元・湖風店主、元・環境保全課職員)

岩田茉莉江氏(音風景研究家)

土田義郎氏(金沢工業大学環境・建築学部教授、

本協会サウンド・エデュケーションWG代表)

モデレーター：

兼古勝史氏(武蔵大学・立教大学兼任講師)

■参加者交流会 17:15～18:00

関連企画：日本サウンドスケープ協会20周年展「音風景の地平をさぐる」

関連展示：浜松市音・かおり・光資源百選(資料提供：浜松市環境部環境保全課)

主催：日本サウンドスケープ協会

企画：サウンド・エデュケーションWG

後援：浜松市、浜松市教育委員会、(公財)浜松市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社

2.1 第 1 部 ポスターセッション

ポスターセッションでは、全国から集まったサウンドスケープの研究者およびサウンド・エデュケーションの実践者 15 組による多種多様な活動のポスター展示およびプレゼンテーションが行われた。

通常のポスター発表では、展示されたポスターの閲覧のみという形式が多いが、本例会では、セッション冒頭で、発表者は順にそれぞれに与えられた 3 分間のプレゼンテーション・タイムの中で自身の活動や実践内容について紹介（写真 2）。参加者は一緒に各展示を巡ってそれぞれの研究・実践内容を聞いた後、個々に興味のあるものについて詳しく見たり、発表者に質問したりするという趣向にした。

発表タイトルと発表者は以下の通りである。なお、各発表者が発表した研究および実践の概要については、本稿に続く別稿「日本サウンドスケープ協会 20 周年記念例会「サウンドスケープのころ 2 -音と環境、音と教育-」第 1 部ポスターセッション」に掲載したので、参照していただきたい。

- 音ではかる？ 音でわかる！／土田義郎（金沢工業大学）、松田尚子（公益財団法人野々市市情報文化振興財団）
- 科学教育指導書「自然の観察」について／土田義郎（金沢工業大学）
- 自然の中で五感をとぎすませる／鈴木玲子（NPO 法人しずおか環境教育研究会）、小菅由加里（作曲家・音の泉サロンはままつ分室）
- 南大東島音たまり／岩田茉莉江（音風景研究家）
- みちとおと 熊野古道・中辺路／北浦雅子（みちとおと）
- 「都市を聴く」ための音楽イベント-＜名橋たちの音を聴く＞を事例として-／鷺野 宏（都市楽師プロジェクト）、鳥越けい子（青山学院大学）、
- 音風景でつづる「家康の散歩道」／小菅由加里（作曲家・音の泉サロンはままつ分室）
- 過去の音環境を研究する試みについて／上野正章（大阪大学文学研究科・京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）
- 日本における「虫の音を愛でる文化」の歴史と学校教育／永瀧千燈（静岡大学教育学部）、小西潤子（沖縄県立芸術大学）
- 五感で見る世界 - 音のユニバーサルデザイン教育の実践報告／谷川憲司（静岡文化芸術大学）、佐々木幸弥（ヤマハ株式会社）
- レッジョ・エミリアの教育／小林田鶴子（共栄大学）
- ミュージアムジーク／松本玲子（ミュージアムジーク実践家）
- 静寂を聴く／佐故圭子
- 火の見櫓の音風景／塩見 寛（Kei_まちづくりネットワーク）、鳥越けい子（青山学院大学）
- 幻の静岡県音楽公園／塩見 寛（Kei_まちづくりネットワーク）

2.2 第 2 部 フォーラム

フォーラムでは、「環境教育における音」をテーマに、前出の登壇者を囲んで、フロアの参加者も含めた活発な討議が繰り広げられた（写真 3）。鐘の音の聴き方や駅のサウンドスケープという身近で具体的な話題から、文化の継承あるいは環境との関係を作っていくという生き方の問題まで、まさに本例会の大きなテーマである「音と環境、音と教育」をめぐる、多くの本質的な議論や示唆に富む課題の提示が行われ、大変有意義な時間と空間を演出することができた。また、参加者からサウンドスケープの定義や何を目指していくのかを問う発言なども出て、あらためてサウンドスケープの概念について考え、その多様性について認識を深める機会となった。

なお、このフォーラムの全容については、本誌の別稿「日本サウンドスケープ協会 20 周年記念例会「サウンドスケープのころ 2 -音と環境、音と教育-」第 2 部フォーラム「環境教育における音」」に掲載したので、参照していただきたい。



写真 2 第 1 部ポスターセッションの様子



写真 3 第 2 部フォーラムの様子

2.3 関連企画：日本サウンドスケープ協会 20 周年展「音風景の地平をさぐる」

本例会では、関連企画として、2013 年 10 月 5 日～12 月 1 日まで千葉県立中央博物館にて開催された日本サウンドスケープ協会 20 周年展「音風景の地平をさぐる」で展示された「20 年の歩み」および「協会の活動からみるサウンドスケープの世界」のパネルと、関連資料・書物を展示し（写真 4 および 5）、本協会のこれまでの活動や、サウンドスケープという視点から現代社会に投げかけたメッセージを紹介した。

これらの展示によって、20 周年展開催中に千葉へ足を運ぶことができなかった協会員にとっては、その様子の一旦を知る機会となり、また一般の参加者にとっては、音から地域を読み解く・環境に耳を澄ます・音と暮らしや文化との関わりなど、サウンドスケープの多様な世界や考え方について知る良い機会となった。

ここでの企画がモデルケースとなって、今後、様々な地域で同様な展示が行われ、サウンドスケープの概念が広く認知されていくことを期待したい。



写真 4 「20 年の歩み」パネルの展示

2.4 関連展示：浜松市音・かおり・光資源百選

本例会では、浜松市環境部環境保全課の協力により、「浜松市音・かおり・光資源百選」が展示された（写真 6 および 7）。

「浜松市音・かおり・光資源百選」は、街へ潤いや彩りを与える音、かおり、光を環境資源としてとらえ、それらを保全し快適な生活環境を創造することを目的として平成 16 年に施行した「浜松市音・かおり・光環境創造条例」を、市町村合併（平成 17 年）に伴う全市域へ適用するにあたり、身近な環境資源の中で次代に残したい、あるいは、地域の誇りとしている音、かおり、光資源を、新たに合併した地域から公募し、合併前の資源 30 選の見直しと合わせて選定されたものである。

展示したものは、「浜松市音・かおり・光資源百選」ガイドブック²⁾（参加者が自由に持ち帰りできるよう複数部用意）、同百選の概要を紹介したパネル 2 点、同百選より「浜松まつり」「楽器博物館のピアノの音」「天竜川のせせらぎと列車が鉄橋を渡る音」「森の水車」「遠州灘について個々に詳しく紹介したパネル 5 点、および「遠州灘の海鳴り（波小僧）」の音源であった。



写真 6 「浜松市音・かおり・光資源百選」の紹介パネル



写真 5 「協会の活動からみるサウンドスケープの世界」パネルおよび関連資料・書物の展示



写真 7 「浜松市音・かおり・光資源百選」ガイドブック

3 参加者の声

本例会には、55 名という多くの方に参加していただいた。会場のいたるところで、参加者間で活発なコミュニケーションが繰り広げられている光景が見られ、研究会とはまた異なる、より親密な交流の場となった。

以下に、後日、発表者から寄せられた感想と、当日配布・回収した参加者アンケートに書かれていた感想およびコメントを紹介する。

3.1 発表者の感想（発表順）

土田義郎（金沢工業大学、サウンド・エデュケーション WG 代表）

サウンド・エデュケーション WG を 2008 年に立ち上げてから 6 年がたちました。サウンドスケープという概念の中には、単に音を作るという事を越えた内容を含みます。その一つに「音の教育（サウンド・エデュケーション）」があります。それは、（会員にとっては周知のことであると思いますが）単に音響的知識の教育ではなく、広義には環境のデザインといえます。しかし、それを実践としてどのように実現するかは、それぞれの方が悩みながら模索していたというのが実情であると思います。もちろん、書籍もありますが、それだけでためらいなく行動できるわけではないでしょう。相互にそれらを知り、さらに高めていくということ、これも協会という場の一つの機能であると考えて WG を立ち上げたわけです。

昨年度より例会として、「サウンドスケープのこころ」を開催し、その 2 回目を無事に開催できたことはとても喜ばしいことと感じています。ポスター展示やフォーラムでの討論によって、少しでも共有できる認識が得られたとすれば、実施した甲斐があるというものです。それは、同床異夢かもしれませんが、目指す方向をおぼろげながらも示し得るものです。協会は学会ではなく、会員も必ずしも研究者ではなく、様々な立場で音と関わっています。学会とは異なる交流の場としての機能は大事にしたいと考えています。

今後のサウンド・エデュケーションの課題は、音のデザインの教育として確立させることだと思います。従来の教育がカバーできなかったところを、説得力を持って実現できるようにしていくこと、そんなことを願っています。

自分や他の方の展示に対する感想というより、WG 代表としての思いのようなものになってしまいました。ともあれ、会員の活動の「証人」として、活動をとどめていくことを今は大事にしたいと思います。

岩田茉莉江（音風景研究家）

フォーラムの最後に、モデレーターの兼古さんが「『音』はきっかけともなり、また、『音』を通して人間、環境、文化、地域をみていく時に、それらが統合されていく。その中にサウンドスケープの面白味があるのでは」としめくられました。私自身、音がきっかけで南大東島の自然や人の感性に触れ、次第に感覚が開き、耳は微細な音、遠くの音をキャッチできる程に鋭ぎ澄まされていきました。

島で生まれ育ったわけではない私の感覚が変わったのだから、人間誰しもがもつ本能のようなものがあると信じてきました。しかし、島から離れ、当時より耳は鈍化し、東京の一部のまちでは耳をふさぎたいほどの音の量と大きさを目の当たりにし、色んな疑問や思いを抱いていた頃でもありました。そんな時、このフォーラムに参加して様々な表現を見聞きし、考えを交わせたことで、また新しい捉え方が生まれ、音の世界が広がりました。

音をはじめとした五感に素材、地域性をかけあわせて、対象者、場所、テーマに合わせていかにプログラムを構成できるか、まだまだこれからですが、きっかけの種が実を結ぶプロセスを描きながら、今後も音のワークショップ等の活動を行っていきたいと思います。貴重な機会をくださり、ありがとうございました。

北浦雅子（みちとおと）

このたびはポスターセッションに出展させていただき、誠にありがとうございました。様々なご研究、ご活動を学ぶ機会に恵まれましたこと、たいへん嬉しく思っています。「音と環境教育」について長年にわたり取組まれている皆様のお話を伺って、私自身の活動にもヒントをいただくことができました。

また、フォーラムでのディスカッションも興味深く拝聴いたしました。私はふだん、音について誰かと語り合う機会がほとんどありません。ひとりで本を読み「サウンドスケープってなに？」と模索しながら活動している初心者です。音をテーマにしたディスカッションはとても刺激的で、音の世界は自分が考えていたよりも大きな広がりを持っていたことに気付かされました。

「みちとおと」は、1 年間で終了するウェブサイト制作事業です。ウェブサイトは今春に完成予定で、その後の展開は未定。現実的に考えるといったん終了するしかありませんが、今回皆様方の熱意と知識に刺激を受け、魅力を感じ、私も何らかの形で継続していけないだろうか考えるようになりました。

まだまだ模索を続けておりますが、今後ともご指導いただけましたら幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

上野正章（大阪大学文学研究科・京都市立芸術大学）

初めてのポスター発表ということもあって、はじまるまではいろいろ心配していたのですが、おかげさまでいろいろお世話になり、つつがなく終えることができました。会話を通じて研究を紹介するのは新鮮な体験で、勉強になりました。

隙を見て他の発表者のポスターも眺めたのですが、いずれも力作揃いでした。サウンドスケープ研究・実践の広がりを感じました。とりわけ思うところがあったのが、パワーポイントやコンピュータを自在に使いこなした発表や、紙と筆記用具、現物展示でしっかりと組み立てられた発表です。ややもするとソフトウェアや機材に振り回され、安易に与えられた選択肢を利用して発表を組み立てがちになっている自分を振り返りました。なお、ポスターを簡単に紹介するセクションでは、発表者の華やかなプレゼンテーションに感心しました。

発表会の後半はシンポジウムでした。次々に積極的にフロアからの意見を求めるところがユニークで、サウンドスケープの学際的な性格が如実に反映していました。多くの問いかけや着眼点を新鮮に受け止めた次第です。シンポジウムの機関誌への再録を期待したいと思います。

永瀧千燈（静岡大学）

卒業論文発表の場として、初めて学外の本格的な研究発表会でポスター発表を経験し、大学生活最後の良い思い出になりました。温かい雰囲気の中かで、ポスター掲示の準備から片付けまで参加者皆で協力しました。また、来場者が興味を持ってお声をかけてくださったことで、自分の研究に価値を見出すことが出来ました。また、何人かの方と密に交流し、自分の知らない「音」に関する考え方に触れることが出来ました。4月1日から小学校で働き始めています。今回得られたことを少しでも学校現場で活かしていけたらと思っています。

小西潤子（沖縄県立芸術大学）

永瀧さんが幼少時から興味をもっていた昆虫と、教育学部音楽教育専攻で学んだことが「音」で結びついたことによって、教科を横断する深い内容の展開となりました。その昆虫の性質を知り尽くした目で、通常は雅楽専門の研究者しか扱わない『家楽録』という分厚い専門書をめくりながらひたすら「虫偏」の漢字を追い、サウンドスケープ研究ならではの新しい発見をしました。研究成果自体も学校教育に還元されることが期待されますが、指導者としては学生教育のための貴重な機会を得ることができました。関係者をはじめ、ご来場者のみなさまに深く感謝いたします。

佐々木幸弥（ヤマハ株式会社）

このたびは地元の浜松でこのような会を盛大に開催する事ができて大変嬉しく思います。企画・準備の段階からご尽力された多くの皆様に心より感謝とお礼を申し上げます。

私は、静岡文化芸術大学で実施している音のユニバーサルデザインの授業の紹介をさせていただきました。音を聴くということは「気配を感じる」ことであり、視覚障がい者にとっては視覚を補うためにとくに重要であることと、それを妨げないための音環境の整備が重要性について、来場された方々にご理解いただくことができました。

また、新たな展示方法の試みとして、ヤマハ製の薄型スピーカーを使用してポスターと一体化したプレゼンテーションをしました。このスピーカーはサービス範囲(角度)が狭いためポスター正面でのみ聴取が可能になります。今回のように複数の音が存在する空間において、隣同士の音の干渉を抑える効果を実感することができました。

今後もサウンドエデュケーションを通じて、人と音との関わりについて考えていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

小林田鶴子（共栄大学）

今回の例会は教育をキーワードに様々な視点からのポスターセッションやフォーラムがあり、有意義な会であったと思います。ただ、私自身が情報交流会の会場係りであっ

たため、最後の部分をほとんど聞くことができず残念ではありましたが。

私のポスターセッションのテーマ「レッジョ・エミリアの教育」に関して、この5月に東京で「子ども教育立国」主催のセミナーがありました。その時の主催者は初めにこう言われました。「現在の日本は経済を中心に立国している。文化は経済の僕（しもべ）になっている。しかし、これを逆にしていかなければならない。そのために私たちは色々な企画を行っている。」

そして、レッジョの教育実践紹介「What is Music?」で幼児が答えたことは次のようなことです。「音楽は5種類ある。楽器を使ったもの、雨の音など、デジタルの音、体から出る音、体の動き」

これは、「音楽」という定義そのものにサウンドスケープが含まれていて、「音楽」と「音」などの区別なく考えている（しかも、身体運動も含まれている）幼児の柔軟さが窺われます。

レッジョの教育ではこうした自由な発想が生まれています。「サウンドスケープのこころ」とは、先のセミナー主催者の言葉や幼児の発想のように、我々の価値観自体への問い直しも含まれていることを改めて実感した次第です。

松本玲子（ミュージアムジーク実践家）

昨年協会に入会させていただいた私にとっては、例会を含む全ての活動が貴重な学びと出会いの場です。ですから今回ポスターセッションに参加させていただいたことは自分にとって素晴らしい体験でありましたが、同時に来場された一般の方々の反応を拝見し、直接会話をかわすまたとないチャンスになりました。浜松という地理的に日本のほぼ中間地点に位置し東海道新幹線の駅を有する地方都市において、興味をもって熱心に展示やフォーラムに接する多数の来場者の存在を確認できたことは、当地が楽器博物館のある楽器産業振興地であることに鑑みても、サウンドスケープに対する一般の方々からの期待を感じずにはいられません。もちろん小菅実行委員長をはじめとする関係者の方々のご尽力の賜物ではありますが、ポスターを前にした来場者との会話や受けた質問の視点、内容の多彩さから、来場者が本当にサウンドスケープに環境を含めた未来を読み取ろうとし、その窓口として本協会の存在を認めようとしていると実感いたしました。一方向的な発信ではない今回のように大きく広く開かれた機会は、まさにサウンドスケープの思想につながる活動です。最後に今回勉強中の私にもこのような機会をくださった皆様に心より感謝申し上げます。

大野嘉章（元・湖風店主、元・環境保全課職員）

会員でない気楽さから、例会の積み重ねをわきまえず、言いたいことを言ってしまうました。

サウンドスケープ協会の会員の皆様の実践活動が今後も多くの実りをもたらすことを願っています。

3.2 参加者アンケートより

■都市の音に関する展示が印象に残りました。自分が気づかないような点にまで言及されていて、とても勉強になりました。(17 歳男性)

■音の地図を作成したり、古典・古文・生物から音を読み解くことも面白いと思った。サウンドスケープについて、全国各地でどのような活動が行われているかということが分かった。また、音だけでなく、その音の意味も理解し、伝承していかなければならないことが分かった。(20 代男性)

■自由に交流できる時間があって、たくさん話ができ嬉しく思いました。(20 代女性)

■それぞれ興味深い展示で楽しく見させて頂きました。実際の音がもっと聴けると良いかと思います。(30 代女性)

■日本人の音に対する感性の豊かさを再認識した。フォーラムでは、サウンドスケープの多様性を感じた。発車バルの議論が興味深かった。(40 代男性)

■ポスターセッションでは興味のあるものを何度も見られるので良かった。会場も良くて、流れもスムーズで、とても満足しました。勉強会という堅苦しさがなかったので◎(50 代女性)

■ポスターセッションは多種多様で充実していた。短時間にたくさんの発表を見聞きできて良かった。(50 代女性)

■ポスターセッションでは、発表者の皆さんそれぞれの視点を興味深く見させていただきました。また、フォーラムでも楽しく聞かせていただきました。「静寂へのリスペクト」ということに、とても共感しました。感性を育てる、というのはまさにそうだなあと、私自身、日々の生活・仕事に翻弄されていますが、感性を働かせる集中力をやしなわなくてはと再認識しました。(女性)

■音楽授業の中で、もっと何かできると思うのですが、学校行事のために合唱や合奏の曲を仕上げることだけに熱心な方が多く、サウンドスケープを導入していくためには、まず音楽授業の現状をしっかりと捉えたうえで、学校で行われる音楽教育において何を目指すべきなのかについて考える必要があるように感じます。(男性)

4 まとめ

本例会を浜松で開催することが確定したのは、2013 年 11 月であった。それを受けて、まずは会場探しから始めたが、この時点で条件に見合う公共の会議室等のほとんどは、既に他団体によって予約済みであった。いわば選択肢のない状況のもと、クリーエト浜松のギャラリーでの開催となったが、このことはかえって幸いであった。ギャラリーとい

うオープンなスペース(約 400 平方メートル、写真 8)は、リラックスした雰囲気とアートな空間を演出することができ、気さくな交流の場としても、また、音をテーマとしたクリエイティブな展示や討議の場としても最適であった。



写真 8 会場入り口からの風景

会場決定後は、プログラムの検討およびポスターセッション発表者の募集と並行して、宣伝用のチラシやポスターの作成(写真 9)、新聞社等への事前告知依頼、地元のラジオ放送局 FMHaro の番組「PLUS your Day」への出演(2014 年 3 月 13 日)などの広報活動に奔走した。その甲斐もあって、これらマスメディアの情報から本例会に興味を持って参加くださった非协会会员の方も多かった。浜松で初めての本格的なサウンドスケープに関する会ということもあり、何とか意義のあるものにしたいという一心で、まさに東奔西走の日々であったが、前日の設営準備(写真 10)も含め多くの方々のご協力も得て、無事、盛会裏に終えることができたことを大変嬉しく思う。

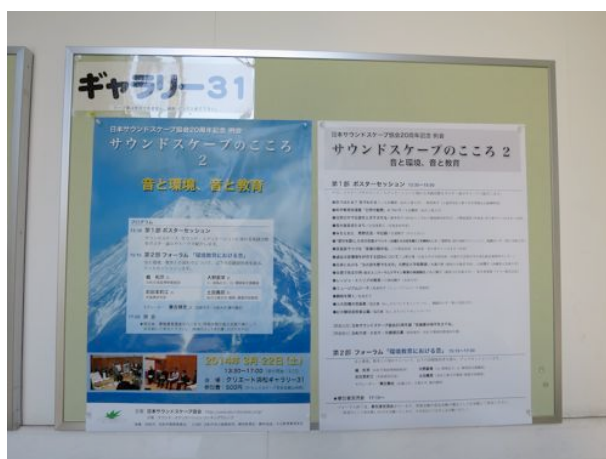


写真 9 広報宣伝用ポスター

ポスターセッションでは、大学生によるフレッシュな発表から、長い間サウンドスケープについてご研究されている方々による密度の濃い発表まで、多岐にわたるプレゼンテーションが行われた。展示方法も、手書きによるものや、

関連資料や音源が添えられているものなど、様々な趣向が凝らされていて、大変楽しく充実した内容であった。普段はそれぞれの地域で個々に研究・活動されている方々が、このように一堂に会して実践事例を紹介し合い、情報交換や意見交換の機会が持てたことは大変有意義であった。



写真 10 前日の会場設営の様子

フォーラムでは、「環境教育における音」をテーマに、浜松市楽器博物館館長で同館開館にも尽力された嶋和彦氏、日本サウンドスケープ協会設立に尽力され、現在は浜松市にお住まいの大野嘉章氏、地域でのサウンド・エデュケーションの実践における若手のホープとも言える岩田茉莉江氏、サウンド・エデュケーション WG の代表であり、これまでに様々な実践活動をされてきた土田義郎氏の 4 人の話題提供者、モデレーターとして、同 WG はじめ本協会の様々なシーンでご活躍されている兼古勝史氏という、大変バラエティに富んだ方々によるご登壇がかない、フロアの参加者も含めた意義深い議論が交わされ、今後のサウンドスケープ研究やサウンド・エデュケーションの方向性を示唆するものであった。

また、関連企画および関連展示として、日本サウンドスケープ協会 20 周年展や「浜松市音・かおり・光資源百選」の展示が行われたことは、参加者に、サウンドスケープの視点からの様々な取り組みについて広く知っていただく良い機会となった。さらに、これらの展示により、会場によりアカデミックな雰囲気醸し出すことができ、和やかな中にも、程よい緊張感が漂っていた。

終了後、参加者からは概ね、本例会の内容について満足したという感想をいただいた。しかしながら、アンケートにも指摘されているように、実際の音を聴きながらディス

カッションする場面がより多くあったならば、さらに説得力のある会となっただろう。今後の課題としたい。

なお、参加いただいた小学校の音楽科教員の方からは、その後、音楽の授業でサウンド・エデュケーションを行ったとの報告をいただいた。また、当日は地元の新聞社 2 社（静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社）の取材が入り、後日、その様子が新聞に報道された（写真 11）。本例会をきっかけに、浜松市近郊の地域や教育現場でも、サウンドスケープの考え方やサウンド・エデュケーションの実践が広まっていくことを願っている。

謝辭

本例会を開催するにあたり、会場使用について便宜をはかってくださったクリエート浜松館長の國松秀行様をはじめ同館職員の皆様、「浜松市音・かおり・光資源百選」に関する資料をご提供くださった浜松市環境部環境保全課職員の皆様、当日の受付業務のみならず参加者交流会の準備および片付けにもご協力いただいた山下直美様、前日より浜松入りして日本サウンドスケープ協会 20 周年展のパネルや資料等の展示をお手伝いくださった鷲野宏様、全日程終了後、会場の片付けにご協力いただいた発表者の皆様他、多くの方々のご助力・ご協力をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。

「サウンドスケープのこころ2」実行委員会

実行委員長 小菅由加里

実行委員 兼古 勝史

神林 哲平

小林田鶴子

佐々木幸弥

土田 義郎

鳥越けい子

(五十音順)

註

1) 2013 年 3 月に青山学院アスタジオにて行われた例会「サウンドスケープのこころ」の詳細については、本誌掲載の、兼古勝史：「日本サウンドスケープ協会 2012 年度例会報告「サウンドスケープのこころ - ポスターセッション & フォーラム - 」」を参照のこと。

2) 浜松市環境部環境保全課：『浜松市音・かおり・光資源百選』、平成20年3月。



写真 11 新聞報道
(静岡新聞 2014 年 3 月 25 日朝刊)

日本サウンドスケープ協会20周年記念例会「サウンドスケープのこころ 2 -音と環境、音と教育-

第 1 部 ポスターセッション

Part 1 Poster Session

会 場：クリエート浜松ギャラリー31
日 時：2014 年 3 月 22 日（土）13:00～15:00

ポスターセッションでは、サウンドスケープやサウンド・エデュケーションに関わる実践活動について、15 組の発表があった。以下に、当日配布したプログラムに掲載された各発表者の実践概要を掲載する。

音ではかる？ 音でわかる！

土田義郎（金沢工業大学）、松田尚子（公益財団法人野々市市情報文化振興財団）

金沢工業大学の所在地は金沢市と野々市市にまたがっています（登記上は野々市市）。そのため、協定を結んで連携事業を推進しています。野々市市のシンボルの花は椿（カメリア）とされており、カメリアの名称を冠した施設や事業がいくつかあります。「カメリアキッズ」という事業もその一つで、小中学生に対する啓発事業として位置づけられています。この事業に大学教員も協力し、いくつかのアクティビティを実施しています。

2010 年度から「空間サイエンス編」の中で音に関する講

座を行うようになりました。サイエンスというくくりの中ですので音の物理的な性質の解説もしますが、実際に様々な音響現象（ロングパスエコー、チャープエコー、音の焦点）を聴き取ってみたり、自分たちで音サインを作成して音を頼りに目隠しして歩いたりといった、感覚に訴える体験を重視した活動としています。

参考：http://camellia.nono1.jp/

対象者層：地元の自治体（野々市市）と連携しているので地元の小学生

科学教育指導書「自然の観察」について

土田義郎（金沢工業大学）

2009 年に出版された「自然の観察」という書は、第二次世界大戦前の 1941 年に発行されたものの復刊です。尋常小学校から国民学校へと教育制度が変わる際の教師用テキストとして作られました。児童用はつくられませんでした。それは『強いて編さんすれば、「自然の観察」を教室において、教科書の上で指導するようなことに傾きやすく、かえって悪結果を生ずるおそれがあるのである。』という考えがあったと記されています。「合理創造の精神」を養うことを目的に据え、単に「理知」の働きだけでなく、「知情意」の発達を目指した体験的な学習を重視するという方針が特徴であるといえます。ページをめくると、随所にそ

の実際を垣間見ることができます。校庭で歌を歌い、文章を書き、絵を描き、体を動かし、地域で働く人々に話しかけるような活動を含み、その過程で「音」にも多く着目させています。総合学習の精神を先取りしていたといえるでしょう。理科以外の内容がいろいろな所にちりばめられているのは、マイクロ・インサージョン(micro-insertion)という技法をすでに行っているものと考えられます。

注）本展示は以下に示すように過去に協会誌に掲載されたレビューです。

土田義郎：科学教育指導書「自然の観察」における音の記述の分析、サウンドスケープ、Vol. 13, pp. 79-82, 2012.

自然の中で五感をとぎすませる

鈴木玲子（NPO 法人しずおか環境教育研究会）、小菅由加里（作曲家・音の泉サロンはままつ分室）

NPO 法人しずおか環境教育研究会では、静岡県内の里山にて、乳幼児・小学生・大人それぞれの対象にあわせた環境教育プログラムを実施しています。活動の中心となっている有度山北麓は、静岡市の街中から車で 20 分という身近な場所にあり、四季を通じて里山に通う主催事業が充実しています。（2012 年度は 307 回、参加者のべ 6610 名）

例えば、幼児プログラム「親子自然あそびひろば」では、「自然の中で遊ぶこと」と「子どもから自然にうまれる遊び」を大切に活動しています。子ども 1 人ひとりのまなざしや育ちにあわせ、季節の移り変わりを感じ、様々な生き物や自然にふれ、同年代の子ども達と力をあわせたりけん

かしたりする中で、創造的な遊びが次々と展開されていきます。子ども達に寄り添う保護者やスタッフもまた、気づきや感動を深めることができています。

数年前には、鈴木が担当して音に焦点をあてたプログラムを数回開催しました。実験的に、サウンドスケッチや音あそび、お月見ハイキングなどを実施しました。

こうした当会の主催事業は、地域のボランティアが中心となって企画から実施までを行っているのが特徴です。小さなお子さんをもつお母さんや、サラリーマンのお父さん、定年後に活動をはじめた世代までさまざまな立場の人たちが、気づき成長しあいながら、人から人へ伝えています。

南大東島音たまり

岩田茉莉江（音風景研究家）

20 歳の夏、沖縄県南大東島で 1 か月間過ごしたことがきっかけとなり、音に魅かれる。この島にはどんな音があるのか、調べるために、島まるごと館の「こどもスタッフ」と共に、録音機とインタビューノートを手に島の音集めを始める。約 50 人のインタビューにより、「夜になるとダイトウオオコウモリの鳴き声がきこえるよ。」「『仲松ゴーゴー』にいくと、潮吹き穴の音がきこえるよ」等と出てきた情報を手掛かりに録音し始める。

録音した音を展示して島人と共有できるようにしようと、2005 年 南大東島まるごと館に音の展示「南大東島 音たまり」を制作。ベースは私が島の絵をベニヤ板にペンキで描き、そこに 23 種類の音をなぞると音が再生されるバーコードシールをはり、こどもたちが描いた生き物を貼り、島民

と共に制作。

島の人のアンケートやインタビューをもとに、「島人はどのように聴いているか」その背景を詳しく伝えるため 6 種類のカード①音の名前（音の答え）②日時場所 ③状況（なぜこの音を録ったのか、録った時の様子 ④私の声（私の聴き方）⑤島の人の声（島人の聴き方 文章または子どもの絵）⑥専門的な説明も並べた。カードをめくりながら音を聴き、音風景を深めながら知れる仕掛けにした。

日本各地の音風景の表現をそこに触れる人々と地域独自の固有性に合わせて多様に表現できたらと、「音さんぽ」「みみびらき」というワークショップの中で、参加者と共に「音たまり」の表現を模索中。

みちとおと 熊野古道・中辺路

北浦 雅子（みちとおと）

「みちとおと」（道と音）は、和歌山県和歌山市を拠点とする非営利の任意団体です。

私たちはこのたび、和歌山県情報化推進協議会・平成 24 年度地域情報化支援事業の助成を受け、熊野古道・中辺路（なかへち）の自然や文化を、音や声、文章などで紹介するウェブサイトを作りました。

(<http://www.michi-oto.com/>)

中辺路沿いは、熊野詣でに伴って多彩な芸能などが伝わった地域です。また安珍清姫（あんちんきよひめ）、小栗判官（おぐりはんがん）の説教節や、絵解き説法など「語りもの」の舞台でもあります。独自の文化を育んできた

「民俗の宝庫」とも言うべき山間部ですが、近年、過疎化の進行や住民の高齢化などから伝統芸能や民話、生活譚などの継承が難しくなっています。本事業は熊野地方の貴重な民俗文化に着目し、「記録するだけでは文化は継承されない」との反省を元に企画したものです。

紀伊半島の山間部には、自然と共生してきた人々の精神文化が今も受け継がれています。私たちは取材を通じてそ

れを学び、サイトで紹介することで、多くの人々に暮らしや環境について考えを深めてもらいたいと考えました。また、失われつつある地方の芸能や民話、生活譚などの民俗文化を記録・発信することでその価値を共有し、次世代に継承することも活動の目的としています。

ウェブサイト「みちとおと 熊野古道・中辺路」の主なコンテンツ

- 山のみち…熊野古道・中辺路を歩いた記事。
- 里のみち…中辺路町高原（山上集落）、中辺路町兵生（廃村）、本宮町大瀬（限界集落）の三地域を重点的に取材した記事。
- 熊野の伝説…熊野地方の伝説をイラストと共に紹介し、一部は現地の記事にもリンク。
- 熊野びと…山の暮らし、森の仕事、集落の祭などについて熊野の人々にインタビューし、音声も紹介。
- サウンドマップ…地図上の「祭」「盆」「声」などのアイコンをクリックすると現地の写真と共に音声が聴けて関連記事へ。



写真 1 展示の様子



写真 2 展示の様子

「都市を聴く」ための音楽イベント<名橋たちの音を聴く>を事例として

鳥越けい子（青山学院大学）、鷺野 宏（都市楽師プロジェクト）

「都市を聴く」ための音楽イベントとは、鳥越と鷺野が、東京のいくつかのフィールドで、それぞれの地点の歴史や環境など、幾層ものレイヤーで構成される「その場所らしさ」を複合的かつ直感的に体験することを目的とした音楽イベントのこと。

その背景には、音楽には、聴く人にそれが成立する場所の環境そのものの特性に気づかせ、その土地の来歴や物語を発掘・発信する機能があるという考え方と、楽器の音、言葉、建物その他の構造物のもつ音響特性、都市の喧噪から自然界の音までを総合的にとらえる「サウンドスケープ」概念とその考え方がある。

それぞれの音楽イベントのつくりかたは、各フィールドのもつ環境文化的特性に応じたものとなっている。これまで取り組んできた主なプロジェクトとその以下のものがある：

○＜キャンパス遊歩音楽会＞

2009 年 4 月、青山キャンパスとその主要な建物を利用して実施した青山学院大学総合文化政策学部新入生歓迎会の音楽会。

○＜SCAPE WORKS 百軒店＞

渋谷百軒店をフィールドに、その文化資源の発掘・発信のために、新しい風景（SCAPE）を創り、地域の力を引き出していくためのいくつかのユニットからなるイベント。2009 年より 2014 年まで、6 年間にわたり実施している。

○＜池の畔の遊歩音楽会＞

武蔵野三大湧水池のひとつ善福寺池（杉並区）をフィールドに、「音風景案内人」と「放浪の楽師」が、池の畔を歩きながら、善福寺の池と土地の記憶を紐解く音楽会。2010 年より 4 年にわたり、毎年秋に開催される「トロールの森野外フェスティバル」に参加。

○＜名橋たちの音を聴く＞※今回事例としたプロジェクト

日本橋周辺の都市環境を、日本橋川を運行する船上から「音楽」とともに体感することで、都市空間を日常よりセンシティブに味わい街への愛着につなげていくことを意図して企画した作品。2010 年 5 月より 2013 年までの 4 年間、異なる季節にわたり、既に 8 つのヴァージョンを実施している。

音風景でつづる「家康の散歩道」

小菅由加里（作曲家・音の泉サロンはままつ分室）

浜松市において 2012 年より、一般市民を対象に徳川家康ゆかりの史跡を巡る観光コース「家康の散歩道」を音に着目しながら歩くフィールドワーク（サウンドウォーク）を実施している。史跡を訪ね歩くことで現在の音環境を体感するのみならず、当時きこえていた音や昔の人々の暮らしの音を想像し、音からまちの成り立ちや、歴史・文化の営みを認識するきっかけづくりをしている。また、同じコースを季節や時間帯を変えて歩くことをうたってリピーターを募り、市民への継続的なはたらきかけを試みている。

これまで、2012 年 3 月・8 月・11 月、2013 年 3 月・8 月の計 5 回実施し、延べ約 70 名の参加があった（複数回参加は 12 名）。参加者の年齢層は幼児から 80 代まで幅広く、

また、回を重ねる毎に静岡市や豊橋市など遠方からの参加も増え、世代間交流・地域間交流の場にもなっている。

【主な実施プログラム】

- ・歩きながら地図にきこえた音を書き込み、ふりかえり時に協同して音の地図を制作。
- ・要所で立ち止まって数分間じっと耳をすまし、きこえた音をワークシートに書き出す。
- ・きこえた音を線、図、絵などで紙面に描く。
- ・ボランティアガイドから歴史にまつわる話を聞きながら昔の音を想像する。
- ・歩きながら自分の足音の変化を記録し、音から環境の違いを感じ取る。

過去の音環境を研究する試みについて

上野正章（大阪大学文学研究科・京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター）

過去の音の研究は従来から活発に行われてきた分野です。また、概観して気づくのは、文献資料に基づく研究が多いという傾向です。残された記録の量から見ても、質から見ても、遡れる年代から判断しても歴史研究における文献資料の豊かさは比類のないものがあり、これはある意味当然のことだと言えるでしょう。

ただし、文献資料は過去を完全に記録しているかという質問に答えることは、それほど簡単なことではありません。あらゆる文章による過去の記録は人の手によって作製されたものです。各記録者の目や耳などを通じて把握され書き

つけられた過去なので多様性に満ち、どれか一つの記録を「過去の完全な記録」と言い切るわけにはゆきません。

他方、19 世紀以降、歴史資料において大きな変化が生じました。写真、録画、録音等々の機械的な複製による記録の出現です。これらの手段を用いるならば、ある程度人の手によらずに過去をはるかに精密に記録することができま

す。発表者が取り組んでいるのは、文献資料に写真資料を組み合わせて行う過去の音の研究です。これによって、過去の音環境を解明する道筋が開けてくると考えます。

日本における「虫の音を愛でる文化」の歴史と学校教育

永瀧千燈（静岡大学教育学部）、小西潤子（沖縄県立芸術大学）

「虫の音を愛でる文化」は、『万葉集』、『枕草子』、『源氏物語』などの古典文学や江戸期の図像資料に見られる。また、庭や名所で虫の音を「聴くこと」は現代でも行われているし、擬声語を使って虫の音を「取り入れること」は、学校唱歌《虫の声》の例がある。ただし、中国でもコオロギを飼って音を楽しむことから、日本固有の文化とはいえない。

本研究では、江戸時代の雅楽集大成書『楽家録』（安倍季尚編纂、漢文1,686頁）をとりあげ、中国伝来の雅楽が日本での伝承を通じて、「虫の音を愛でる文化」といかにに関わり変化したかを明らかにした。特に注目したのは、「琴を弾く音とアブが障子にあたる音」「鉦鼓の音が鈴虫」「箏の音が蟬」と、それぞれの音色の類似性を指摘した記述である。雅楽の日本化とともに、外来楽器の音色が身近な鳴く虫の声に「たとえること」が行われてきたのである。ちなみに、清少納言は箏の音をクツワムシにたとえているが、クマゼミとクツワムシはいずれも大音量を発す

るし、周波数成分の分布が似ている。

日本の「虫の音を愛でる文化」を「聴くこと」「取り入れること」「たとえること」の3つの側面からとらえると、現代の子どもたちを取り囲む環境では、ペットショップでスズムシの音を聴いたり、アニメ番組に取り入れられた虫の音の効果音を聴いたりすることはできるが、虫の音を倍音まで聴きとることは難しい。また、「たとえること」には、音のイメージをとらえて何かに置き換えて伝える高度な力が求められる。

子どもたちにとって身近である鳴く虫は、理科（生態）、生活科（季節感）、音楽（学校唱歌《虫の声》）、国語（「変身したミンミンゼミ」）の教材となっている。豊かな感性や想像力を育むためには、虫の音を「聴くこと」「取り入れること」のみならず「たとえること」を加えた教科横断型の授業によって、音と向き合うことが大切だと考える。

五感で見る世界 - 音のユニバーサルデザイン教育の実践報告

谷川 憲司（静岡文化芸術大学）、佐々木 幸弥（ヤマハ株式会社）

静岡文化芸術大学デザイン学部で開講している「ユニバーサルデザイン」（以下UD）の授業の中で、目の見える人にも見えない人にも「音」を通じて伝えるデザインを「音のUD」として取り上げたので報告する。授業の概要は以下の通りである。

- 対象：静岡文化芸術大学デザイン学部 2年生 100名
 - 講師：佐々木幸弥（ヤマハ株式会社、武蔵野美術大学非常勤講師）
 - 内容：五感で見る世界 - 視覚障がい者が情報を感じることに
 - 内容：五感で見る世界 - 視覚障がい者が情報を感じることに
 - ①イヤークリーニングとサウンドマップの制作 ②視覚障がいについて ③音のユニバーサルデザイン ④騒音にしないために ⑤五感で感じるユニバーサルデザイン製品の体験
 - 授業形態：講義と演習（①と⑤が演習、②③④が講義）
- 音は視覚障がい者にとって重要な情報源である。音によ

って様々な情報を得る事ができ、サイン音や音声などによる情報伝達手段も多く導入されている。一方で音はその性質上、必要でない人にも届いたり、複数の音が混じり合ったりして、不快や騒音問題などを引き起こす場合もある。音のUDを行う際には、視覚障がい者にとって必要な音を分析するのはもちろんであるが、音の環境に配慮したデザインも求められる。

本授業では、①で自分の周囲に広がる音空間を認識することで、音を環境としてとらえる。②で対象となる視覚障がいの特徴と人の感覚の多様性を体得し、③で音を活用したUDの実例を示すと同時に、④では音の要らない人の立場を理解した上で、トータルデザインとしての音のUDの重要性を理解する。⑤では目の見える人も見えない人も共に使える音を活用したUD製品や、音を楽しむ製品に触れる事で、実感としてのUDの能力を獲得する。



写真3 プレゼンテーションの様子



写真4 プレゼンテーションの様子

レッジョ・エミリアの教育

小林 田鶴子（共栄大学）

【レッジョ・エミリアの教育について】

レッジョ・エミリアとは、イタリア北部にある小都市の名前で、人口は 16 万人位である。

ここで実施されている幼児教育は子どもたちの「創造性」と「共同性」を重視した「学びの共同体」を形成している教育として 1990 年代から世界的に注目されているが、その実践の原点は町の歴史に見ることができる。この地は第二次世界大戦後（1945 年）はレジスタンス運動の中心地であったが、保育者を中心とする市民が、壊された町から「自分たちで保育園を作ろう」としたことで有名である。イタリアはもともとローマカトリック系の幼稚園・保育園だけで、公立は無く、このレッジョ・エミリア市においても戦前は同様であった。しかし市民は、戦争によって町にころがっていた戦車を解体し、鉄を売って資金を作り、レンガをみんなで積み上げて作ったという、まさに「手づくり」そのものの園を出現させたのである。その様子は「Brick by brick」という言葉で表され、「一歩ずつ、レンガを手渡し、地域ごと」というような意味が込められている。

ここでの教育は、小グループの子どもたちによる、長期間のプロジェクト学習を基本としている。また、クラス担任教師以外に「アトリエスタ」と呼ばれる芸術家と「ペタゴジスタ」と呼ばれる教育学者が配置され、子どもの活動が展開されている。その活動は、「音楽」「美術」といった枠は無く、子どもたちは環境（周りの人間も含む）から学び、直感を得、自ら働きかけていくのである。このことは、「音と環境」「音と教育」を考えるにあたって、多くの示唆を含んでいると考えられる。

【発表者とレッジョ・エミリア教育の出会い】

発表者は前任校の美術教員より、この教育のことを聞いたが、2011 年 4 月に東京のワタリウム美術館で開催された展覧会にて「階段の声」というプロジェクトを知り、以前、自身が北海道江差町で小中学生を対象に実施したプロジェクトとほぼ同じことを幼児がやっていることに驚く。その後、2012 年 9 月 16 日から 1 週間現地を訪れ、幼児学校を見学し、その教師から話を聞いた。また、先週 3 月 16 日の東京でのワークショップ（「子ども教育立国プロジェクト」主催）で自分自身も子どもと同じ活動をやってみた。

ミュージアムジーク

松本玲子（ミュージアムジーク実践家）

「ミュージアムジーク」とは、美術館などを含む博物館でおこなわれるミュージアム・コンサートにおいて、展覧会のテーマや展示内容・作家・関係者および館のコンセプトや環境・歴史など、空間を含む博物館と展示・展覧会に関連したプログラムや演出で行われるコンサート、およびその概念を示す造語である。提唱者である松本玲子により 2004 年に商標登録（第 4815325 号）され、実践されている。単に博物館内での演奏という意識を超え「博物館でしかできないコンサート」であり以下のような特徴を持つ。

- ① 空間を含む博物館と、展示・展覧会に関連したプログラムでおこなわれる。
- ② 演奏者や博物館が一方的に音楽を提供するのではなく、来場者が展覧会や館について興味を持ち、互いに新たな関係を作るようなコミュニケーションを重視した内容である。
- ③ 演奏に限定せず、演出や衣装・配布するパンフレット・リーフなども含め、コンサートに関わる全ての要素を実践対象として捉える。
- ④ 音楽のみならず博物館内外の音に耳を澄ますことにより

「博物館の音の風景」を聴く。

実践については 1990 年から始まり現在まで以下の 15 館で開催されている。

竹久夢二伊香保記念館（群馬県）・高崎市立美術館（群馬県）・ガラスの歴史博物館（東京）・大阪府立弥生文化博物館・京都国立近代美術館・岡山市立オリエント美術館・世界のタイル博物館（愛知県）・山口県立美術館・群馬県立近代美術館・大阪府立近つ飛鳥博物館・奈良県立万葉文化会館・浜松市美術館・大塚国際美術館（徳島県）・伊豆一碧湖美術館（静岡県）・群馬県立自然史博物館（実践年順）

また 2013 年に千葉県立中央博物館で開催された日本サウンドスケープ協会 20 周年記念行事「サウンドスケープの教室」（同館と共催・企画展「音の風景」の一環）においても実践された

音楽を通じて博物館で耳を澄ませば、館と館を取り巻く環境・歴史など様々な要素も見つめることになる。ミュージアムジークで見えるものはまさにその風景であり、ミュージアムジークは「博物館でしかできない音の体験」である。

静寂を聴く

佐故圭子

絶対的な静寂。声なき声、音なき音を聞く。ただ、それだけ。

瞑想を続け、深めてゆくに連れ、静寂は深まり、澄み渡った世界を体験する。

静寂な世界はすべてぶっ続きで、ひとつつながりのいのち。

それこそが、本来の自己。気の世界。

この状態で、ただただ、当たり前の人間として生きること。そこに、サウンドスケープデザインの本質がある。

日本では、中国伝来の禅が、縄文以来の土壌の中で独自に発展し、文化の根底をなしている。

人々の生き方、たたずまい、言葉、こころ、身体・・・

茶道、華道、弓道、合気道、能などの芸能、墨絵、庭・・・

これらの文化。

人間の本質、それは、絶対的な静寂。そして、サウンドスケープのこころ。

なお、この実践の重要な部分は全て、野村昇平先生（環境平和総合研究所）、野村奈央先生（野口整体指導者）によるものである。

そして同時に、さまざまな日本の「よきもの」に通じている。

難しいことでも、神秘的なことでもない。幻でも、抽象でもない。

これは、事実。

ただ実践し日々深めることで、誰でも、手に取るように確かに、「静寂を聞く」。

そして、息を深くし、心の自由を得る。

火の見櫓の音風景

塩見 寛（Kei_まちづくりネットワーク）、鳥越けい子（青山学院大学）

本プロジェクトは、塩見が代表をつとめる「火の見櫓からまちづくりを考える会」の活動のなかで展開したもの。

「火の見櫓からまちづくりを考える会」の活動経緯は以下の通り：

2000.05 火の見櫓からまちづくりを考える会設立

2000.08～2003.10 静岡県内の火の見櫓の調査：地域分布、歴史的変遷、形態分析

2001.09.22 日本建築学会・論文発表

「地域景観における火の見櫓に関する研究：1 静岡県の現況、2 川根地域の分布と形態」

2002.06 環境芸術学会、2002.08 日本建築学会 3,4、2004.08 日本建築学会 5：論文発表

2003.01.22～26 写真展『火の見櫓は「遺産」か「ゴミ」か』静岡市民ギャラリー

2003.02.08～09 火の見櫓サミット in 榛北 中川根町山村開発センター他

★中川根町の古老 4 名に、半鐘の音をテーマにした聴き取り調査を鳥越も参加して実施。

2003.10 トヨタ財団「近代化とくらしの再発見」研究助成：「火の見櫓の歴史性・地域性・場所性」採択

2004.06～10 中山道の火の見櫓調査（長野県、岐阜県）

2004.11 静岡県都市景観賞優秀賞（まちづくり活動部門）受賞

2005.06 報告書『火の見櫓は「遺産」か「ゴミ」か』発刊

2005～2012 火の見櫓に関する個別相談（自治会、消防団等）：維持保全の状況、耐震性・老朽化度等

2006.12 富士川町南松野の火の見櫓の登録文化財への申請（所見作成等）、登録

2010.07 本『火の見櫓 地域を見つめる安全遺産』鹿島出版会・発刊：会が編著

2011.03 伊伝財団 文化財保護振興奨励賞受賞

幻の静岡県音楽公園

塩見 寛（Kei_まちづくりネットワーク）

静岡県音楽公園構想は、1987（昭和 62）年に策定された「静岡県新総合計画」の具体化の一環として考えられたものであり、各界有識者からなる「静岡県音楽堂構想懇談会」によって 1988 年度から検討がはじめられた。

静岡県は、音楽堂の建設にとどまらない音楽を中心とした一大芸術文化ゾーンを整備する方針を打ち出した。

音楽公園構想は、県という地方自治体が行う事業としては極めてスケールの大きい世界水準をめざした壮大な構想であった。広大な浜名湖畔を予定地（120ha）として、その恵まれた自然環境と世界一の楽器産業や光・映像を含め先

端技術産業の集積地という特性を最大限に生かした世界にも類例のない音楽文化創造の拠点となる施設の建設が考えられていた。

1992（平成 4）年 12 月には国際コンペ要綱を完成させた。翌年の 1 月には知事に要綱を説明し了承を得る予定であったが、突然知事が病に倒れてキャンセルになった。その後 6 月に知事選が行われ、新しい知事が誕生し、音楽公園計画の見直しが行われて国際コンペは実施されることなく、音楽公園は幻に終わった。

日本サウンドスケープ協会20周年記念例会「サウンドスケープのころ 2 -音と環境、音と教育-」

第2部 フォーラム「環境教育における音」

Part 2 Forum: Sound in Environmental Education

話題提供者 : 嶋 和彦(浜松市楽器博物館館長)、大野嘉章(元・湖風店主、元・環境保全課職員)

岩田茉莉江(音風景研究家)、土田義郎(金沢工業大学環境・建築学部教授)

モデレーター: 兼古勝史(武蔵大学・立教大学兼任講師)

会 場 : クリエート浜松ギャラリー31

日 時 : 2014 年 3 月 22 日(土) 15:15~17:00

兼古: 皆さん、こんにちは。今日はご来場いただき有り難うございます。今日はポスターセッションで、音の教育、サウンド・エデュケーションあるいはサウンドスケープをめぐる、いろいろな方々の展示・発表がされたわけですが、後半は、それを踏まえて、まさに音と教育、そして環境という—今回の例会全体のテーマが「音と教育、音と環境」となっておりますが—そういうことにいろいろと取り組んでいるスペシャリスト(専門家)の方々をお招きしてフォーラムという場を持てることを、大変私自身もワクワクしております。

このフォーラムの大きなテーマとしては「環境教育における音」ということで進めさせていただきたいと思っています。ただ、「環境教育における音」と言いましても、いわゆる教科教育としての音楽教育とか、学校教育とか、環境・教育・学校みたいな限定された意味ではなくて、このことを一つのヒントに、音と環境、あるいは音と教育ということについて、それぞれ取り組んできた方々が体験されたことや考えていらっしゃることをいろいろ出し合える、そんな場になっていたら良いと思っています。1時間45分という短い時間ですが、その中で印象に残る話ができるように楽しくやっていきたいと思っています。よろしくお願いします。

私、先程紹介されました司会の兼古です。

それでは、まず、4人の話題提供者の皆さんに自己紹介も兼ねながら「音との出会い、関わり」につきまして、お話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

土田: あらためまして、私と音との出会いについて少しお話しさせていただきます。音と出会ったのは、生まれた時ですかね。だと思いますけれども、そういう話ではないですね。私は建築学科の専門の方におりますけれども、学部の時実は音を専門にしていなかったんですね。もともとは、熱とか都市の環境とかいうことでやっていたんですけど、大学院では思ったところに行けなくて挫折を味わいまして。他のところで拾ってくれる先生がおりまして、そこで音というものを初めてやったわけですが、そこでは建築分野の中での音ということでしたので、騒音評価みたいなことをやったんですね。そして騒音、騒音とやっていったんですけど、やっていく内に、マイナス面ばかり見ていくことが本当に良いことだろうか少し

思いはじめまして、何か音自体の良さといったものもあるのではないのかなあということで考え始めたことが、サウンドスケープ的な意味合いでの音との出会いになってくるかと思います。

その中で、サイン音の話だとか、そういったものをだんだんやり始めまして、家電製品の音づくりにもちょっと関わった時期もありました。それでやっている内に、金沢工業大学に移りまして、金沢市の「残したい日本の音風景100選」の事業に合わせて何かやってみたいということで、じゃ何かイベントを作りましょうということで、サウンド・エデュケーションの始まりみたいなことをやり始めたのが、サウンド・エデュケーションという意味合いでの音との出会いになってくるかと思います。こんな形で音と出会いながら、もう既に20数年経ってしまった、という感じです。

嶋: こんにちは。楽器博物館の嶋です。「音との出会いと関わり」ということですが、私の仕事は今、楽器博物館の活動ですから、楽器の音楽と音と、その背後の文化を紹介しています。浜松の楽器博物館は西洋楽器だけではなくて世界中の楽器が対象ですから、世界中のいろいろな音、またその音に対する価値観を紹介することです。

音楽に限らず、私たちが生きている間に、学んだり見たり体験したりできることは本当に限られています。たかだか何十年かの人生で、どんな音に出会うか、どんな食べものに会うか、どんな人に出会うかというのは限られています。音楽に関して言えば、世界中の音楽や音の中で、私たち日本人が普段接することができる音楽・音というのは、もう微々たるものですね。その出会った音楽が、音楽の全てだと思っているといえるでしょう。けれども、生きている限りは、まだ知らない世界をちょっと知ってみれば「あっ」と思うかもしれない。食べたこともない料理を食べて「お、これは美味しい」「こんなの初めてだ」というような体験を、音とか楽器とか音楽でやってもらえたらいいなあと思います。それは仕事上のことです。

プライベートなことに話を移しますと、先程土田さんがおっしゃいましたが、生まれてすぐにいろいろな音を聞くわけで、今まで私が60年近く生きてきた中で、一番印象に残っている音、一番好きな音と嫌だなと思った音、その2つをご紹介します。

いいな—と、本当に今でも頭の中に残っている音という

のは、人間の声なんです。日本は今ではもう物売りがいなくなりましたけれども、私は下町に住んでいまして、そこに物売りが来るわけです。お豆腐屋さんとか、金魚屋さんとか、昭和30年代ですから、来たわけですね。で、竿竹おじさんが1週間に1回か1ヶ月に1回か、それは忘れてしまいましたけれど、来るんですよ、自転車で。横に大八車の荷台みたいなものを付けて。そこになが〜い竿竹を置いて来るんですね。その竿竹売りの声が強烈に素晴らしい。ちょっと真似してみます。こんなです。上手くはないですよ。「たけ〜、さお〜だけえ〜」（拍手）。それがね、本当にね、パヴァロッティも及ばない程のテナーですよ。きれいな声で、夏の昼下がりには道を通るんです。それを聞くのが楽しみでした。ね。「ああ、また竿竹のおっちゃん来たな」と。本当に今でも印象に残っています。音の原点というのは、道具もありますけれども、やっぱり人の声なんだなあと思います。

それから嫌な音、これは大人になってからというか、物心ついてからの話ですけれども、横断歩道の視覚障害者のための音「通リゃんせ」の電子音。音痴でしょ？本当に音程の狂った変な音程で、♪に〜にに、に〜ににに〜♪ってね。で、ある人に聞いたら「電子音だから音程が悪いんですよ」と言うから、「馬鹿け」と。「電子音だったらもっとちゃんとできるだろ」と。それに、なんで「通リゃんせ」を選んだのか。これはもう不愉快極まりない音ですね。今はさすがになくなりましたけれども。そんなことを、プライベートな感想として持っております。

岩田：皆さん初めまして、岩田茉莉江と申します。私の「音との出会い・関わり」ですけれども、初めて音に出会ったのは、今から10年前になります。学生時代に、大学3年の夏休みが来る時に、京都の他の大学の授業を、嵯峨芸術大学の「エコツーリズム」という授業を受けていまして、単位互換制度で単位が取れるというので興味を持って受けていましたら、その先生が南大東島―沖縄県東に400kmのところにありますけれども―に関わっていらっしゃって、「君、南大東島に行きたいか？」って聞かれたんですね。私はもともと自然が大好きだったので、奈良育ちなんですけれども。南大東島って先生の話や写真からではもう、想像もつかないほどの環境のところで、「どんなところだろう？」と、初めて親元を離れて違う環境で暮してみたいなっていうので、「行きたいです！」って、ふた言目に答えてですね、1ヶ月間、3人だけ、みんなそれぞれテーマ、イラストを書く子だったり、観光学部の子と私と、お世話になることになって、行ったんです。それが確か7月31日でした。

その時に、「島まるごと館」というミュージアムにインターシップということで、先生から聞いて送り込まれたのですけれども、着いた日に当時の館長さんに言われたのは、「ミュージアムのお手伝いを何もしなくていいから」と。「何もしなくていいよ。自分たちの研究テーマで好きなことをやりなさい。」この島はまだまだ―それまでずっと無人島だったんですね、114年前までは―まだまだ発展途上で、いろんな分野の研究者が来るんですけれども、自分たちで深めて見つけた南大東島を、また教えてほしいと。何

年経ってもいいし、何ヶ月経ってからでもいいから、それを返してほしいと言われてまして。「ああ、みんなどうしよう」と、手伝う気満々で行って、受け身だったんですけれども、自分たちでテーマを見つけてということで、それからもう毎日、私たちは取りあえず島を知ろうと、どっぷり浸かろうと思ひまして、子ども達と一緒に、幕（ハグ）という防風林にクワガタを採りに行ったり、海に行っては魚を捕ったり、夜は青年会が「エイサー」という盆踊りの練習をしていたので、そういった練習に参加させてもらったりと、食事から文化から、生活からを毎日、毎日、どんどん、どんどん入っていった島の人の感覚に近づいていった時に、私の耳にすごく音が印象的に残ってしまっていて、特に大東神社という神社が島のまん中にあるんですけれども、そこは、ヒヨドリですとか、大東メジロという固有種など、いろんな鳥がいて、まるで鳥の楽園のように、いろんな音が聞こえるんです。そこに一人でボツンと行った時に、いろんな音が聞こえているけれども、その背景までもクリアに聞こえてきて、音をテーマにこの島を巡って見たら面白いかもしれないなと。それは私一人ですというのではなくて、環境教育をその時は専攻していたので、子ども達と一緒に、子どもの視点でこの島を音巡りしようということで始めて、インタビューして作ったのが、先程のポスターセッションの「南大東島音たまり」だったんです。

自分自身もどんどん、どんどん耳が変わっていくという体験をしたんですね。島の人のいろんな生活の話だったり、漁師さんや農家の人の「今、天気が変わった」とか、「海鳴りが聞こえると、台風が発生したことがわかる」とか、観点望みたいなお話も聞けてですね、どんどん、どんどん自分の耳もそういうものを察知できるようになっていった時に、「あ、これって別に島で育ってなくても身につくんだ。」というのが、私の発見でした。島を出てからは、耳の感覚と一緒にひらいていくという音のワークショップを、森の中であったり、神社・お寺色いろんなところでやらせてもらっているんですけれども、今は、そういう音の関わりに至っています。



写真1 土田義郎氏（左）と嶋和彦氏（右）

大野：大野です。モデレーターから振られた話はともかくとして、私が準備したように進めさせてもらいます。学会発表で勧進帳をやると話が飛んで戻れなくなってしまうので、原稿を用意して読み上げるようにしています。今日も「音と環境、音と教育」ということで、私の話題提供をさせてもらいたいと思います。

私のプロフィールに「環境は予めあるのではない、環境を紡ぐことによって環境になるのだ。」と書きました。この箴言は私が作ったものです。在職中に環境教育に携わって獲得した認識です。NHKが5年毎に実施している「日本人の好きな音」の調査によると、圧倒的に鳥のさえずりと川のせせらぎが上位にきます。そして人口音では鐘の音です。私は公害行政に従事し、日頃、騒音ばかりを扱っていましたが、環境庁から委託を受けて、地域の人々にとっての鐘の音の意味を調査したことがあります。鐘の音に関する思い出が続々と出てきました。「除夜の鐘を撞きに行ったことがある。」と体験を記したものの、「鐘の音を聞くと心が洗われ、清々しい気持ちにさせられます。」「小学生の頃、除夜の鐘の音を数えて、いつも途中までしか数えられなかったことを思い出す。」と思い出を語るもの。

たくさんの個人的思い出が綴られた中に、中学生の回答でハッとさせられるものがありました。「自分は知らなかったが、親はずっと聞こえていたらしい。」親子が同じ家で生活をしていて、親には聞こえ、子は気づいていない。これは聴力の差ではありません。聞く・聞こうとする態度の違いなのでしょう。親の鐘の音を聞く態度が、子に伝承されていないということをあらわしています。鐘の音に自らの思い出を語る親は261人いましたが、中学生はわずか56人でした。鐘の音を一度も聞いたことがないと答える中学生は72人いました。親は10人にすぎません。鐘の音が個人史の中に折り込みにくい状況が進んでいます。鐘の音は、その思い出を持っているから聞くことができるとも言えます。個人史の中にだけ鐘の音が生きているわけではありません。平家物語を筆頭に、幼い頃の童謡や童話、絵本の挿絵に始まって、短歌、俳句、文楽、歌舞伎、謡曲、唱歌、歌謡曲まで繰り返し登場します。日本の文化を読み解くキーとして、鐘の音があったことがわかります。鐘の音を聞いた条件反射として、私たちは諸行無常に聞こえるように刷り込まれています。ある親は次のように書いてきました。「朝に夕に、どこからともなく風に乗って鐘の音が聞こえてくるような街に、ぜひ住んでみたいと思います。また、自分の街がそのようになったらいいなと思います。」

このように、鐘の音は住み良い環境のシンボルを担わされています。鐘の音は私たち日本人にとって音の環境機関と言えるでしょう。世界遺産で使われる英語の“heritage”も、単に物を指すだけではなく、その物の価値を守り受け継いでいこうとする意思までも含んでいるといえます。心配なことに、「全然聞いたことがないので特に思うことはない。」「鐘の音に特に感じることはありません。」「鐘の音を一度も聞いたことがないと思います。」という中学生の回答が出てきています。「心ここに在らざれば、聴けども聞こえず」なのでしょう。聞く心を失えば、聞こえない。この中学生たちは、「遠くの人に鐘の音を聞かせるには、鐘の音を大きくすればいいと思う。」「全然聞こえな

いから、スピーカーを付けてもらいたい。」と言います。一方、聞こえないことを嘆く親達は、「いろいろな生活雑音が増えていって、鐘の澄んだ音は、それらの音にかき消されてしまっているのと、心にもそれを聞き入ろうとする余裕がなくなっている。」と書いてきました。鐘の音が聞こえないから、周りの騒音に打ち勝つもっと大きな音を出せという反応と、聞こえなくなってしまったのは私たちの生活態度に原因があったかもしれないと反省する態度の違いに注目しましょう。個人の環境体験の重要さが、ここにあります。集団として文化を語り継ぐことに加え、個人の思い出が紡がれた環境を持つこと、これが次の対環境構造を左右します。

私たちの対環境構造が、次の世代の環境構造を作っています。ですから心配は、心を失うことに留まらず、行動をも変えてしまい、異なる環境を作ってしまう、結果としてheritageとして伝承されないことが懸念されます。だから「環境は予めあるのではない。環境を紡ぐことによって環境になるのだ。」なのです。「青い鳥」ではないけれど、大切な物は常にそうなのだと思います。宿命の赤い糸を探す人がいます。そんなものは最初からありません。関係を紡いだ結果、赤い糸になり得るのです。赤い糸は探すものではなくて、作る物です。誰にでもチャンスは用意されています。環境も同じだと思います。以上が、私の音・環境教育をキーワードにした話題提供です。



写真2 岩田茉莉江氏（左）と大野嘉章氏（右）

■環境をきく・環境との関係を作る

兼古：有り難うございます。いろんなテーマが入っていたと思いますが、環境というものが予めあるというよりは、関係を作っていくというお話が印象に残りました。つまり「サウンドスケープ」というのも、いわゆる「音環境」という言い方ではなく、なぜ「サウンドスケープ」という言い方を敢えてしているかということ、人間が聞いた、人間が風景としてどのように聞いたかという、その「聞かれ方」というか、「耳」というか、そこに比重を置いた音環境の捉え方だということに定義されていると思うのですけれども、まさに環境をそのように捉える、風景をそのように捉

えるところに意味があるのだということをあらためて感じました。

そして、今の太田さんのお話の「環境を聞く」あるいは「環境の中の音」「環境と関係を作る」ということに関して、ぜひ他の皆さんのお考えとか、感想・実践なども交えて聞きたいと思うのですけれども、ここはやはり土田先生にまず、地域の環境とか、まちづくりなどのワークショップをされていることを踏まえて、ぜひ聞かせてください。

土田：別に台本があるわけではないんですけど、たまたまなんですけども、私も金沢で鐘の音がどの位聞こえているか中学生を対象に調査したことがありました。やっぱり聞こえていないんですね。親の世代は確かに聞こえているんですよ。太田さんもおっしゃられた形で「もっと大きくした方がいい。」だとかいう話も出てきていますし。あと「鐘の音を聞いてみて不気味だった。」なんて言う子どもたちもいたんですね。やっぱりその意味が受け継がれていないことには、その音が保存されても全然意味をなさないというか、体をなさないというか、そういうふうなことがあるんだろうなと思います。

金沢の「音風景 100 選」の中に選ばれているのに、寺町寺院群の鐘の音というのがありまして、実は住職さんがつく鐘の音ではなくて地元の愛好会「鐘音愛好会」という鐘の音を愛する会ですね。主にリタイアされた方々が中心となって土曜日の夕方 6 時に鐘をつくなんていう活動をして、もうかれこれ 20 年近くなりましたけれども。最初にそれをやり出した方は数年前にお亡くなりになりましたけれども、そのお子さんが受け継いで鐘をつき続けています。そういうようなことをする中で、少しずつそういうようなものを引き継いでいかなければならない時代になってしまったのかなという気がしますね。私もそういうようなことを受けて、子どもたちと一緒に鐘つき体験をしようというワークショップをしたことがあります。鐘をつくだけではつまらないので、その土地の中をいろいろ歩き回って音の地図を作ってみて、最後に「この地区は寺町とって、お寺さんがいっぱいあって、鐘の音を守ろうという動きがあるんだよ。」ということをチラッと小耳に挟むようにして入れながら、「じゃ、ついてみようか」というような形でつかせると、はしゃぎますね。子どもたちにとっては楽しく体験できることが必要なかなと思っています。

学校教育だとか塾だとかいう、そういうところだと結果を求められますけれど、結果を求めない体験というのが家庭の中、地域の中で必要なかなというふうに感じています。まあ、どれだけ私が寄与できているかといと、本当に参加者は微々たるものですから、どうしたらいいんでしょうね。もっと地域にそういうのが広がるべきかなあなんて思うんですけど、それを考えていきたいというのが課題だと思います。

兼古：嶋さん、鐘の音の話が出ましたけど、鐘の音もある意味大きな楽器とも言えるかなと思いながら聞いたんですけど。鐘の音と環境とか楽器とか、その辺のことを含めて、もし何かありましたら。

嶋：楽器とか楽器でないかとか、何が楽器とかいうのはややこしい話ですから、そんなことはどうでもいい話ですね。鐘は私自身もとても好きです。日本の鐘も好きですし、ヨーロッパの鐘も好きです。まち中にあいう音が響くというのは、とっても僕は好きです。ちょっと太田さんに一つ質問ですけど、先程の調査のことですけどね、大人が 250 人位ですか、鐘の音を聞いたことがあるのは。子どもや中学生では、聞いたことがあるのは 10 人という話ですが。その聞いたことがあるという大人は、いつ聞いたんですか？大人になってからですか？それとも子どもの頃ですか？

太田：私たちが調査したのは、中学生を対象にして、中学生が持ち帰ったアンケート用紙に大人が割り込んで書いたという形なんですね。ですから子どもたちには、朝聞こえるか、夕方聞こえるか、除夜の鐘が聞こえるか、何処のお寺の鐘だと思うかというように細かく聞いているんですけど、大人に書き込んでもらったのは、そこまで分解しないで、「鐘の音を聞いた時にどういうことを思いますか？」と漠然と聞いた中に割り込んで、子どもからアンケート用紙を取り上げて書いたという感じですね。ですから大人の意見を聞いてくださいっていうふうに聞いたわけではないので、そう書けば書きたかった親はもっといたかもしれない。それほど、この 260 いくつと 70 いくつに意味があるわけではないんだけど、それと聞こえていないというのが逆転しているというところには意味はあるかなって思ったんです。その程度の数字として理解してください。

嶋：なるほど。時代が違いますが、その大人が中学生の頃というのは、もう何十年も前だから、世の中が違いますので同じレベルで比較することはできないと思うんです。たぶん、その大人が子どもの頃には世の中は今よりもっと静かだし、昭和の時代でしようから、お寺の鐘の音は聞いていると思うんです。でも、またひょっとしたら、その大人が子どもの頃は全然お寺の鐘には興味がなかったかもしれない。だから今の大人と今の子どもで比べると、あんまりこうだからこうだと断言はできないと思うんです。

私の家はですね、大阪の下町ですけども、江戸でいうと、八つあんな熊さんの世界ですけど、お寺が近くにありまして、直線距離にすると 200m ぐらいのところにお寺があるんですね。そこのお寺の鐘は、夕方鳴っていましたね、私が小学生の頃は。お昼も鳴ってましたよ、毎日、「ゴーン」と。除夜の鐘は小学生の頃から毎年つきに行っていました。鐘には自分の思い出があります。いつの頃から全然鳴らなくなった。たぶんそれは、喧しいという苦情が、まち中から出たと思うんです。今の日本は音に対して「喧しい」という苦情が多いんです、お寺の鐘とか、野外コンサートとか。一方でまた、無茶苦茶喧しいですね、まち中はガンガンガン。矛盾した状況が今の日本かなというふうに感じるんです。ヨーロッパに行くとかね、鳴ってますよ、鐘がカンカラカンカラ、お昼も夕方も。日本のようにゴーンではなく、向こうはカンカラカンカラでしょ。喧しいですよ。何か録音作業でもしているもんなら、邪魔になってしかたがない。日本から録音の人が教会で録音するために行くと、「お昼に鐘の音が鳴って録音中断ですよ。」とお

っしやいますね。でも、それでいいんですよ。鐘が優先。何を優先にするかというのは、社会の価値観とか人々の意識によって全く違ってきているので、今の日本がいいなあとは思わないというのが、鐘にまつわる感想です。

岩田：南大東島には鐘はないのですが、島は鮪と鯖の漁場なので、「昔はその漁業市場の人たちが、今日は大漁だった一という日には、ホラ貝を吹く。」と島の人が言っていました。在所という中心部で吹くと、おおかた島全体に行き渡る。もちろん、その時、放送など何もないんですけども、みんな聞こえるのでホラ貝で知らせたんだよ、と。そういう暮らしとか生業とか、やはり自分たちが生きていく上で必要な音っていうのは耳に入ってくるし、聞こえているし、意識もするし、大切にしていこうと思うのです。

さっきの海鳴りの話なんですけれども、確かに南大東島とはいえ、全員の漁師さんが海鳴りを聞いているかっていうと、そうではなかったんですね。インタビューをしていけばいくほど、30 人ぐらいいる漁師さんの内に、海鳴りを聞いて台風が発生したことがわかると言っている人は、本当に 1 人か 2 人ぐらいで。今は船にレーダーが付いていますし、それを見ればどこに魚がいるとか、天気予報を見れば天気がどうなるとか、天気図でもわかるので、確かにその必要もないんですけども、昔ながらの情報ですとか、その人はお父さんから受け継いだ技だと思うんですけども、そういうものを頼りにして暮らされていたので、その人の耳には海鳴りが聞こえる、と。「どんな風に聞こえるんですか？」って聞くと、「もう、何ていうか…言葉では表しづらいんですけど、ゴーッと地響きのように、ずーっと連続して続いて聞こえてくる」と。また別のある漁師さんに聞くと、「自分の家の戸がカタカタと鳴って海鳴りが発生したことがわかる。そういう合図がある」と。

そのことは今の若い漁師さんは知らないですし、子どもたちにも「海鳴りが聞こえるんだって。」って話をしたら、「へえ、そうなんだ。」と、知らなかったんですね。「じゃ、ちょっと一緒に海鳴りを観察してみようよ。」ということで、「海鳴り観察日記」を付け始めたんです。島のどの辺りから、どんな風に、何時ぐらいに音が聞こえるかを、それぞれの感性でいいので、言葉にしてみようということで、お家で聞こえた時に書いてもらいました。そうすると、「この間、いついつ聞こえたよ！」と教えてくれるようになって、昔の聞き方だったり、今少なからず残っている聞き方を、現場で子どもたちに伝えながら観察することで、海鳴りの音風景を聞くことを一緒にできるのかなと、その時思いました。

兼古：環境の話、鐘の話から、耳の話というところへね、今いったと思うんですけども。先程実は、塩見さんと、あちら（ポスターセッション）の火の見櫓について、個人的に話をしたんですけど、火の見櫓が鳴ってる時の音を聞くというのは、実は鳴っていない時も、そういう耳で環境を聞いているんだみたいなことがあって。つまり、今テーマになっている鐘の音も、鐘の音を聞いているっていうのは、日常的に、ヨーロッパなんかじゃ日常的に鳴っているっていう嶋さんのお話もありましたけれども、その音を聞

くと耳ができてきて、鳴っていない時も鳴るかもしれないという、鳴っていないという状態も含めて、まちとか環境とかに接しているような感覚があるのかな、と。

それが今だと、実は私、メディア社会学科というところで学生と音のことをやるんですが、「お正月の音って何？」って聞くと、やっぱり「鐘の音」って言うんですね。アンケートをとると、鐘の音、カウントダウン、花火の音、お囃子の音って出てくるんです。ほとんどそれって、テレビでやっている視聴率の順番みたいな感じで出てくるんですけど、皆テレビで聞いているんですね。そういうふうにな一種のメディアイベントとして、与えられる音として聞くみたいな聞き方はしているんだけど、普段から、このまちに鐘の音が鳴るのかな、鳴っているのかなとか、何かそういうもの。あるいは花火の音だったら、単純に「日本の夏」「花火の音」「お祭り」っていうんじゃないくて、夏の花火だったら空襲の鎮魂のために花火大会が始まったり、戦国時代の故事に因んでとか、地域地域でいろんな意味がおそらくあるんだと思うんですけど、何かそういうことを含めて「音を聞く耳」というものが失われている、変わってきているのかもしれないと思ったんです。

実はですね、ここでちょっとイレギュラーではありますが、まさに火の見櫓の話が出たんで、会場の塩見さん、今までの話を聞いて、火の見櫓の話で、音に関わるお話など、もしあれば。



写真 3 フロアを交えたディスカッションの様子

塩見：火の見櫓がなんで面白いかというと、いろいろありますが、大事なのは半鐘です。半鐘は実は火の見櫓の心臓なんですね。半鐘がないと火の見櫓は機能しない。櫓の形—僕はデザインというか、建築、まちづくりを専門にしているんですけど—火の見櫓の形というのは、やはり見た目に面白いし、心臓の部分の半鐘があるかないかによって、その火の見櫓が活着しているかどうか分かるような気がします。今、本来の機能はなくなったけれど、半鐘だけは今だに掛かっている火の見櫓も多いんです。

しかし機能がなくなってしまうと、半鐘の音を聞く機会がない。こどもの頃、近くで火事があったって聞いたことはあります。火の見櫓が機能していた頃は、考えてみますと、

半鐘の音を聞かない時の方が実は幸せなんです。半鐘が鳴るということは、ふしあわせな時間が来た、ということなんです。半鐘の音によって人々は条件反射で「これは火事だ!」「大変だ!」「どこだ!」と思ってしまう。消防団の人は身体が反射的に動いてしまう。半鐘の音を聞くことによって一大事になってしまうんです。聞かない方がいい時間が過ぎていた、ということです。普段は聞いていない半鐘の音で生活自体が毎日を支配していたということです。日本全国津々浦々に火の見櫓はありましたから、日本の人々の生活自体が半鐘の音によって支配され、毎日の安全な生活を送っていたということがいえる。聞こえない音が、安全な生活を支配していた、そういう時代が日本にあったということ。これは何て面白いことなんだろうか、と思うのです。

兼古: 半鐘の残っている地域がね、静岡県の大井川沿いの山の方に多いという話も含めて、そういう聞く耳が残っている。実は静岡県浜松地方って、まさに音楽公園の時に調査をしたんですけど、その時に、波の音が聞こえると天気がどうなるとか、山の方の音が聞こえるとどうとか、時代が変わっても、新幹線の音が聞こえると雨だとかいうような、そんな文化があったりとか、音によって環境の状況などを聞くという文化があって、それが今言われたように、鳴らない方がいいものもあつたりする。話がちょっと非常に飛んで何ですけれども、大井川沿いの大井川鉄道の奥なんかは「今日は汽笛が近いで明日は雨ずらよ。」みたいな言い方をするというのを駅長さんから話を聞いたりして、そういうものが残っている地域というのがまだまだあるのかもしれないなあと思いつながら聞きました。

すみません脱線というか、客席に振ってしまった流れで(笑)、実は、同じその火の見櫓のことを一緒に発表されていた鳥越先生は何か、鐘の音とか、環境とかについて。

鳥越: そうですね。大野さんもおっしゃったように「環境を紡ぐことによって環境になる」というのは、音環境はまさにそうですね。音を聞くという状況とその行為があって、音環境をつくっている。そして、さっきのお寺の鐘も火の見櫓も今、その状況が大きく変わっています。

岩田さんが話された南大東島の漁師さんの音風景にも関連するんですが、サウンドスケープ研究の調査フィールドの古典みたいなところで、レスコニールっていうフランスのブルターニュ地方の小さな漁村があるんです。シェーファーが設立した WSP (世界サウンドスケープ・プロジェクト) がその調査活動の一環で当地を訪れたときには、村人たちが沖合に設置した「鳴り笛ブイ」の音を利用して、天気の変化を予測していた。それは、村人たちが自分たちの耳で実際に把握した音風景・サウンドスケープと、彼等の日々の生業としての漁業が深く結びついていた事例です。

シェーファーたちがその調査をしたのは 1975 年なんですけど、実は去年の夏 (2013 年 8 月)、私は初めてレスコニールを実際に訪れたんですよ。南大東島でも今、漁船にレーダーが導入されている話がありました。そこでグローバルゼーションがどこまでいっているかわからないんですけど、レスコニールの場合、かなり以前からそのプロセス

に巻き込まれた。つまり、レスコニールを漁港とした漁業はもはや成り立たなくなっていて、近くにあるもっと大きな漁港に吸収された結果、レスコニールは「観光漁村」になっていました。レスコニールで会った人に「鳴り笛ブイ」のことを聞いてみましたが、昔のまちの写真を展示しているお土産物屋さんのご主人を除いて、誰ひとり知りませんでした。そこで、近くの漁港のあるまち、ギルビネックにも足を延ばして、漁船の船長さんに話を聞きました。入れもらった操舵室には無線通信機や魚群探知機といった各種のハイテク機器が搭載されていて、そうしたレーダーでいろいろな情報を得ていることを話してくれた。つまり、鳴り笛ブイなんて、とてもじゃないけど使っていない状況が良く分かりました。さらに、そうしたギルビネックを母港とした漁船の獲物も、より大きな会社の船が持つていっちゃうので、ここの漁船の多くが売りに出されているという話しも聞きました。身近なまちづくりも漁業も音の風景との関係も全部含めて、ほんとに大きなこう、世の中がきっと変わっている、今、その狭間にいる感じがすごいですね。

つまり、そのことは音風景の問題だけじゃなくてね、どういう風にまちをつくっていくかだとか、環境と文化というのか、文化遺産をめぐる問題とか、環境社会学的みたいなことも、本当にその辺をうまくポイントにしてやっていかなければならない大変な時代だと思います。

だからこそ、そういう新しい状況を見ながら、今後どのような生き生きとした、かつての鐘の音とか、さっき話題になった半鐘にしても、そういった音が生き生きとした形で、私たちの生活を聞くということによって営んでいけるのかみたいな、そういったテーマがきっとあるんだろうと思います。だから、まあ、昔との違いが出てきたということまで今、随分いろんな話になったけれど、それは音だけの問題じゃない、むしろ音の問題じゃなくて社会や全体的なものが変わってきているから音にも変化が出てきているんでしょう。それを音の風景から問い直しているのが今日のフォーラム。ということは、今後どうしていくべきか、などと思いながら聞いていました。



写真4 フォーラムでの一コマ

■音から環境・文化・生き方を考えるとは

兼古：今、鐘の音と環境の音ということから一巡しながら、これと関わりのある展示の方のお話もうかがってきたわけですが、鳥越先生の話にもあった、時代、グローバリゼーションも含めて私たちの聞く耳とか環境との関わり方が変わってきているような気がします。そういう意味で言うと、サウンドスケープ、音と関わると言っているんですけど、私たちのいわゆる外側にあるものとしての、「環境」ではなく、まさに私たちの生き方の問題というか、私たちがどういう風に環境と接して生きていくか考えるヒントが、音との関わりの中にもあると思うんですが、生き方とかその辺も含めて、それぞれのご意見を大野さんからお願いします。

大野：環境庁が「残したい日本の音風景 100 選」を選んだのですが、浜松では何が選ばれたかご存知でしょうか。浜松市民の方で知っている方は？

フロアから：波小僧。

大野：私は遠州灘の鳴き砂なのかなと思ったのだけど、波小僧が選ばれた。波小僧が現われたのを音できくんですね。多分、そういうことというのは一次産業が主体だった時代、みんなが気を付けていかなければならなかった才覚、それを知らないとか雨が降るぞとか、海が荒れるぞという自然からのメッセージ、サイン音として注意をしていた時代があった。それは一次産業に裏付けられていた時代の生き方だったんだろうと思う。今、二次産業、三次産業に従事する人が圧倒的に多くなってきた時に、自然の音に注意を向けようということはかなり無理なことかな。私たちの生活スタイルが平準化している、自然に耳を傾けるとか、農業・林業に従事している人の割合が圧倒的に少なくなっている中で、音環境遺産として波小僧を残そうということはとても難しい時代になっているのかなと思います。その辺の生き方。個人の生き方というより、産業構造が変わってきていることで、守るべき環境遺産も変わってくるかなと思います。

兼古：産業が変わってくることによって私たちの聴き方も変わらざるをえないということもあると思うのですが、そういう意味でいうと南大東島はそうじゃないのでしょうか。

岩田：そうじゃない耳…私が調査した限りでは、海鳴りがきこえると台風が発生したことがわかるという聞き方をしている方は、漁師さん二人だけでした。グローバリゼーションは田舎でも入ってきていると思うんですね。じゃ、今の時代の流れとしてそのままいくのか、それとも何か環境教育やまちづくりのアプローチとして残していくのかという議論が出てくると思うのですが、私も体験して思ったのですが、今、そういう聞き方をしている人が一人いっちゃって、その音がきこえてくる環境であることは貴重なことだと思うんですね。環境が変化すると、岩場の形が変形して海鳴りもきこえなくなります。最近は台風が発生する

ことは多くなっていますが、そういう聞き方をしていると、台風が近づいてくるから明日は船をしまおうとか、畑に水をやっておこうという動きになるのですが、大人をみて子供たちも育つので、どのように対処するか、知らないうちに聞く耳をもっていると思います。でも意識して大人たちも伝えていかないと、島であっても途切れてしまうのかなという危機感を感じたのですね。そこで、どういう聞き方がされているかを修士論文にまとめて、島の人にお伝えするのが私の役割かと思いました。また、「音たまり」を通じて、観光客、島人いろんな人が音をきっかけに島の状況を知ることができるアプローチを選びました。今は 25 個しか音がないですが、時を経ることで音の変化や聴き方の変化を増やしていき、昔の人はこういう風にきいていたという情報を残し、その音風景に寄り添っていく、一緒にやってみるということが、聞き方が変わったとしてもやれる大事なことだと思っています。

兼古：お二人のお話の中に大きなヒントがあったと思うんですよ。つまり、大野さんの「環境との関係を作るということが、産業構造の中で変わっていく部分もある」というマクロな視点。岩田さんの言われた「島の中でもいろんな生き方が変わってきている中で、たった一人の漁師さんとか、個々人の生き様とともに受け継がれつつ残っている「耳」をどのように継承していくか」というミクロな視点。

もう一つの問題として、聴く対象や何が大事というのは産業構造や聴く人や暮らしぶりの変化によって変わっていくことがあると思うのだけでも、今の変化というのは先ほどの「残したい日本の音風景 100 選」にも良い面と、問題というか、考えなければならない面の両面があると思う。つまり、与えられる関係とでもいうんでしょうか、これが「残したい日本の音風景 100 選」で選定された音だから聴こうという生き方っていうんですね、僕が授業で扱っているテレビの音もそうで、お正月だから除夜の鐘を叩く、これは大事なものでそれを聞きましょうという形でテレビは提示をする。そういうものに対しては若い人はすごく敏感で「世界遺産になったからやらなくちゃ」みたいな感覚ってあるじゃないですか。そういう関係の受け止め方と、岩田さんの「音たまり」なんかでやっている、自分から関係を作っていくということと、与えられるものの中で選んでいくのではなく、生き方として大きな違いがあるような気がして、その辺のことが音を通してやっていく中で、何か違いがあるのではと思うのですが、嶋さんどうでしょうか。

嶋：「環境教育における音」ということで普段思っていることを言いますと、今生きているわけですから、過去ではなくて、今の世の中の状況に合った、音に対する感覚を養うしかないと思うんです。教育って言ってますけど、音楽に限らず、音に対する個人個人の感受性をいかに鋭く高めていくかということが大切だと思うんです。それは味覚と一緒にね。いいもの、いい音、それに対する感受性だと思うんですね。それが高まれば、かそけき音にも耳がいきますし。今は世の中は全てスピーカーで音を大きくして、でかい音ばかりが流行っていますけど、そうじゃない音と

いうのはもちろん自然なもので、そういう音に対していかに聴こうと耳を澄ますか、そういう感受性をいかに作っていくかが一番心要だと思うんです。この音がいいとか悪いとかじゃなくてね。音がある前に、「静けさ」にある感受性が一番大事で、静けさがあってこそ音がある。静けさはどうでもよくっていい音を聴きましょう、とにかく音をききましょうっていうのはちょっと順番が違でしょ、と思うんです。

ヨーロッパの楽器で言いますと、今は大きな音がしますが、昔の楽器はもっとちっちゃな音がしますし、PAなんてありえない。俗にいうエスニック音楽、民族音楽というのも最近では、大きくしなくていいのにしちゃってやる。それだけ人間の耳が鈍感になってきているという証拠だと思うんです。もういいんじゃないかと思うくらい大きいですけど。日本もそうですね。津軽三味線。僕は生で聴きたいと思いますね。津軽の人はね、PAしたいって言うんですよ。「小さな音がきこえません。」と。きこえないから小さな音なんですよね。ちっちゃくても耳を澄ませば絶対聞こえるんです。出演者とすったもんだ議論して、「聞こえなかったら僕が責任とってやめますから、マイクなしでやってください。」くらいなことまで言って、その結果マイクなしでやったら、「マイクなしでよかった！久しぶりに生の音がきこえました。」と出演者がおっしゃいました。

音が小さいから後ろの客席まできこえるように親切心でPAしてしまうことがミュージックのビジネスの世界かもしれませんが、PA無しの方がやっぱりいいですよ。声もそうですけど、生っていうのはすごいことです。生の音、生の静けさ。それに対する感受性。教育の中でそんな音教育をしていかないと、と思います。

土田：あの、もともと生き方という話ですよ。そのテーマに沿って話をしていこうかなと思うんですけれども。サウンドスケープの生き方っていうようなことになってくると、先ほどまでは文化、伝承されるべき音があって、みたいな話を、まあ残したい日本の音風景なんて話もありましたけれども、我々守っていくだけじゃだめで、何か作り出さないと人間らしさというのは失われてしまうんじゃないかなと思っています。文化の伝承から文化を創造するっていうことにつながるようなことをして初めて我々生きていると言えるんじゃないのかなと思う。ただ、先祖から、伝統的になっているからと、そういうふうなことを守っていくだけでは、人間ではないというかねえ、そんな感じを持っていて、それが私なりの答えかなと思っています。

今、私は茶室の研究、それと庭園の研究なんてことをしているんですけれども、茶室っていうのは、最近、中に入ったことがないという人も多いかと思います。それを今も作られたりもしてますね、茶道やられている方も多いので、作ってらっしゃる方もおりますけれども、その中には沢山の「暗黙知」が、知られざるいろんな知恵が、技術が隠されていたはずなんですけれども、それが徐々に失われて、ただ形だけが受け継がれているというような状況が出てきているのかなと思います。それをきちんと見ていくことで、新しい生活への応用、現代的なものへの応用といったこと

が考えられる、それが正しい伝承であり新しい文化の創造につながっていくのではないかなと思います。茶室っていうのは、壺中天（こちゅうてん、壺の中の別天地）なんて言われますけれども、茶室は障子で外界と遮られているだけです。遮音性なんかそんなにありません。でも、それをシメた！ということで、少しだけ高音部分（の音量）が落ちるんですね。はい！これで外界とは隔絶、隔絶っていうか違う空間に入りましたよっていうサインになっているんですね。それでも外の音は聞こえている。その音を聞きながら、その静けさ、その程度の静けさの中で、更に茶道における作法なんて呼ばれたりしますが、夜はしゅんしゅんと湯の沸く音、松籟、釜を切る音をきいたり、茶杓でお湯を掬って注ぎ入れる音を聞いたり、これも温度によって音は変わったりね。細かい差を、小さな差を聞き分けたりしているようなんですけれども、そのへんが形だけになってしまうと面白くないので、それによって環境状態を深く知るとか、それによって心が安らぐとか、そういうことにつながっているってことに気づいて、それを新しい創造につなげていけたらいいのかなと思っていますね。

庭園にしてもやっぱりそうで、昔の大名の贅沢な仕掛けでいろんなものを作っているわけですけど、それを、普段、観光客で兼六園など皆さんも行ったことがあるかもしれませんが、観光客は、うわべだけをさーっと観て、ああこんな風に池があるのか、ああ灯籠があるね、で終わってしまうんですけれども、実は音の仕掛けとしても非常に壮大なものがありまして、滝のどおっという大きな音を聞かせるものもあれば、殆ど音のしないような静かな水辺を眺めるだけっていうような空間もあって、かなりメリハリが効いた音の作り方がされているんですけれども、なかなかそこは気づかない。さらに悪いことには、マイクとメガホンでガイドさんが「ここは第何代大名だれだれが作ったところか」とかね、そういうようなことを解説してしまっています。そういったちょこっとずつ気になるところがあるんですけれども、なかなか私一人の意見では変わっていかないところなんですけれども、絶え間なくその辺は訴え続けていけたらいいかなと思っています。



写真5 兼古勝史氏（左）、土田義郎氏（中）、嶋和彦氏（右）

兼古：環境とか風景が、何かこう即、そこに何を聞くというより、そこから人がおのずと育まれていくとでもいうのでしょうか、環境が人を育てるみたいな感じっていうのが、つまり庭園というものがあって人がおのずとそういうものに接すると、なにかそういう感性が育っていくみたいなところもあるのかと思ったんですけども。

土田：ただ聞いているだけじゃあ、表面的にしかとらえないんで、聞いているだけでは、受け継ぐこととか、新しい価値観に気づくとか、そういうふうなことに気づいていないような気がするというのが正直なところですね。

■ 音は何を育むのか？

兼古：それでは、まさに教育という話も出てきたところで、「音はいったい何を育んでいくのか」というか「音の教育」というところで、皆さん教育にかかわっていると思うんですけども、どんなことを考えて取り組んでいらっしゃるか、あるいは取り組んでいらっしゃるかどうかというところを、ぜひお聞かせ願えたらと思いますけれども。大野さんどうでしょうか。

大野：私が関わったのは、音を主観的に捉えて—私は物理を勉強してきた者ですけども—そういう客観的に音を記述するのではなくて、その環境の音を聞いた人が、その音をきいて俳句を詠む、とか、あるいは、文章を読む、自分がこの音の環境が大好きならば自分で推薦文を書いてみる、とか、たまたま（区内の、職場の近くに）音楽大学があったので、作曲学科の学生さんに「ここの環境を五線譜で書いてください。」っていうふうな形で表現してもらうとか、そういう人を介してどのように環境を記述できるか、音の環境を記述できるか、ということを試みたことはあります。

岩田：「教育」という言葉はあまり使っていないくて、私も子どもも、一对一の大人だと思って向き合っ、いっしょにワークショップするときなんかやるんですけども、子供たちのそのまんまの感性だったり、感覚だったり、発見を引き出すお手伝いができたらと思ってやっています。

「おとたまり」のときも、インタビューしたり録音したりっていう中で、だんだん子どもたちとずーっと付き合っていくと、変わって来る面を私は観察していて、ある男の子は自分で録音機を持って、あの月見池に出かけて自分でアナウンスをし始めるんです。「ピーサー」という鳥（ヒヨドリ）がいるんですけど、「“ピーサー”」っていうのは、ピーピーと鳴くから“ピーサー”といいます。ほら、今聞こえましたね。」とマイクを向けて、私といっしょに録音しようって始めたことが、自分で録るまでになって、そこに自分のガイドも入れてっていう行動が見られたりですとか、またその島の鍾乳石が「まるごと館」の中には置いてあって、それをちょっと鳴らしてみるので、すごくそれはいい音が鳴るって言って「あ、楽器みたいだね。」とか…こう、一人ひとり自分で気づいたことをどんどん、どんどん次の観察へ深めていくことにつなげていく。

これに興味をもったらちゃんと次につなげていくっていうことをしていきたいなと思っています。

それにはやっぱり単発ではなくて継続的なワークショップだったり、教育機関だったり、そういったところとのタイアップが必要にはなるんですけども、そういう大人たちの向き合い方だったり、そういう場をつくるっていうことが、今の日本の教育の現場では必要じゃないかなっていう風に思っています。

嶋：楽器博物館の仕事に限定していえば、最初に申し上げたように、いろんな音（音色と音の大きさ）を紹介する、それがその人にとって好きか嫌いかは別として、知らない世界を提供する。楽器博物館が提供しなければその人が一生知らないであろう、そういう音とか音楽を提供することだと思います。そしてその人が気にいったら自分でいろいろ調べるでしょう。それが博物館としては一つの使命です。いろんな音に関する感受性、許容力を養うことだと思います。

たとえば、みなさん、色は何色あると思いますか？と質問されれば何色だとは言えないですね。クレパスだったら 12 色などの色がありますが、世の中の色は無限大ですね。赤といっても何千種類もありアナログでは無限大です。音もそうで、無限大にあるわけ。その音を自分で選び出したり、それを耳だけではなくて身体全体で感じる事が大切だと思うのです。そういう教育は美に対する意識につながっていくと思う。音だけ、色だけに限定するのは良くないと思う。教師は、音だけでなくいろんなところにつながっていく意識として心得てなければならぬと思います。それから、ただ知識として持っているだけではなく、美術でも感受性を持っていれば感動するでしょうし。ただただ音を聞いて涙が出るほど感動する。メロディを聞いて感動する、そういう心の豊かさというのがある、それにつながっていくのがいいと思う。

最後に、今の日本は音が溢れすぎている。やかましすぎる。ヨーロッパに行かれた人は気付くと思いますが、静かですね。ニューヨークにしても同じ。日本で一番やかましいと日頃思うのは、JRでも私鉄でも、電車の中での車内放送とか駅の放送。どこどこに気をつけてくださいとか、いらない音が多すぎる。それを言わなければ客からクレームが来る。アジアは全般的にそうなのかもしれないですが。ヨーロッパは車内放送は駅に着く直前に言います。1 回だけです。それを聞きのがしたら終わりなんです。社会が静かですね。音楽の都といわれているところでも。静寂に対する尊敬の念がある。昔の日本はそうだった、少なくとも私の子どもの頃は世の中全体が静かだったと思う。いろんな音が聞こえてきたのですが、今はそうじゃなくなってきた。こういう時代にどう音の教育をしていくか、教育というのはおこがましいですが、一人ひとりがどうやって音と向き合っていくか、というのは大切だと思う。音は命にも関わってくると思いますし。

土田：「音は何を育むのか」ということについて、私も嶋館長と同じような意見を持っていて、まず感性を育むというようなことなんだろうと思う。静けさに気づくというの

も大切。騒音制御の技術とは、もともとは静けさを実現する技術だった。静けさに価値があったから、それを求める技術があったわけで。それに気付くことが大切。それを忘れてしまっただけは元も子もない。

子どもたちとワークショップをしていて「ここで聞こえる音を書いてみましょう。」という「何にも聞こえない。」という。そんなはずはないのですが（遠くから車の音が聞こえたり、鳥が鳴いていたりしているので）、子どもにとっては大きくてはっきりした音（先生の話し声など）しか音だと思っていないようです。そうでないものも音だと気づかせてあげる必要がある。子どもとは、色で表すと、原色系の赤とか黄色などに興奮したりしていたのが、徐々に感性が育つにつれて、微妙な色合いにも気付くようになる。そこを後押ししていくように、音についてもしなければならないと思う。色と同じように音もそうしないといけないと思う。

そういう知識の面と感性の部分がありますが、小さい頃は感性の面があったのですが、年をとってくるとなおりにされていると思う。大学生でもさびついてきている。一方で音楽的な技能はかなりあるのに。磨いていかなければならないところがある。それが、最終的に（先ほどの展示のところにしていたのですが）科学的なことに結びつく人もいるし、音楽に結びつく人もあるし、環境に結びつくなどいろいろなところに結びつくようになってくれればいいと思う。本人が子どもの時そういうふう感じていて、大きくなってすっかり忘れたとしても、年をとって心の中の潜在意識の中に残るようなものが少しでもできればいいと思う。

兼古：ありがとうございます。「音と教育」、「何を育むのか」ということに対して、いろいろな話が出てきましたが、感受性、生き方、音に気づくということと、音に対するいろいろな問題や意識の問題がでてきました。ここで、会場の人たちに質問や意見をお伺いしたいと思うのですがいかがでしょうか。



写真 6 質疑応答の様子

■サウンドスケープ研究は何を目指すのか？

質問者：東工大の清水と申します。建築音響の分野でコンサートホール設計や、病院や図書館など屋内の音環境について研究をやっている者です。実は私の研究テーマの中にサウンドスケープという言葉が非常に多く出るようになってきたんです。それは病院のサウンドスケープであったり、図書館のサウンドスケープ。皆さんがおっしゃっているサウンドスケープという、どうもこう聴いていますと、ちょっと違うなど。私の研究テーマそのものに振り返ってみると、サウンドスケープというのはいろんな音が組み合わさっている中で複合的に出る音環境みたいなもの。コンサートホールというのは、楽器が出ている非常に限られた音ですが、公共の、あるいは屋外ですね、そういう場所に行ってみると、どんな音が出てくるかわからない。複数の音が同時に出てくるような複合的な音環境の中で、出てくる環境をどうやって記述したらいいのかということをもみんな悩んでいる、という感じがします。

それで、今お話を聞いて非常に面白かったのですが、それ自体をどうやって記述するかということのテクニカルな問題と、それをどのように教育していくか。なかなか科学的に音の環境そのものを記述することはできない。周波数を分析するとか時間的な変化を分析するということは簡単にできます。どんな音がどの場所でもどのような環境で、人がどのように知覚しているか、というのを科学的に記述することができないので人が記述せざるをえない。私自身も空間の中の音環境を記述するスケッチ言語というものを学会の中ではずっとやっているのですが、人を通して観察するしかないの、そういうものをやろうとしたときに、それぞれの人達がそういう音に対してどうやって知覚するかを訓練していかなきゃいけない、あるいはどのようにそれをしなきゃいけないというのが教育の場では非常にあるんですね。

ちょっと話がずれますが、サウンドスケープっていう皆さんが目指しているものが、一体どういうものなのか。サウンドスケープっていうのは、社会的な問題であったりアクティビティであったり、いろいろな要素を含んでできあがってきた概念だと思うのですが、サウンドスケープという言葉が認知されているいろんな場所で使われ始めているので、そろそろ定義をするなりですね、目指しているものをどこにするとかですね、そういうことをお考えいただくようなこともしていただくと非常にありがたい。

私はテクニカルな部分から音環境を捉えながら、すごく今、面白いなと思っているもう 1 つの話というのは、暗騒音の研究ですね。要するに部屋の中で常時流れている、あるいは外で流れている音の質というものがどのようにとらえられるだろうかということを考えているのですが、実は測定結果を見ますと、東京では室内はほとんど静かになりすぎている。静けさの価値というものが逆に言うと、どちらかというと、マイナスになっていると私はちょっと思っています。静かにすることだけがいいことじゃない、というような価値感を持っています。

兼古：どうもありがとうございます。サウンドスケープと

いうものが——すごく大きな問いだと思いますけど——その定義というか、いったい何を狙っているのか。静けさというのが必ずしもプラスの意味じゃないような状況もある、というお話だったと思いますけど、この辺のことに關してどなたかご発言どうでしょうか。かつて練馬区で「静けさ 10 選」プロジェクトなどを行われた大野さん、どうですか。

大野：今のお話を聞いて、先生が客観的に記述したいっていうふうにお考えになってるんだとすれば、それは多分サウンドスケープの概念とあんまりオーバーラップしないかな。

よく言われるのは、自然科学の観察の態度だと、自分は神様の地位にいて、観察対象と無限に離れて記述する。誰が対象を記述しても同じように記述される、っていうのが自然科学を成り立たせている前提ですよね。ですけれども、おそらくサウンドスケープ的な研究っていうのは、研究者によって対象がたとえ同じであっても記述され方は違う。それを容認するっていうのは、調査者の態度が調査結果に反映するっていうことを恐れないっていうことなんだろうと思うんですよね。

あえて言えば、観察対象の中に自分自身もいる。自己言及的な態度でもって観察をする、記述をすることを容認しているんじゃないか、っていうふうには思っています。観察対象の側から見れば、観察対象っていうのは一義的ではなくて多義的な存在だ。観察する者によって多様な記述が許されるっていうことを容認しちゃった方がいいんじゃないかなっていうふうには私は思っています。答えになったでしょうか。

兼古：すごく本質的な議論だと思いますね。

土田：サウンドスケープとサウンドスケープ研究は、またちょっと違ってくるのかな、と思うんですよね。サウンドスケープは本当、大野さんのおっしゃる通り、人それぞれの個人の中で見えてくるもの、聞こえてくるものが違う。風景もそうですね。風景画って一人一人描いた絵は違いますよね。とらえる場所も違うし、色使いも違ってくる。それと同じで、サウンドスケープも全員違うサウンドスケープをもっているし、どこに着目するかも全然違うし、図書館のサウンドスケープ、病院のサウンドスケープ、私だったら庭園のサウンドスケープ、茶室のサウンドスケープ、室内外を問わず、いろいろなところにサウンドスケープはあるなと思って見ているわけですね。

それはよくわかって、それをどういうふうにして継承していくか、そういうことを考えた場合、それを何らかの手段で外に出してやらないことには、それを議論できないんじゃないかってことになってくると思うんですよね。それがただ、何らかの共通的な 1 つの方法だけでできるかというところ、それは難しいのかなっていう気はしています。それを統計的に扱ったりすると、なるべく客観的には近づけられるということにはなりますけれども、何人かで同じやり方に沿って音源の印象を記録していくとか、そんな方法しか思い浮かばないんですけども。その辺は今後、各研究者が

いろいろ工夫していくべきところなのかなと感じます。

兼古：今の議論はとても本質的で、多分これやると、2 時間くらいいけそうなので（笑）、この後の懇親会とかで続けられたらと思います。ヒントとしては、音が多義的だったというところは、すごくあるのかなと思います。

他に今までの議論を含めて、是非感想やご意見ご質問をと思うんですけど。どうでしょうか、どなたか。

質問者：学生です。部活でマンドリン部に所属していてクラシックギターをやっているんですけども、それを通じて音楽の楽しさに気づいたというか、音楽ってすごいなと思って。そこから更に自分は昔から鉄道が好きだったので、駅で流れる発車メロディというのが東京の方ではありますけれども、それについて調べようと思って、その一環としてここに参加させていただいています。

その駅の中でのサウンドスケープを考えたときに、基本的に注意喚起が必要だからドアが閉まるときの発車ベルは必要だとか、またその一方で、あまりにも東京の駅はうるさすぎると、他の外国の都会はこんなにうるさくはないという意見もあって、日本の鉄道駅はうるさすぎるんじゃないかというような意見もあるという状況で、サウンドスケープ全体で見たときに、正解というか万人に共通して、ああ今快適だなというふうに感じる音風景をつくっていくことってというのは可能なのか。それとも、音っていうのは芸術だし、感じ方には個人差があるわけだから、大体 100 人いたら 80 人ぐらいがまあいいんじゃないって感じるぐらいを目指せばいいのか。サウンドスケープ自体がどこを目指していけばいいのかということについて、それぞれ考えを聞かせていただければと思います。

土田：駅のサイン音については、最初、何年位前かな？20 数年くらい前かな？新宿と渋谷で、今までの「リリリリ」とか「ブー」とかのブザーやベルの類から初めてメロディが取り入れられたんですね。その後、学会や一般社会でも議論が沸き起こりまして、賛否両論あったわけです。音楽家の方からは「何で駅に音楽なんだ。」と。文脈が繋がってないからというのものもあるし、音楽としても「終わってるんだか、終わってないんだか、途中でブチッとか切られたりして、すごく気持ち悪い。」いろいろな意見がありました。

その一方で、従来のベルだと駅のホームにせいぜい 3 カ所位付けて、ものすごい大きな音で鳴ってたんですね。それが分散型のスピーカーとなって、適正なゾーニングをされることによってレベル的にはかなり下がったという面があったんです。そういうことがあって、それが何となくやっぱり受け入れられたんでしょうね、広がっているというのは。社会全体としては受け入れられている方向にあるんだと思いますけれども。でも、やっぱりうるさいですよね（笑）。何か邪魔くさいという感じもありますよね。

理想が何処なのかというのは、なかなか…自分にとっての理想と、万人にとって都合のいい状況というのはそれぞれ違うんで、何とも答えられないというのが正直なところだと思いますけれども。「こうあるべきだ。」というよう

なことをおっしゃる方もあって、そういう方の、何かしらカリスマ性のある方のひと言によって、バンと変わる可能性があると思うんですよ。何か妙な状況ですね。

兼古：先程ヨーロッパの駅と日本の駅の話がありましたが、嶋さん、今のことに関してお考えがあればお願いします。

嶋：申し訳ないけど、それはもう、多数決で決まるしかないでしょう。個人の好き嫌いは別として。僕個人は、もっと静かでいいと思います。本当にもっと静かな方がいいなと思うけど、別にあれの方がいいんじゃないと言う人が多くて、社会運動が起こらなければ、そのままでしょうね。

音そのものとは別にね、駅のブザーみたいなものは、危険を防止するという意味もあるじゃないですか。もしもブザーがなくて列車が発車して人が引っかかって事故でも起こったら、誰が責任を取るんだということになりますよね。ヨーロッパだと、たぶん個人だと思いますよ。でも日本の場合は、なかなかそうはいかないというのが、いろんなことからわかりますよね。だから、そういうことの防止策も含めて、やっぱり危険を知らせる、「危ないからどいてくれよー。」というのを知らせるとするのは、今の日本では必須なんだろうと僕は感じます。だけど、そうじゃなくて、もっと静かな方がいいよ、とみんなが思えば、日本人全員がね、静かになっていくんでしょね、きっと。そのぐらいしかわからないです。理論で言っても結論が出ないことなんですよ、きっとね。

兼古：では、「まちを静かにする運動」の研究をされている会場の上野さん、駅の音環境に関して何かご意見ございますか？

上野：「まちを静かにする運動」は、昭和の戦後の大阪で起こった運動なんですけれども、あまりにも警笛の音が喧しく、交通の車が増える、それから信号機の問題もあまり普及していない、いろんなことが重なって、まちがどうしようもなくうるさくなってきたというのが背景にありました。それで、どのようにして警笛を少なくするのかということが問題になった。それに対して行われたのが、さっき兼古さんがおっしゃった、「まちを静かにする」という運動です。それで、どの程度の音量にするかというので問題になったのが、警笛を鳴らさないで交差点を通った時に人を傷つけてしまった場合に、一体誰が責任を持つんだという、危険を防止するための警笛がどの程度いるのかということでした。官民一緒になって普及運動をして、注意喚起をして、メディア、つまりあちこちでそういう立て看板をして、全員が同時に、そういう風潮・運動を作り上げていくことによって、警笛の音量を下げるということに成功しました。

だから、非常に大きな社会の問題を扱う一方、家族の間でテレビの音量をどの位にするかというのを決めるとか— ちょっと昔の家庭の家族ですけれども— そういう非常に小さなモデルなり、やや大きなモデルなり、いろいろな状況を考えて、研究を進めていかれるというのも一つの方向ではないかなと思いました。ちなみに、大阪市の図書館とか

公文書館とかのアーカイブに行けば資料などがたくさんあります。歴史研究されるというのも良い方法だと思います。

兼古：有り難うございます。大野さん、いかがでしょう？

大野：いろいろな試みがあつたらと思います。サウンドスケープ協会がこうでなくちゃいかんとか、音響学会がこういうふう基準を決めようという話の前に、作曲家の方々、あるいは音楽教育をなさる方々が、「この駅の音の環境はおかしい。市民の耳を損なう。」というような発言を積極的にされていく。駅の中だけではなくて、バスの中の音とかデパートの中とか、いろいろあるかと思いますけれども。

「私にサイン音を創らせろ。」吉村弘さんは、東京の地下鉄のサイン音を駅毎に工夫して提案しています。それは、作曲家として自分の存在を賭けた提案をせざるを得ない。いい曲を創ってヒットさせようというのとは訳が違うかもしれないけれど、音楽に生きる人たちが、今マーケットが飽和しているはずですから、そういうところにも自分の能力を生かす。決して一方的に自分のメッセージをそこで流せるわけではなくて、いろいろな妥協をしなくてはならない。いろいろな制約の中で音の環境をデザインしていくチャンスがあるはずですよ。ですから、音楽を志す人が、ぜひそういう試みをしてほしいと思います。

一番最初の渋谷駅のサイン音のデザインをなさったのは、浜松に本社にある Y 社の I さんという大変若い女性の方でした。とても意欲的だったと思います。東京に行ったらこの渋谷駅のサイン音と、高田馬場の駅で「鉄腕アトム」が朝から終電までずっと鳴り続けている音環境をぜひ観察してほしいと思います。駅員にとってみたら、とても地獄のような世界だろうとは思いますが、音楽家を志している方が、あの高田馬場をずっと放置しているというのを、ちょっと考えなくてはならないと思います。音楽家を志している人が、自分がやる、自分が提案するという方向で動いてくれると私は嬉しいです。

岩田：そうですね、音楽を創られている方にいろいろ提案してもらいたいというのは、本当にいいなと、私も聞いていて思いました。あとは、聞いている人側の提案もあるといいですね。

先ほど聞く耳の話があつたのですが、私も去年は名古屋から東京に住み始め、渋谷では、すごく音量がアップし、音の多さにもビックリして、最初はそれに耳が疲れていたんです。だんだん慣れていく自分がいて…たぶん皆さんも最初は何か「ん？」と思ったことが、だんだん耳って慣れていく経験があると思います。そういう変化とか、自分が求める静けさに向き合ってもらい、意識してもらい、そのようなアプローチというの、もう一方では必要なかなと。それは駅だけでなく、いろいろな公共施設のサウンドスケープを皆さんが意識しはじめた時に、必要な音環境を求める声になって表れてくると思います。

■サウンド・エデュケーション：今後の展望

兼古：ということで、ぜひ皆さん、それぞれ何か提案を逆にしていただけたらよろしいかと思います。さて、時間もほぼ終わりになってきましたので、最後に、各話題提供者の方から、ひと言ずつ、音、環境教育ということに関して、今までの議論も踏まえて、1分ぐらいずつお願い出来たらと思います。

土田：私、最近、ワークショップで風鈴づくり、やってますね。新しいタイプの風鈴を、従来型の釣り鐘型だとかウインドベル型みたいなものじゃない、新しい風鈴を作って、それを地域の名物にしたいなあなんて思って、金沢風鈴だとかいうようなものを作ったりして活動しています。これをワークショップでみんなで作ったら、やっぱり楽しいですね。商店街と今タイアップしてやっているんですけども、商店街の中に音風景を作るということに活用できたらなあなんてことを考えてやってます。

あとは、これは学生が作った去年1年の成果「金沢の河川・用水散策マップ」ですけれども、このような形で、いろいろ調査したものを、みんなに知ってもらうような冊子を作って、ある程度、もうちょっときちんとしたものを作って、市とかに、こういったものを作って配布したらどうですかと提案していけたらいいかなと思って、やってます。

嶋：非常に難しいんですけど、最後にひと言といえませんが、音に対する敏感な気持ちを育てることが大切だと言ってきましたけども、一方で、同時に、音に対する寛容性みたいなものも欲しいですね。どんな音も拒否しないで受け入れられるみたいな。一番悲しいのは、今、まち中で音楽すると喧しいという苦情が当局に入ったり、あるいはピアノを練習してる音が、他人には喧しいと思われるとかね、それが非常に残念だなという気がするんです。僕が子どもの頃、近所のお家にピアノがあってですね、可愛い女の子がですね、憧れの、ピアノを弾いているわけですよ。ピアノが聞こえてくるとね、「ああ、いいな〜」って思うわけ。それが今は許されない世界ですよ、騒音公害だなんてね。最初はへたっぴなピアノだけれど、「あ、ちょっとお隣の子、上手くなってきたなあ。」みたいに、ご近所さんの様子が音を通じてわかるような、そういう社会の方がいいなあって気が僕はします。だから、音に対する敏感な心とともに寛容な心もぜひ欲しい。

岩田：音を聴くということをやりながら、音だけではなくて、その先には五感を使うことを目指しているということがサウンドスケープの考え方にも書いてありますが、私もそれを意識しています。

最近は何い作家さんと一緒にコラボして、牡鹿半島の地域が震災から3年経ってどう歩んできたか、現地の人たちがどんなふうに食堂を開いたり、手仕事でアクセサリーを作るお母さんたちのことを、音と匂いと、鯨だったり鹿だったり牡鹿半島の食を通じて伝える「五感レストラン」というワークショップをちょうど昨日やってきました。音がきっかけであったり、方法であったり、音から始まる地

域づくりだったり、伝え方であったり、残し方ということ、私もこれからもやっていきたいと思っていますし、皆さんもそれぞれ、いろんなテーマ、地域に関わっていらっしゃると思うので、連携してやっていけたらいいなと、この場がそういう場になって繋がっていったらいいなと思いました。有り難うございました。

大野：私は行政に身を置いて、公害規制に長いこと携わっていました。市民からよく言われるのは、「私のまちの環境はこんなに悪い。」ということ、しばしば言われたんです。で、口には出さなかったけど心の中では思っていたのは、「皆さんに相応しい環境がすでに提供されてますよ。皆さんの民度に丁度相応しい環境が、皆さんのまちの環境です。」（笑）という風に言いたかったし、時々こっそり言ってた。でも、それはがっかりしないでほしい。皆さんの民度が変われば皆さんの環境も変わるということの裏返しでもあるんですよね。そう思って環境を見てください。役所にあんまり文句を言わないように。

兼古：有り難うございます。短い時間の中でいろんな話題があったと思うんですけど、司会も不慣れで十分に深められなかったことをお詫びいたします。しかしながら、すごく本質的な議論もできたのではないかと思います。今までの話の中で、音が多義的であるということ。実はいろんな話の中で、音がきっかけであることを岩田さんも言われたけれど、音じゃなくて、音を通り越して人間だとか、地域だとか、環境だとか、文化だとか、そういうものを見ていく時に、一つのところから見ていくとサウンドスケープというのは、たぶんちょっと違うのかなと。工学的な見方や、文化的な見方や、歴史的な見方や、いろんなものがあって、音というのは一つのきっかけなんだけど、その中で何か統合されていくような、そういう中にサウンドスケープの面白味があるのかな、と。

実は昨日、環境学の大御所の鬼頭秀一先生という東大の先生の最終講義があったんですけども、その中で「ひとり学際」ということを言われたということ、鳥越先生からお話を伺ったんです。まさにサウンドスケープも、いろんなスペシャリストが力を合わせて取り組んでいくことでもあると同時に、まさに一人の人間の中で学際的、学際というのは決して学問としての学際だけではなくて、仕事や生活や、あるいはいろんなレベルでの物の見方というのが、自分の中で柔軟に多様に一つになっていくような、そういうふうにして接していく、そんな見方を促していく、そういうきっかけになっていくものなのかもしれないなと思ったりしました。

今日は、音と環境あるいは教育ということで、いろんな話のきっかけになるお話を話題提供者の方々から、そして会場の皆さんから也得到了したいと思います。拙い司会で、なかなかまとまりませんでしたけれども、どうぞこの後の懇親会でさらに広めていただけたら、深めていただけたらと思います。どうも今日は有り難うございました。話題提供者の皆さんにもう一度拍手をお願いいたします（拍手）。

登壇者プロフィール

嶋 和彦（しま かずひこ）

1955 年大阪生まれ。京都大学教育学部卒業。1970 年よりリコーダーと民族音楽を大阪音楽大学教授西岡信雄氏に師事。公立中学校の英語科教員を務める傍らリコーダーアンサンブルで数々の賞を取る。ロンドン、アントワープ他でも公演。民族音楽の分野では、世界の笛を中心としたアンサンブル・エスノウインズ・メンバーとして活躍。日本初の銅鐸の音楽作品の初演にも参加。90～93 年インドネシア・ジャカルタ日本人学校勤務中にロンボク島とカリマンタン島の音楽文化調査に参加。94 年より浜松市楽器博物館設立準備にかかわり 95 年開館と同時に学芸員、2004 年より同館長を務める。



大野嘉章（おおの よしあき）

「環境は予めあるのではない。関係を紡ぐことによって環境になるのだ。」前職で、鐘の音マップづくり、しずけさコンテスト、サウンドマップづくりなど音の環境教育事業を企画実施した。音環境を物理現象としてだけではなく、聞き手によって意味づけられた環境としてとらえた。聞くという行為が受動的とは限らない。聞き手の感性にふさわしい音環境が形成されるのだから。一連の事業は公害行政から環境行政への転機と重なった。楽器の町浜松では、楽器の作り手、その演奏者、そして聞き手の関係も考えておきたい。2007 年まで東京都練馬区環境保全課職員、2011 年まで佐鳴湖畔のギャラリー喫茶「湖風（うみかぜ）」店主。

岩田茉莉江（いわた まりえ）

奈良県出身。2003 年、沖縄の南大東島で音に魅かれ、子ども達と島の音をひろい、南大東島島まるごと館に島民と共に音の展示物「南大東島音たまり」を制作。「海鳴り」を軸に島のサウンドスケープ研究を続け、2007 年大阪市立大学大学院文学研究科アジア都市文化学専攻前期博士課程修了。奈良・岐阜・鎌倉等で、子どもから大人まで様々な年齢層を対象に音を聴き、感覚をひらくワークショップを重ねる。2014 年度は、愛知県津島神社、鶴舞公園、鎌倉等で「音さんぽ」を開催予定。<http://www.ototamari.net/>



土田義郎（つちだ よしお）

大学にて建築を学ぶが、環境と人間に対する関心から、大学院では音環境の心理に関する研究をはじめ。音の持つ意味への興味からサウンドスケープ思想に出会う。博士（工学）学位論文は「記号的機能を有する音に関する研究」。金沢に拠点を移してからは、環境保全やまちづくりの活動の中でサウンド・エデュケーションを試みるようになる。複雑な系としての人間と社会をとらえる事を目指している。現在は金沢工業大学環境・建築学部教授。日本サウンドスケープ協会の他、日本建築学会、日本音響学会、日本騒音制御工学会、日本デザイン学会、各会員。

兼古勝史（かねこ かつし）

札幌市生まれ。元酒場のピアノ弾き（夜）・高校音楽教師（昼）。サウンドスケープ研究機構研究員として練馬区音の環境教育事業、静岡県音楽公園計画のための調査などに関わる。その後、BS ラジオ放送局“St.GIGA”ディレクター、CS テレビ放送“旅チャンネル”番組プロデューサー、BS ラジオ放送局 WINJ 放送事業部長等を経て、現在、武蔵大学メディア社会学科、立教大学メディア社会学科、目白大学メディア表現学科 兼任講師の他、小中高等学校などで「音のメディアリテラシー」教育を实践。



【論文】

サウンド・エデュケーションのねらいに関する実践的研究

現代的課題に応じた新たな可能性を探る

A Practical Study about Aims of Sound Education:

Exploring New Possibilities for Modern Issues

●神林 哲平

Teppei KAMBAYASHI

早稲田実業学校初等部

Waseda Jitsugyo Primary School

キーワード：現象学的聴取、自己肯定感、感性、他者理解、生きる力

keywords: phenomenological listening, self-esteem, sensibility, understanding of others, zest for living

要旨

2011 年度より実施されている新学習指導要領では、「生きる力」の育成が主な目的となっている。そのような現代的課題が要請される時代の中で、サウンド・エデュケーションにはどのような役割が求められるだろうか。本研究では、活動のねらいに着目し、サウンド・エデュケーションの新たな可能性を探ることを目的とする。

実践事例を通して、既存のサウンド・エデュケーションの主なねらいである感性の育成や、新たなねらいとして自己肯定感の育成、及び他者理解の深化について論じた。サウンド・エデュケーションにおいて事物・自己・他者に関わる活動を行うことで、現代的課題を乗り越えるための生きる力の育成に寄与することができるだろう。

Summary

The main aim of the government's 2011 teaching guidelines is to raise the "zest for living". What is the role of sound education in modern social issues? This study aims to examine new possibilities of sound education by focusing on aims of these activities.

Results clarify raising the sensibility in the precedent sound education. They also indicate that of self-esteem and understanding of others as new aims of sound education. Sound education contributes to enhancing the zest for living to solve the issues by practicing these activities about things, self and others.

1 研究の背景と目的

小学校においては、2011 年度より新学習指導要領が実施されている。改訂の趣旨としては、これからの知識基盤社会化やグローバル化が国際競争を加速させる一方で、異なる文化との共存や国際協力の必要性を増大させているという現代的課題の中、知・徳・体の調和の取れた「生きる力」を育むことが重要となっている点が挙げられる¹⁾。基幹教科の時数増加や高学年における外国語活動の必修化がなさ

れたために総合的な学習の時間は削減されたが、生きる力を育むという点では前学習指導要領と同じ方向性であると考えられる。一方で、学校現場では基礎学力の定着のために多くを費やし、時間的にあまり余裕がないといった声も耳にする。知識偏重型の学力育成に陥ることなく、徳性や感性の育成といった総合的な視座で教育活動を展開することが、生きる力を育むためには必要である。このような背景の中で、サウンドスケープ思想には、どのような役割が求められるだろうか。

上記のような現代的課題への 1 つの提案として、日本サウンドスケープ協会では 2001 年の協会誌において、「音・音楽・生きる力 - 感性を育むこととサウンドスケープの可能性をめぐる」という特集を組んでいる。その中で山岸は次のように言及している²⁾。

現代は、効用性や合理性が重視され、経済的価値が尊重され、機械技術の進歩によって自然の人間化が進み、人間の感性が次第に弱体化し、想像力の衰退が不安な出来事として感じられる時代である。家庭においても、コミュニケーションの希薄化が進み、学校や職場等におけるいじめや学級崩壊、不登校、引きこもり、といった問題や、多岐にわたる環境問題は、深刻な状態で私たちに、人間関係の再考や自然と人間の関係の再考を迫っている。現代社会および現代という時代においては、人々が活気を失い、時代の活力が衰退してきているとの指摘もある。

私たちは、こうした時代において、いかに生活に潤いをもたらし、人々の生きる力や、生き生きと世界を感じる力を高めていくことができるのか。

そして、多様な研究と実践を掲載することで、サウンドスケープの方法によって開かれる可能性を模索している。本研究は、この問題意識を踏襲しながら、特にサウンドスケープ思想の教育的側面であるサウンド・エデュケーションについて、新たな可能性を探ろうとする試みである。

サウンド・エデュケーションは、「身近な環境に耳を傾けるための〈聴く技術〉の回復と育成のために開発された

【受付受理日】2013 年 12 月 06 日

【査読開始日】2014 年 10 月

【採用決定日】2015 年 02 月 22 日

教育活動の総称、サウンドスケープ思想に基づいた独自のプログラムの総称³⁾とされている。身近な環境を対象として豊かな感性を養うことで、聴く技術の回復と育成に結び付けることが主な「ねらい(=目的)」であるといえよう。サウンド・エデュケーションの開発者であるシェーファー自身は「世界の調律」において、サウンドスケープ・デザインに対する教育を行うための最良の方法としてサウンド・エデュケーションを位置付け、この感性を養うための課程を学校に設けることを提案している⁴⁾。

その他にも、サウンド・エデュケーションに関するねらいや意義に言及した実践や研究は国内外でいくつか見られる。国内では力石、土田がサウンド・エデュケーションのねらいを整理し、「感性を鍛える」、「見落としていた環境に気付く」、「生活や行動が変わる」の3点にまとめている⁵⁾。また、神林はそれらのねらいと小学校における環境教育のねらい「環境に対する豊かな感受性の育成」、「環境に関する見方や考え方の育成」、「環境に働きかける実践力の育成」に関連性を見出し、環境教育におけるサウンド・エデュケーションの意義を論じた⁶⁾。西田は、「世界の調律」にサウンド・エデュケーションの目指すものを求め、沈黙という言葉に着目した。そして、「沈黙をきっかけに、物事をありのままに見ること」⁷⁾によって、普段気付かなかったことに気付くという点に、この活動の意義を求めている。坪能は、創造的音楽学習とサウンド・エデュケーションの関連性を考察し、その発展と変容について言及している⁸⁾。

一方、国外ではギャロッドが坪能と類似した観点から、「探究と創造」の分野にサウンド・エデュケーションの有効性を見出している⁹⁾。Campbellは、音環境への気付きが音楽の本質的な理解を深めるとして、「聴くこと教育(=a pedagogy of listening)」を行っている¹⁰⁾。McGinleyは、「ストックホルム・サウンドスケープ・プロジェクト」の実践を行い、その活動が社会的音響事象の気付きを高めるだけでなく、地域のサウンドスケープとの創造的な相互作用を育成することに言及している¹¹⁾。このようにねらいや意義を概観すると、今までのサウンド・エデュケーションの実践においては、「感性」、「感受性」、「気付き」、「創造」といった言葉がキーワードとなっていたことがわかる。

ここで、これらのキーワードの関連について考えてみたい。まず「感性」について、桑子は科学的な視点を踏まえた上で哲学的に考察し、次のように述べている¹²⁾。

ふつつ感性とは、「外界から印象を受け入れる能力。感覚に伴う感情や欲望、衝動などを含む」と考えられている。外界からキャッチする情報を「感性情報」といったりする。それは、「快」刺激と説明されることもある。

しかし、「豊かな感性」や「するどい感性」という表現には、創造性という意味も含まれている。単なる受動的な能力ではなく、むしろ何らかの能動性をもっているようにも考えられる。

本書で、わたしは、感性をこれまでの理解とは別の角度から捉えようと試みた。一言でいえば、感性とは、「環境の変動を感知し、それに対応し、また自己のあり方を創造してゆく、価値にかかわる能力」である。

このことから、「感性」と「創造」との関連が見出せよう。前述のキーワードの「創造」は音楽教育にとどまらず、自己のあり方のように広範に捉えることができる。

次に、「感受性」について「気付き」と関連付けたい。中田は、現象学的記述を手掛かりに、日常生活を支えているのにも関わらず、通常は気付くことなく見過ごされている当たり前のこと、すなわち自明性について、感受性の観点から捉えている¹³⁾。このことから、感受性と「普段気付かなかったことに気付く」こととの関連性がうかがえる。また、「感性」と「感受性」については類義語として捉えられるが、感受性はともすれば受動的な印象を与えることもあるため、前述の桑子のように能動的に働きかける場合も考慮して本研究では「感性」に重きをおきたい。このようにキーワードの関連を捉えることで、それぞれが「感性」と結び付いていることが考察された。従って、サウンド・エデュケーションの今までの実践においては様々な変奏があるにせよ、感性の育成を大きなねらいとして設定していたということができよう。本研究においては、以上の議論を踏まえ、感性を「日常では当たり前になっていて気付かないこと(=自明性)」について、感じたり考えたり価値付けたりすることのできる創造的な能力」と定義する。

筆者もまた、感性の育成を主なねらいとしてサウンド・エデュケーションの実践を行ってきた。そして、実践を重ねる中で、それ以前に思い描いていた自身の教育観と照らし合わせて、サウンド・エデュケーションに新たなねらいが設定できるのではないかという思いに至った。ここで、筆者がサウンド・エデュケーションを知る前までと、知った後の関心について経緯を示したい。

筆者は、大学にて学際的な領域である人間科学を学んだ。在学中には野外で鳥の調査をしたり、音楽活動を始めたりと当時から音については高い関心をもっていたと感じる。2004年に公立小学校教員となった後、2006年からは私立小学校教員として勤めることになる。現在でも音には関心があり、「いつでも創造的でありたい」という信条から、指導する学級の歌をつくることもある。

教員については、漫画などでよく描かれる朝礼での校長の長い話、教員が結婚式のスピーチをすると長くなるから頼まない方がよいといった話に見られるように「話が長い」というイメージをもっていた。また、教員になる前に関わっていた子どもから「先生は話を聴いてくれない」と耳にしたことがあった。そのような経緯から、話すよりも聴くことを大切にしたい教員になろうと決意したのである。そして、教育実習中に指導教諭から「教育とは児童理解だ」という言葉を聴いたことも影響が大きい。そこから、子どもの話を聴くことで児童理解に努めようと考えたのである。

実際に現場で教育活動を展開するようになってから、教員が子どもの話を共感的もしくは受容的に聴くことは自己肯定感を育むのに役立つと感じるようになった。「話を聴いてもらえた」→「自分の存在を受け入れてもらえた」というように自分自身を肯定的に捉える姿が見られたのである。また、聴き手である筆者にとっては、児童理解に大変役に立った。これは幅を広げれば他者理解の深化ということになる。このように、教員が聴くことを重視すること

によって、子どもの自己肯定感を育て、他者理解の深化にもつながることへの感触を抱き始めていた。筆者が日々の所感を自由に書き留めているメモには、次のような記述がある（2006年1月18日のメモより）。

「話を聞くことの大切さ」（＝自分の軸の一つ）から、教育について語れるようになりたい。具体的に。実践的に。

ここからは、当時は聴くことを大切にしたいという願望をもちながらも、まだうまく整理できていない様子がうかがえる。

そうした中、教員になり4年目の2007年に私学研修でサウンド・エデュケーションの存在を知るとともに、サウンドスケープ思想の学際性にひかれ、関心を深めていく。そして、子どもの声を聴くだけでなく、環境音を聴くことも重視するようになったのである。当初は環境教育的な視点から、感性を育てることを主なねらいとして、総合的な学習の時間の中で授業を展開していた。また、聴覚だけでなく全身感覚へと発展させたカリキュラムを実施したこともある。実践を通して、子どもの不思議さに驚嘆する心（＝センス・オブ・ワンダー）から学ぶということを何度も経験した。

サウンド・エデュケーションは実在的な環境音だけでなく、想像した音や夢の中の音など非実在的な音事象も対象にしているという点に魅力を感じている。前述のサウンド・エデュケーションの定義に敷衍するならば、「身近な環境」の概念が広がったともいえよう。それ以前は、環境というと自然環境や社会環境などといった物理的環境の印象が強かったが、自分自身や他者についても広義の「環境」と捉えることができると考えるようになったのである。

このような経緯から、感性を育てるサウンド・エデュケーションに、自己肯定感の育成や他者理解の深化もねらい

として考慮に入れながら、2011年度末からは、総合的な学習の時間だけでなく、生活、道徳の時間を用いて実践を行うようになってきている。

以上を踏まえ、本研究ではサウンド・エデュケーションのねらいに焦点を当てることで、その新たな可能性について探っていくことを目的とする。視座としては、「①サウンド・エデュケーションの大きなねらいである感性の育成とは、具体的にどのような子どもの姿から見取れるのか」、「②感性の育成に加えて、サウンド・エデュケーションで自己肯定感の育成と他者理解の深化をねらいとして設定する根拠はどこに求められるのか」の2点を挙げておく。なお、本研究は、筆者が行った実践を中心に論考を進める実践的研究であることも付け加えておきたい。

2 方法

本研究の枠組みは、学際的なサウンドスケープ研究において共通理解を図るためのメタ理論である「構造構成的サウンドスケープ論」¹⁴⁾に基づいて展開する（図1）。

構造構成的サウンドスケープ論は、構造構成主義を超メタ理論とし、その中核原理である「関心相関性（＝存在・意味・価値は主体の身体・欲望・関心と相関的に規定される）」¹⁵⁾により、各概念の選択が可能である（関心相関的選択）。構造構成主義においては、現象学的概念に関心相関性を組み込んでいる。現象学における志向性と関連させて、原理の中の原理「志向相関性」として位置付けてから、とりわけ研究の営みという文脈から「関心相関性」と呼んでいるのである。

本研究では、まずサウンドスケープ研究の中核原理となりうる「現象学的聴取（＝立ち現れた聴取という経験の全てを対象とする）」¹⁶⁾を出発点として、サウンドスケープに関する現象を記述するための構造を構成していくことと

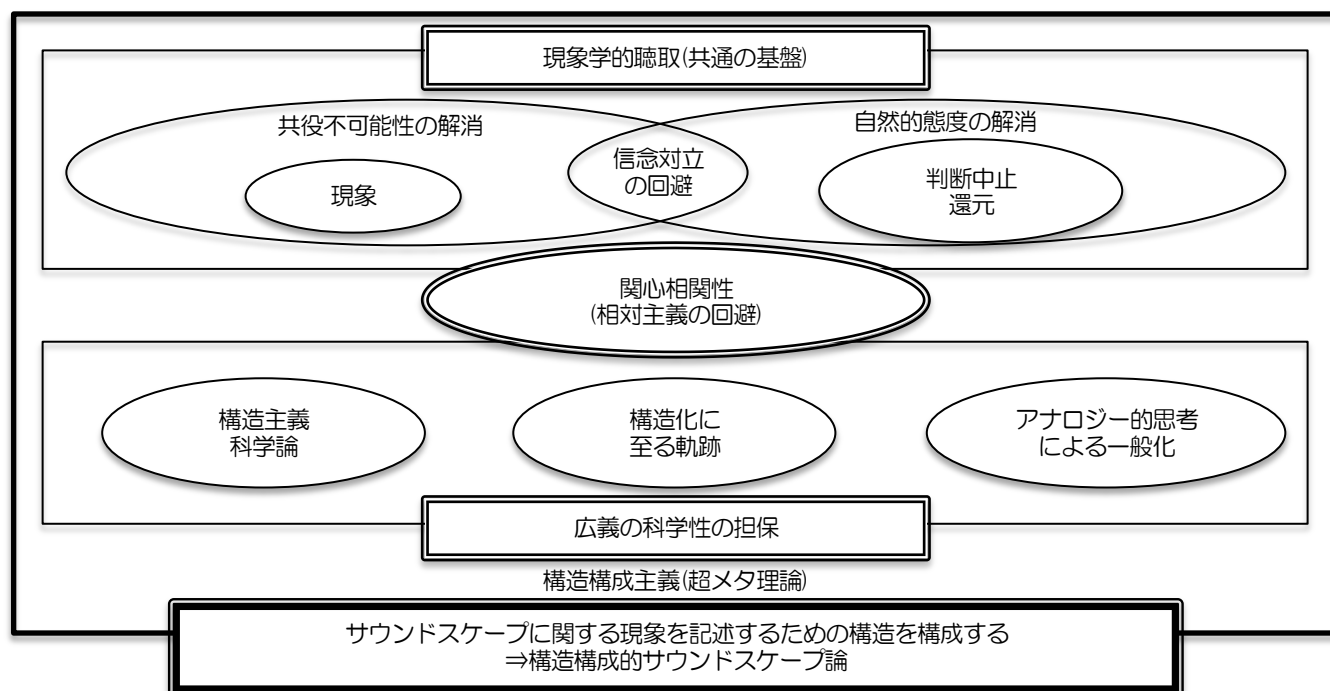


図1. 構造構成的サウンドスケープ論

する。現象学的聴取は、楽音や環境音といった実在的な音事象も、想像した音や夢の中の音といった非実在的な音事象も、立ち現れた経験（現象）という意味では疑うことができないとする概念装置で、包括的に音事象を扱える枠組みである。ある現象に対して確信が成立する構造や条件について、意識作用と意識内容の相関関係や志向性を中心に分析することが可能な原理でもある。

なお、現象学～実存主義の系譜にはフッサール、ハイデガー、サルトル、メルローポンティなどが挙げられるが、それぞれの思想には個人間で相異が見られる。また、時期によって個人内でも思想が変容している。従って「現象学的」といっても、誰のどの時期の現象学に依拠するかによって見解が異なってしまう危惧がある。こうした危惧を避けるために、どの現象学に依拠するかを明確にしておく必要があるだろう。構成構造主義で援用されている現象学は、「ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学（危機書）」の記述を中心としたフッサール現象学と、竹田青嗣現象学を基盤としている。その理由としては、構成構造主義の「信念対立の克服」という目的を達成するために妥当な方法であると判断されていることが挙げられる。多様な学範が存在するサウンドスケープ研究において、この目的と方法については相応の価値があると判断し、構成構造的サウンドスケープ論でもこの観点に立脚しているのである。

次に、広義の科学性を担保するために、「構造化に至る軌跡（＝条件開示を基礎に据える）」¹⁷⁾を援用する。つまり、最終的に構成された構造がどのような経緯であるのか、実践の概要や質的分析などを開示することで広義の科学性について判断できるようにするという概念である。このようにして、異分野の実践者や研究者にも円滑な共通理解ができるようにしたい。

これらの枠組みを踏まえた上で、具体的な実践事例に基づいて、ねらいについての考察を進める。従って、本研究は仮説検証型の量的研究ではなく、仮説生成型の質的研究に位置付けられよう。

3 具体的な実践事例

ここでは、まず実践の概要を記述した上で、感性の育成に加えて自己肯定感の育成、他者理解の深化のそれぞれについて、授業実践における子どもの具体的な姿や記述を通して考えていきたい。

3.1 実践の概要

実践事例については、筆者が 2011 年度より行っているワークシートを用いたサウンド・エデュケーションを対象とする。活動の概要については、表 1 に示す通りである。

内容については基本的にシェーファーの「サウンド・エデュケーション（新版）」¹⁸⁾を参考にしている。ワークシートは「子どもが理解しやすい手順の記載」、「表や絵も可能な自由記述欄」、「子どもの気付きや変容を見取るための感想欄」、「活動へのフィードバック」といった内容で、短時間で活動が可能であるとともに、どの指導者にも実践がしやすいように構成している（図 2）。授業はもちろん、朝学習や帰りの会などに活用することもできる。感想欄を設けているのは、近年の言語活動の充実も視野に入れているためと、活動するだけで終わってしまういわゆる活動主義に陥ることのないように留意しているためである。そして、活動をした後にはそれぞれの考えを共有する時間を設けている。本研究では、そこまでを含めて検討に当たりたい。

実践の経緯としては、2011 度は 5 年生で朝学習や総合的な学習の時間に、2012 年度は 2 年生で生活科の時間に実践してきた。他学年や他学級の教員に協力してもらうこともあった。2013 年度は 4 年生を対象に、道徳の時間に実施した。活動内容によってねらいの重点が異なるが、基本的にはどの活動にも 3 つのねらいを設定することは可能であると思われる。表 1 に挙げられた活動の中から、主に感性の育成に関しては「音さがし」、「階段の音」、主に自己肯

表 1. 活動の概要

活動名	活動内容
音さがし	1 分間静かにして、身近な音をさがす。
好きな音さがし	2 分間で好きな音をさがし、その理由を考える。
苦手な音さがし	2 分間で苦手な音理由を考える。
音追いかけゲーム	音を出しながら動き回る複数の人を、指で追いかける。
階段の音	階段を色々なペースで上り下りして、音の違いを考える。
静かな場所	学校内で一番静かな場所をさがし、その理由を考える。
音づくりゲーム	グループで身のまわりの物を 1 つ選び、交代で色々な音をつくる。
音日記	「朝起きて最初に聴いた音」など、1 日の音の様子を日記に書く。
絵にぴったりの音	色々な形に合う音を想像する。（レベル 1～10）
夢で聴いた音	夢で聴いた音やその様子、感じたことを書く。
音交換ゲーム	2 人で音を出しながら歩き、すれちがった時に音を交換する。
一番〇〇な音	今までで一番〇〇だった音を思い出し、様子や感じたことを書く。
扉の音	扉の形や音の出し方を意識して、扉の音を書く。
自分だけが聴いた音	周りの人は聴こえないのに自分だけが聴いた音を思い出して書く。
ちくはくな音	「小さくて軽いものがつくる、深く重い音」などを考えて書く。
音だけ昔話	「桃太郎」や「かちかち山」などの昔話について、音だけで表現する。
音の違い	男女による音の違いについて考える。
自然のコンサート	声や音だけで、自然の場所について表現する。
見えない音	音源を見たことはないが、音だけが聴こえるものについて書く。
身体の中の音	自分の身体の中から聴こえる音を書く。

サウンドエデュケーション ワークシート

年 組 番 名前 () 月 日 ()

音 交かんゲーム

やり方

①二人組になって、教しつのはじとはじに行きましょう。
②先生の合図がしたら、あい手がいる方へむかって、おたがいちがう音を立てながら歩きましょう。
③二人がすれちがったときに、音を交かんしましょう。
④おわったら、みんなで気づいたことを話し合ってみましょう。

交かんした音・気づいたこと

子どもが理解しやすい
手順の記載

表や絵も可能な
自由記述欄

一言かんそう

子どもの気づきや変容を
見取るための感想欄

今日のサウンドエデュケーションは… (番ごうに○をつけてください)

5 とても楽しかった
4 まあまあ楽しかった
3 ふつう
2 あまり楽しなかった
1 楽しなかった

活動への
フィードバック

図2. ワークシートの構成

定感の育成と他者理解の深化に関しては「音交換ゲーム」、
「絵にぴったりの音」をそれぞれ取り上げ、論考を進める。

3.2 「音さがし」

「サウンド・エデュケーション (新版)」の最初の課題は、「目をつぶって聞こえた音をリストに書き出す」という活動である¹⁹⁾。筆者も同様に、一番はじめにこの活動を行っている。主なねらいは「人や場所によって、聴こえ方や感じ方が違うということに気付く」と設定した。聴こえ方や感じ方の多様性という日常生活ではあまり焦点化されないことに驚いたり、不思議に思ったりすることで、感性が育つと考えたためである。子どもの感想から、感性の素地に結び付くと考えられる内容を中心に挙げてみる。

- ①さいしょどんな音がするかなと思ったら、とってもいい音が聞こえました。みんな同じ音を聞いても、聞こえ方がちがうなんて、びっくりしました。(2年女子)
- ②私が聞いた音は、近くにいる人全員が同じ音を聞いていたと思っていたけれど、そうでないと知ってびっくりした。(2年女子)
- ③初めて音さがしをやってみて、1人1人きこえた音がちがったのでびっくりしました。1分間で色々な音がきけて、たのしかったです。(5年女子)
- ④みんなぼくとかんじ方がちがうからとてもたのしかったです。また来週サウンド・エデュケーションをやるのでそれがまちきれません。(2年男子)

- ⑤いつも当たり前だと思っていた音をよくきいてみると、いつもより少しちがうようにきこえてきたのでたのしかったです。(4年男子)
- ⑥いつもしゃべったりしていたので時には静かにするのも心が落ちつくので良いなと思いました。(5年男子)
- ⑦みんなが聞こえている音がちがったり、同じだったりして楽しかった。友達としゃべっている時は、何も聞こえないのが不思議だった。(4年男子)

①、②、③の感想では、「他者も同じ音を聴いているはずだ」という今までの先入観による思い込みが、実は違ったということに驚嘆している様子がよくうかがえる。厳密に言えば、物理的には同じ音事象でも個々人の感じ方が異なるということになるだろうが、導入としてはこれでよいと考えている。④では、2年生ながら感じ方が違うというところに気付きが見られる記述である。⑤、⑥では、日常生活とは異なる経験をすることで、そこに価値付けをしている。これもまた、「当たり前」が揺さぶられる経験なのだろう。⑦は、集中的聴取と周縁的聴取に迫る記述である。こうした経験を不思議と感ずる心情を大切にすることで感性を育てていくことができるだろう。

聴こえ方や感じ方が異なるということは、現象学的には「触発」との関係で捉えられる。触発とは、感覚素材の意味内容が自我の関心を引き起こそうと働きかけることである²⁰⁾。子どもの関心や動機は1人1人でも異なるだろうし、個人内でもその都度異なると考えられる。従って、その時の関心や動機によって聴こえ方や感じ方も異なるというわけである。とりわけ音さがしの活動中は、日常とは異なる関心や動機があり、触発もまた日常とは異なるのだろう。この観点は、ユクスキュル環境世界やギブソンのアフォーダンスの概念とも親和性が高いと考えられる。また、庄野が指摘したサウンドスケープ思想と明確な連関が見られる構造主義や記号論といった認識論²¹⁾から捉えるのも興味深い。関心や動機の背景には、その文化固有のコードがあるだろうし、そのフィルターを通して世界を記号化して捉えるという視点があるためである。

この音さがしを発展させ、好きな音、苦手な音について調べる学習をすることで、よりねらいに迫ることができると思う。

3.3 「階段の音」

学校生活において毎日使われる階段を対象に、色々なペースで上り下りすることで音の様子を調べる活動である。主なねらいは、「自明性を破る」ことである。すなわち当たり前になっていることに目を向け、新たなことに気付くというところに重点を置いている。当たり前が当たり前でなくなるとき、感性が揺さぶられると考え、このねらいを設定した。

- ①今までやったサウンド・エデュケーションで1番音が見つからなさそうで、一番多く見つけられて、楽しかったです。意外性があると思いました。(5年女子)
- ②全部いっしょだと思っていた階段を上る音はちょっとずつちがう音だったのがおどろきました。(4年女子)

- ③ふだんはゆっくり歩いていてもはやく歩いていてもそんなかわらないと思っていたけれど集中して聞いてみたらぜんぜんちがった。(5年男子)
- ④教室とかいだんでは、ぜんぜん音がちがいました。一どきいたらもう同じ音がきけない。(2年男子)
- ⑤ふつうに歩いているだけでもかいだんはすごいひびいてとてもうるさかったくらいです。今度からしずかにかいだんをおります。(4年男子)
- ⑥たいこでえんそうしているみたいでうるさくて楽しかった。(2年女子)
- ⑦ゾウみたいだったのでみんながわらっていました。(2年男子)
- ⑧足音だけで、人の感情が分かって、おもしろかったです。次からは、いろいろな音をきいて、人の感情をさぐってみたいです。(5年女子)

①に象徴されるように、日常的な感覚の予想が外れ、意外性が生じるときにこそ感性は磨かれると思われる。②、③、④も、日常生活で当たり前と思っていたことが実は違ったということによる驚きである。現象学的に言えば、「現在」の時間意識は過去把持、原印象、未来予持で構成されているが、普段は階段を上り下りする中で、その経験が過去に沈殿されてゆく。その過去把持があるからこそ、ことさら意識しなくても予測(未来予持)が成り立ち、階段を上り下りできるわけである。階段の音に関しても、日常の経験では上り下りの同じような音が過去把持され、それが未来予持されるわけである。しかし、よく注意して聴いてみると、1 段目の階段の音の過去把持をもとに未来予持している次の 2 段目の階段の音が同じではないことに気付く。だからこそ意外性が生じるというわけである。「全部いっしょだと思っていた」音が、実は違うことに気付くというような経験を積み重ねることで、細やかな差異を感じ取る力が育つだろう。とりわけ④は、音の一回性に着目しており、このような感性は十分に価値付けたいところである。それは、「聴取の本質が、時間の流れとともに生まれては消えていく音に向けられた、深い意識にある」²²⁾ことを裏付ける内容であるためである。⑤は、その後の行動の変容につながる感想である。⑥、⑦は、低学年らしく、音を比喩的に表現している。こうした伸びやかな言語感覚は、創造性につながる感性として大切にしたい。⑧では、上り下りの速度や音で、当人の感情(例えば急いでいるのか、心が落ち着いているのか)がわかるという内容である。人とのつながりを考えるという観点からすると、他者理解に結び付く感想になろう。

3.4 「音交換ゲーム」

この活動では、まず 2 人 1 組で 5~10m 程度離れた場所に立ち、次に、授業者の合図でお互いに向かって音を出して歩きはじめる。そして、2 人がすれ違ったときに、お互いの出している音を交換してまた離れていく、という内容である。自他の個性がよくわかり、教室に笑顔があふれる活動といえる。盛り上げるポイントは、例えばひょうきんな男子と真面目な女子というように、差異がわかりやすい組み合わせをつくることである。そうすることで、ペア以

外で音を聴いている子どもたちにとっても、音の交換前には個性が際立ち、交換後でもその差異を楽しむことができる。

自分の出したい音を好きに出せるという点に自己肯定感の育成、他者と音を交換したり、その様子を聴いたりする点に他者理解の深化、というようにねらいを設定した。子どもの感想から、ねらいに迫る記述を挙げてみる(2011 年度は未実施のため 5 年生の感想は掲載していない)。

- ①いつもより、たくさんえがおが出ました。それは、まじめな人が、おもしろい音を出すと、しぜんとわらってしまいました。(4年女子)
- ②音を出すと、その人の性格が出ておもしろい。キャラ(性格)がちがう人とやると、とても不思議! 相手はかんたんに出していても自分には、出せない音もあった。(4年男子)
- ③こじんのよさがつたわってよかった。おもしろい音やきれいな音と聞けてよかった。しらない音も聞けてよかった。(2年女子)
- ④あい手の音をまねするのが少しはずかしかったです。なぜなら、その人によって合う音と合わない音があるからだと思います。また、次回は、どんな音がどんな人に合うのかしらべたいと思います。(2年女子)
- ⑤すれちがう時の一しゅんが、つまり 2 人の音がいっしょになった時がおもしろい音になったので、「2 つの音がいっしょになった時の音はこんなにおもしろい音になるんだな。」と、はじめて思いました。(2年男子)

①、②とも、個人の差異を感じるにより他者理解を深めていると思われる。③では、自分自身のよさを伝えることが自己肯定感につながるとともに、他者の音もよく聴いていることがわかる。④の子どもは、恥ずかしい感情がありながらも活動自体は楽しんで取り組んでいた。周りの子どもたちから賞賛を得ることで、自分の新たな一面に気付くきっかけにもなろう。⑤のような感想も大切にしたい。授業者は、想定していなかった子どもの反応に対して、「ねらいと違う」という理由で捨象してしまうことがあるが、サウンド・エデュケーションではそうした授業観を見直す機会にもなる。

この活動を対話の能動性と受動性という二重性から捉えてみたい²³⁾。日常生活の対話においては、話し手が能動的、聴き手が受動的と思われがちである。しかし、話し手は聴き手の反応に委ねるという意味では受動的になり、聴き手は話し手の内容をどのように引き受けるかという意味では能動的になる。従って、対話においてはどちらにも能動性、受動性の側面があるのだ。この活動において、個々人は表現するという意味では話し手でありながら、同時に相手の音も聴くという意味では聴き手でもある。音を交換する前の相手に向かっていく段階では、話し手としては能動的に表現しながら受動的に委ね、聴き手としては受動的に聴きつつ、能動的にどのように交換しようか判断しているという複雑な状況であるといえる。音を交換した後に、相手がどのように引き受けてくれるのかは、自身の予測とは異なる場合もあろう。このように他者が「不意打ち的到來」と

して現れるときに、意外性が生じるのである。そして、能動性と受動性という二重性が対話の深さの次元を決める 1 つともなる。このような深さの次元に敏感になることで、対話に対する感性が磨かれると考えられる。そして、対話の深さに目を向けることが他者理解の深化にもつながるだろう。

3.5 「絵にぴったりの音」

ワークシートに描かれた抽象的な図形を見て、「この絵にぴったりの音を理由も含めて考えよう」という活動である。頭の中で想像したり、つぶやいたりする中で自由な発想が生まれていく。なお、オノマトペのような擬音語、擬態語も許容している。自分で自由に音を想像し、それが他者に認められることによって自己肯定感が育まれる。そして、他者の想像した音から、他者理解を深める。このようなねらいを設定している。1 回の活動で 2 つの絵について考え、全部で 5 回行った。なお、それぞれの形をレベル〇とすることでゲーム性を高め、子どもが関心を引くような工夫をした。

- ①前回よりもいいがいかんたんで目をつむってかんがえてみたらいろんなことがそうぞうできておもしろかったです。(2 年男子)
- ②音を想像するのがむずかしくなってきた。見ている形そのままではなく、動かした時の音などを想像した。(5 年女子)
- ③今回はお話を作りました。さいしょは書いていただけだったけどお話ができたのでよかったです。いっぱい音を書くように。(2 年男子)
- ④レベル 7 は少しだけつけたしをすると、そのままの形からそうぞうした音が生まれてきたのでとてもおもしろかったです。むきをかえても色いろな音が生まれたのでレベル 8 はとくにおもしろかったです。(2 年男子)
- ⑤色々なものにはみえるけど、音であらわすのはむずかしいなあと思いました。レベルが高くていろいろなこたえがあるのが「ふしぎだなあ。」と思いました。(2 年女子)
- ⑥みんなによってその形を毎日使っているような言葉になっているところがおもしろかったです。(5 年男子)
- ⑦みんな、色々な点から見ているから、私が思った音と、まったくちがう音を想像している人がいて、とてもおもしろかったし、色々発てんしてくのが楽しかった。(4 年女子)
- ⑧ものをそうぞうする人と書いてあるものをそうぞうする人がいて、おもしろかったです。音を聞いた時？の人は、理由を聞くとよく分かりました。(4 年男子)
- ⑨今日は、いつもより、いろいろな音があって、「独創的」という言葉の深さを、改めて知ることができた。(4 年男子)

①、②、③、④は、多様な想像の仕方が述べられている。目をつぶったり、頭の中で動かしてみたり、話をつくったりと、子どもの発想は柔軟である。学ぶべきところが多いのではないだろうか。⑤では、答えの多様性に不思議さを

感じている。こうしたところに豊かな感性を見取れるだろう。⑥、⑦は、多様な答えを自分なりに分析している。日常生活に結び付けたり、視点によって異なると考えたり、そうした理由付けもまた、多様で興味深い。⑧では、その音についての理由を聴くことで納得が深まるという感想である。例えば、図 3 を雲に見立てて「ふわふわ」といった音を考えた子がいたが、理由をたずねると、雲に見立てた子とわたあめに見立てた子というようにそれぞれ違うのである。また、「外側はふわふわしているけど内側はとがっている」との理由で「ちくちく」と考えた子もいた。この



図 3. 絵にぴったりの音

ような考え方ができるのは、直感だけでなく細部までよく捉えているからである。

子どもの「面白かった」、「不思議」といった感想から、こうした活動が感情とどのように結び付くのか、現象学的に考えてみたい。ここでは、自己触発という概念を使って分析する²⁴⁾。

何かを聴いたり想像したりする時に楽しかったり愉快になったりするの、その聴いたり想像したりするという意識作用そのものが、自分自身へ随伴的な作用を与えるからと考えられる。これを自己触発と捉える。子どもたちが絵を見て音を考えた想像したりすることで自己触発され、面白いか、不思議だとかいった感情に結び付くというわけである。絵にぴったりの音を考えることで自己触発され、肯定的な感情をもつことは、自己肯定感につながると考えられる。

この活動では多様な音が考え出され、お互いの交流でもそれぞれの音を面白がって認め合う様子が見られた。交流を通して他者から認められることによっても、「自分の音は間違っていないんだ」という自己肯定感をもつことに結び付くだろう。また、自分とは違う他者の音を知ることにより、「友達はこんな考えができるんだ」という他者理解につながるのである。こうしたことが、⑨には表れているように思われる。

4 ねらいの新たな可能性

以上の実践事例を踏まえて、ねらいの新たな可能性について論じたい。サウンド・エデュケーションが感性の育成に加えて、なぜ自己肯定感の育成や他者理解の深化につながるのか。それは、「正解は 1 つだけではない」という相対主義的な点に求められる。サウンドスケープ思想では「感じ方に強調点」がおかれているゆえに、その感じ方の正解は 1 つではないのである。シェーファーも、「聞こえた音をすべて紙に書き出す」というサウンド・エデュケーションの中で、「リストはひとりひとり皆違うはず。なぜなら聴くという行為はとても個人的なことだから。長いリストでも短いリストでも、答えは全て正しい」と述べている²⁵⁾。

正解が 1 つになりがちな既存の教科に比べて、サウン

ド・エデュケーションは多様性がある。殊に学校教育では、授業者が明確な意図をもって指導しなければ、時として正解主義に陥ってしまうことがある。正解すれば自己肯定感につながるが、不正解の場合は自己否定になってしまう。間違いから学ぶという点を考慮したとしても、やはり間違ってしまったときには自己否定につながる懸念はあるだろう。また、正解主義においては他者の存在が優劣の比較対象となってしまうことがある。それを乗り越えるのがサウンド・エデュケーションなのである。つまり、自分の感じたことがそのまま正解となるため、それが自信につながるきっかけとなるわけだ。音づくりなどの課題でも、自分の好きな音、出したい音をつくれるため、それも自信につながるだろう。1人1人の感じ方を保証することで、自己否定から自己肯定へと転換できるということである。更に、サウンド・エデュケーションでは感じ方の多様性を優劣ではなく差異と捉え、その差異に価値を見出している。よって、自己にも他者にも肯定的な目を向けることができる活動なのである。

次に、これは主に自己肯定感の育成に関わることであるが、サウンド・エデュケーションの活動と感情の関係性が考えられる。活動に感情が自己触発されることを「絵にびったりの音」の事例で考察した。子どもたちのどのような感情に結び付くのか、活動の価値の決め手となるだろう。本実践では、ワークシートに活動へのフィードバックとして「5 とても楽しかった」から「1 楽しくなかった」まで選択する項目を設けているが、今まで集計した平均は4点台後半である。ほとんどの子どもが5と4を選択しているということになる。これはつまり、サウンド・エデュケーションの活動が、肯定的な感情を自己触発するということを示している。このように肯定的な感情になる活動を繰り返すことが、自己肯定感へもつながるのではないだろうか。

そして、もちろん活動だけで終わっても一定の効果はあると思われるが、他者理解の深化のねらいにより迫るためには、活動の後に全員で考えや感想を共有する時間を設けることが求められよう。それぞれの感じ方を認め合うことも、サウンド・エデュケーションの肝だからである。自分はこう感じる、だけで終わってしまう活動では、他者との関係性は育たない。たとえ拙い言葉であったとしても、自分の感じ方を振り返って語り合うことは、現象学的に捉えれば意識作用（聴く）と意識内容（聴いた音）の相関関係を基盤として、それぞれの関心相関性（価値付け）に結び付く手掛かりとなるのである。そして、多様な意見を聴いて1つ1つを尊重することにより、他者理解も深まっていくと考える。鳥越も、サウンド・エデュケーションについて「『異なる聴き方への気づき』、『多様な聴き方の発見』といった『他者の理解』をも大切にするものだ」²⁶⁾と述べている。「〇〇くんの感じ方は面白い」、「自分と違うこんな考え方もあるのか」というように共感的な姿勢が身に付くことが期待されよう。また、感じ方が違うということは、そこで差異が如実になる。感性を「日常は当たり前になっていて気付かないことへの気付き」とするならば、その差異に気付くことが感性への育成にもつながるのだと考える。相対主義は「何でもありの相対主義」と批判されることがあるが、構造構成的サウンドスケープ論においては

あらゆる音事象を一元化するという点で、出発点として相対主義的な現象学的聴取を戦略的に採っている。出発点としては相対主義的であるものの、そこに関心相関性を導入することで「何でもあり」は回避されるため、その関心に応じて共有できる部分を広げていけばいいというわけである。それが、正解をいわゆる「納得解」へと発展させていくことになるのだろうと思われる。

なお、本実践では言語活動の充実という観点から、ワークシートに書かせることを共有するための方法とした。近年の言語活動の充実については、現場での困惑する声も聞かれる。重要なのは、言語活動そのものが目的になってしまわないこと、すなわち「方法の自己目的化」を回避することである。また、形容詞や副詞の言葉を教室に掲示し、常にその枠組みだけで行うといったような「方法の形骸化」を避ける工夫も求められよう。例えば音楽科における言語活動は「思考力・判断力・表現力を育む視点から、感受をベースにした音楽表現の工夫」や「鑑賞における音楽のよさや美しさなどを理解し、味わって聴き深める」²⁷⁾のが目的であり、言語活動自体は手段であって目的ではない。本実践でいえば、感性と自己肯定感の育成、他者理解の深化が目的である。音を聴いてどのように感じたかを共有するために「なぜそう感じたのか」尋ねることに固執してしまって、答えられない子どもの自己肯定感が損なわれるのだとしたら、別のアプローチが必要なのである。発達段階によって必ずしも明確に言葉で表現できないこともあるだろうし、時には直感的なものを大切にすることも必要だろう。このように、目的に応じた柔軟な姿勢が求められると考える。

以上のような視座から、サウンド・エデュケーションでは感性の育成に加えて自己肯定感の育成、他者理解の深化をねらいとして設定することが可能になるのである。

5 今後の課題と展望

5.1 多様な教科・領域へ

本研究では、サウンド・エデュケーションが感性の育成だけでなく、自己肯定感の育成や他者理解の深化についてもねらいとして成り立つ可能性があることを論じてきた。事物・自己・他者に関わる活動を行うことで、現代的課題を乗り越えるための生きる力の育成にも寄与することができのではないだろうか。ここまでの構造化に至る軌跡を踏まえ、本研究を構造化すると図4のようになるが、これはまだ仮説生成の段階であるため、実際に検証していくことが今後の課題の1つである。

今までの学校教育においては、直接的にサウンド・エデュケーションという用語は顕著には使われないものの、学習指導要領における「音楽づくり」との関連性についての研究²⁸⁾のように、主に音楽教育の文脈で語られていた。しかし、ねらいによってはその枠組みを脱構築できる活動になりうると考えている。環境教育的に扱えば総合的な学習の時間に、「気付き」に特化すれば生活科に、そして音と言葉に着目すれば国語にと、多様な教科・領域で行うことが可能であると思われる。サウンドスケープ思想の学際性

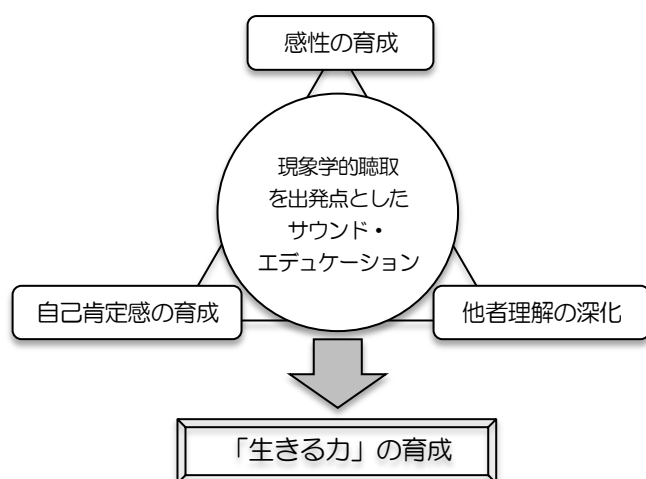


図 4. サウンド・エデュケーションの新たな可能性

を発揮できる潜在能力を秘めた活動であるといえよう。とりわけ筆者が注目しているのは、道徳におけるサウンド・エデュケーションである。道徳の内容項目は「①主として自分自身に関すること」、「②主として他の人とのかかわりに関すること」、「③主として自然や崇高なもののかかわりに関すること」、「④主として集団や社会とのかかわりに関すること」の 4 つから構成されている²⁹⁾。本研究で検討してきたねらいを敷衍させるならば、①で自己肯定感の育成、②、④で他者理解の深化、③で感性の育成を目指すことができるだろう。

5.2 評価について

もう 1 つの課題として、サウンド・エデュケーションが教育活動である限り、評価は避けて通れない論点であると考えている。学校教育における教育評価の変遷は絶対評価から相対評価へ、そして現在では到達度評価が主流である。ここで、よく混同されがちな評価と評定について区別しておく必要がある。評定は評価の中の一手法で、数値によって評価を行う。評定が話題となるのは狭義な評価の捉え方で、本来は数値以外の評価もあるということである。ギャロッドは、このような評定による評価を行動主義的評価と呼び、以下のように述べている³⁰⁾。

想像力と創造力は、抽象的な美学分野に属する。行動主義に根ざした政府のガイドラインによるパラメーターでは評価の仕様が無いのだ。音楽での想像力や創造力は、もともと質的なものである。行動主義的評価が中心の多くの教育制度には馴染まない。

確かに、これはある程度の客観的な基準を必要とし、サウンド・エデュケーションには馴染まないように思われる。では、どのように行うか。ここでは、評価の方法が行動主義的評価だけでなく多様である点に着目したい。例えば、当初設定した目標にとらわれない評価である「ゴールフリー評価」、子どもの具体的な作品や記録を蓄積する「ポートフォリオ評価」などがある。サウンド・エデュケーションのねらいを感性の育成と自己肯定感の育成、他者理解の深化とするならば、それに即した子どもの姿を記述したり、

ワークシートをポートフォリオにしたりすることで、評価することは可能であると考えられる。

5.3 サウンド・エデュケーションの未来

日々の実践における子どもの姿や記述を通して、筆者が予想できないような発想や考えの豊かさに驚き、そこから学ぶことが度々ある。Cumberland も、18 年間に渡り延べ 1000 人以上の学生にサウンド・エデュケーションを行ってきた中で、自身のサウンドスケープ観により影響を与えたと述べている³¹⁾。それだけサウンド・エデュケーションは魅力あふれる教育方法なのだ。

子どもの成長は長い目で見る必要がある。感性や自己肯定感を育て、他者理解を深めるということもまた、一朝一夕では難しいだろう。しかし、サウンド・エデュケーションにはその力があると信じている。子どもの未来とサウンド・エデュケーションの未来を見据えて今後も実践を継続し、新たな知見を積み重ねていきたい。

註

- 1) 文部科学省：『小学校学習指導要領解説 - 総則編』（東洋館出版社、東京、2008）1-7.
- 2) 山岸美穂：＜特集＞感性・想像力・サウンドスケープ - 本特集の趣旨をめぐって、サウンドスケープ、3、1-2、2001.
- 3) 鳥越けい子：サウンドスケープ、日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』（音楽之友社、東京、2004）393-397.
- 4) R. マリー・シェーファー（鳥越けい子 他訳）：『世界の調律』（平凡社、東京、2006）20-21.
- 5) 力石泰文、土田義郎：サウンド・エデュケーションの構築に関する研究 - 既往教育プログラムの分類・整理、サウンドスケープ、2、9-14、2000.
- 6) 神林哲平：環境教育におけるサウンドエデュケーションの意義 - 小学校での授業実践の評価を通して、環境教育、41、17-28、2009.
- 7) 西田治：サウンド・エデュケーションの目指すもの - 「世界の調律」からの解説、音楽教育実践ジャーナル、17、110-119、2011.
- 8) 坪能由紀子：創造的音楽学習からみたサウンド・エデュケーション、音楽教育実践ジャーナル、17、40-47、2011.
- 9) ジョイ・フリード＝ギャロッド（今田匡彦訳）：カナダでのサウンド・エデュケーション - 教室のサウンドスケープは今、音楽教育実践ジャーナル、17、25-31、2011.
- 10) Patricia S. Campbell : Deep listening to the musical world, Music Educators Journal, 92(1), 30-36, 2005.
- 11) Robin McGinley : Stockholm Soundscape Project - New Directions in Music Education, The Journal of Acoustic Ecology, 2(2), 25-29, 2001.
- 12) 桑子敏雄：『感性の哲学』（日本放送出版協会、東京、2001）3.
- 13) 中田基昭：『感受性を育む - 現象学的教育学への誘い』（東京大学出版会、東京、2008）10.
- 14) 神林哲平：構造構成的サウンドスケープ論 - サウンド

スケープ研究における原理的な共通理解に向けて、サウンドスケープ, 12(2), 27-36, 2011.

- 15) 西條剛央：『構造構成主義とは何か - 次世代人間科学の原理』（北大路書房、京都、2005）53.
- 16) 前掲 14) 31.
現象学的聴取については、今後フッサールの「受動的総合の分析」、メルローポンティの「知覚の現象学」、ドン・イーデの「聴くことと声」などとも関連付け、理論的側面を深化させる必要があると考える。しかしながら本論文は「事象そのものへ」という現象学のテーゼも踏まえた実践的研究であるため、現象学的聴取の深化そのものについては別稿に譲りたい。
- 17) 西條剛央：メタ理論を継承するとはどういうことか？ - メタ理論の作り方, 西條剛央, 京極真, 池田清彦編『構造構成主義研究 1 - 現代思想のレボリューション』（北大路書房、京都、2007）18.
- 18) R. マリー・シェーフアー（鳥越けい子 他訳）：『サウンド・エデュケーション』（春秋社、東京、2009）182pp.
- 19) 前掲 18) 11.
- 20) 山口一郎：『現象学ことはじめ - 日常に目覚めること』（日本評論社、東京、2002）334.
- 21) 庄野進：サウンドスケープをめぐる思想, 環境技術, 19(7), 420-424, 1990.
- 22) ヒルデガート・ウェスターカンフ（今田匡彦訳）：解き放たれた耳 - サウンドスケープ・リスニングの 40 年を巡って, 音楽教育実践ジャーナル, 17, 10-19, 2011.
- 23) 前掲 13) 122-126.
- 24) 前掲 13) 221-228.
- 25) 前掲 18) 11.
- 26) 鳥越けい子：『サウンドスケープ - その思想と実践』（鹿島出版会、東京、1997）107.
- 27) 佐藤日呂志 他：＜特集＞今日的な教育課題を音楽科でどう生かすか - ほんね オフ ミーティング, 音楽教育ヴァン, 24, 18-25, 2014.
- 28) 味府美香、駒久美子：雑誌「教育音楽」に見る音楽づくりとサウンド・エデュケーションの広がりと変容 - 1989 年度からの小学版を俯瞰して, 音楽教育実践ジャーナル, 17, 98-109, 2011.
- 29) 文部科学省：『小学校学習指導要領解説 - 道徳編』（東洋館出版社、東京、2008）34-38.
- 30) 前掲 9) 29-30.
- 31) Michael Cumberland : Bringing Soundscapes Into the Everyday Classroom, The Journal of Acoustic Ecology, 2(2), 16-20, 2001.

20周年展「音風景の地平をさぐる」

概要報告

The outline report about 20th anniversary exhibition.

●船場 ひさお

Hisao Nakamura FUNABA

フェリス学院大学

Ferris University

キーワード：サウンドスケープ協会、20周年展、千葉県立中央博物館

keywords：Soundscape Association of Japan, 20th anniversary exhibition, Natural History Museum and Institute, CHIBA

1 はじめに

日本サウンドスケープ協会は、協会設立20周年に当たる2013年秋（2013 10/5-12/1）、千葉県立中央博物館 第2企画展示室を会場に、20周年展「音風景の地平をさぐる」を開催した。

本展の目的は、設立から今日に至る日本サウンドスケープ協会の歩みとその活動内容を紹介すると共に、現代社会において「サウンドスケープ」という考え方がもつ意味を広く発信することである。

サウンドスケープをテーマとした団体としては、国際的にみても最も早い時期に設立された本協会の20年間の歩みを振り返るために、様々な協会活動の事例を整理・展示し、「音風景の地平」を描き出したこの20周年展は、世界でも類をみない試みとなった。

また本展は、千葉県立中央博物館の企画展「音の風景—うつりゆく自然と環境を未来に伝える—」との同時開催、共催事業として行われたものであり、博物館からの情報によれば、企画展開催期間中の来館者数は37,913人とのことである。このうち正確には何名が「20周年展」の会場を訪れたかは不明だが、通常の協会活動に比べるとはるかに多くの方々に「サウンドスケープ」という用語とその考え方を発信したという意味でも、意義深い事業となった。

ここに、その展示の概要と2ヶ月間に渡る会期中のトピックスを紹介する。



2 展示内容

会場3面に主にパネルによる展示を行うと共に、プロジェクションによってサウンドスケープに関する言葉を提示した。また、週末には同じ場所で「サウンドスケープの教室」と題したワークショップ（別途報告参照）も行われ、多くの協会員が講師をつとめて多様なサウンドスケープの世界が紹介された。



2.1 20年の歩みとその関連資料展示

展示室に入ると左側の壁面に、20年間の協会活動の歩みを協会設立に向けての動きから現在に至るまで、そのときの社会状況と共にまとめた年表を展示した。また関連資料の実物を、展示室中央に置いたショーケースで展示した。



2.2 協会の活動からみるサウンドスケープの世界

界

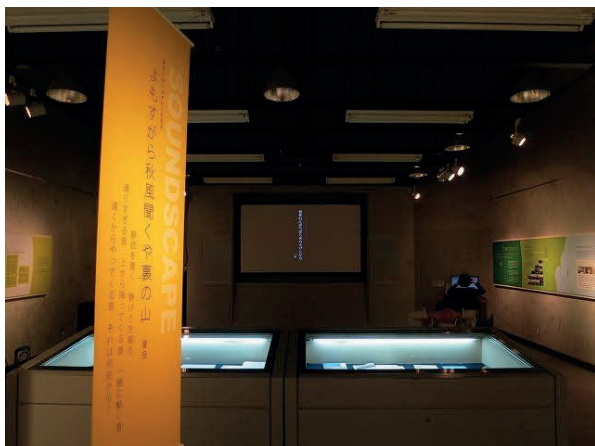
展示室に入って正面にあたる壁面には、多様なサウンドスケープの世界をパネル展示した。シンポジウムや例会等、協会のこれまでの活動事例を踏まえながら、サウンドスケープの考え方と社会との関わりを「音から地域を読み解く」「鐘を測り知る」「庭の佇まいを聴く」「自然に耳を澄ます」「聞こえない音を伝える」「故郷の豊かさを共有する」「音のデザインで空間を創る」「メディアが変える音世界」「音楽からサウンドアートへ」「録音とアーカイブ」「騒音から環境保全へ」、以上 11 のトピックスに分けてわかりやすく解説した。



2.3 身近な音風景への気づきを促すプロジェクト

ション

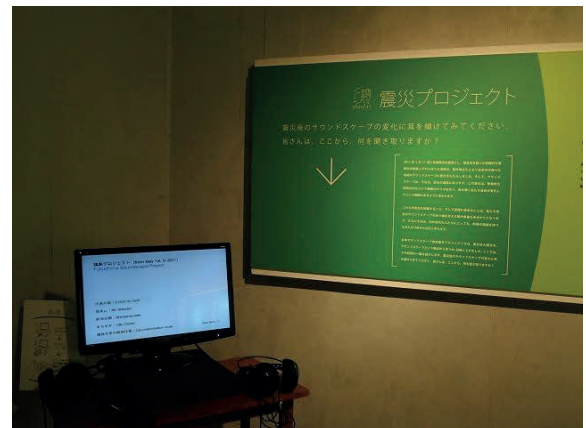
会場の一番奥に設置したスクリーンには、身近な音風景を意識し、その世界に想いをめぐらすためのヒントとなる言葉を適度な間（ま）をおいて、順々に投影した。週末にはこの場所でサウンドスケープの教室が開かれていて、会場内はにぎわっていたが、平日の会場は静かにサウンドスケープについて考えをめぐらすのに適した空間となっていた。



2.4 震災プロジェクト

東日本大震災以降、協会内に立ち上げた「震災プロジェクト」の活動から、「定点観測」「(被災した)音風景 100 選訪問」「福島サウンドスケープ」の 3 つのプロジェクトをパネルと DVD を使って紹介した。

DVD の視聴コーナーでは、実際に被災地で収録した音と撮影した写真を来場者自身が操作して体験できるものとした。地震と津波、原子力発電所の事故災害による人々の暮らしの変化が、音の変化として現れる様子がわかりやすかったものと思われる。



3 20 周年展を通して感じたこと

ここで、20 周年展の実行委員長を務めた私が、今回の記念展の準備から様々な対応までを体験する中で感じたことを、素直に記しておきたいと思う。

2013 年春の総会后、状況がほとんどつかめていないままに、私は本 20 周年展実行委員会の委員長を仰せつかった。数年前から鳥越さん、大庭さん、塩川さんなどが中心になり、少しずつ企画が練られてきていたが、実際に実行委員会が立ちあがったのが大変遅かったことから、具体的な準備に入ったのは記念展開催の 2 ヶ月少し前となる 7 月の末であった。このため、かなりバタバタと多くの協会の皆様から情報提供をいただきながら、展示物の内容検討、会場デザインやパネル製作を進める形となった。この短期間でこれだけの内容と見応えのある記念展をつくりあげることができたのは、強力なスタッフの無償の奉仕によるところが大きい、さらにそのスタッフを支える協会員、元協会員の皆様と協会自身が 20 年間歩んで来た道のりという存在こそが、大きな力となったものと思う。これは日本サウンドスケープ協会の底力と言えるかもしれない。

一方で、今回は当協会の組織としての脆弱さも顕著に現れる形となったように思う。これだけの記念展を行うにあたり、年度当初に詳細な事業計画がなされておらず、必要な予算措置も講じられていなかった。これは 20 年間会員から会費を集めて運営されてきた協会としては、あまりにもお粗末な状況であったと言わざるを得ない。

また、20 年を振り返ることが多く、サウンドスケープの未来を考える余裕がなかったように思う。もちろん、この記念展を見た皆様が、それぞれにサウンドスケープの未

来、日本サウンドスケープ協会の今後を考え、思い描いてくれれば良いことであるが、もう少しヒントとなるようなことも展示に含められれば良かったかもしれない。

反省は尽きないが、やはり書いておかなければならない残念なことは、震災プロジェクトの「福島サウンドスケープ」のパネル展示をめぐる問題に端を発し、プロジェクトを担当していた永幡さんが、協会を去ってしまったことである。サウンドスケープを通して様々な側面から多くのことを考え行動しようとする中で、それぞれの想いを大切に、またその時々々の立場や役割も考えると、うまくいかないことも出て来てしまうのかもしれない。

とはいえ、実行委員長として悔やまれる出来事であったことは間違いなく、その非力をお詫びしたい。

◇ 20 周年記念展実行委員会

委員長：船場ひさお

副委員長：兼古勝史・小林田鶴子

アートディレクター：鷺野宏

委員：川崎義博 鳥越けい子

事務局：佐藤宏

◇ 準備委員会

塩川博義 池村弘之 佐藤宏 鳥越けい子

◇ 協力

塩川博義 池村弘之 横内陽子 中間和之 吉津晶子

岩宮眞一郎 永幡幸司 土田義郎 小西潤子

公益社団法人 日本騒音制御工学会

鷺野宏デザイン事務所

報告「サウンドスケープの教室」

Report: “Classroom of Soundscape”

●鈴木 秀樹

Hideki SUZUKI

慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ研究センター

Research Institute for Digital Media and Content, KEIO University

キーワード：サウンドスケープの教室

keywords: classroom of soundscape

1 「サウンドスケープの教室」概要

「サウンドスケープの教室」は、2013 年 10 月 5 日（土）～12 月 1 日（日）まで千葉県立中央博物館で開催された日本サウンドスケープ協会 20 周年記念展「音風景の地平をさぐる」の関連イベントとして企画されたものである。記念展開催期間中、シンポジウム等の日をのぞいた毎土日の午前（11:30～12:00）、午後（13:30～14:00）に、記念展会場の一角を使って行うこととし、24 人、1 団体による全 30 回が計画された。（詳細は一覧を参照。）

その狙いは協会ホームページに掲載された案内文に端的に見て取れる。

世界は様々な音で溢れています。同じように、音の世界への入り方も様々です。音楽や音響、騒音といった直接「音」に関わる分野から入ることももちろんありますし、教育の中で音をどう取り扱うか、生きものの生態を音から見ていくとどうなるか、庭園の中で音はどう響いているか、といった切り口から入っていくこともできます。「サウンドスケープの教室」では、こうした多種多様な「音の世界への入り方」をトークや実演を通して紹介します。

こうした狙いを持って実施された「サウンドスケープの教室」が実際、どのようなものであったのかについて報告する。

2 サウンドスケープの広がりや深まり

「サウンドスケープの教室」は 20 周年記念展が行われていた第 2 展示室奥のスペースを使って行われた。通常の研究発表会等に比べれば会場は小さく、展示会場のため薄暗く、プロジェクターとスピーカー以外は設備らしい設備もない状態で、果たしてどうなることかと思っていたが、結果的にはこの会場が良い方向に作用した。

発表者と参加者の間の距離が物理的に近く、マイク等を使わない肉声による発表だったことで、自然と参加者の「聴く」意識が高まっていたように感じられた。これによって発表者と参加者が心理的にも近くなったのであろう。「教室」終了後に両者の間で建設的なコミュニケーションが発生することが少なくなかった。会期中頃になると、何度も「サウンドスケープの教室」に参加するリピーターも

現れ、「教室」は総じて親密で熱心な雰囲気の中、進められた。

だが、こうした雰囲気を獲得できた最大の理由は、もちろん「教室」の内容が素晴らしかったからである。

サウンドスケープ研究の最前線に立つ研究者からの報告は参加者の知的好奇心を大きく刺激するものであったし、放送や映画、音楽といったビジネスに携わる方からの話には同席していた協会の人間にも勉強になるものであった。また、サウンド・エデュケーションの実践者が参加者を巻き込んだダイナミックな教室を展開した時もあったし、アートの視点からサウンドスケープを照射した内容の発表もあった。その他、こうしたジャンル分けが意味を成さないほど多様な切り口からサウンドスケープに迫る教室が展開されたことは、一覧を見ていただくだけでも明らかである。

発表者を募る時点で抱いていた「こんな条件の悪い企画に賛同して協力してくださる方をどれほど確保できるのか」という不安は杞憂に終わり、むしろ、結果として極めて多岐にわたる魅力的な「教室」が展開されたことは、日本におけるサウンドスケープの広がりや深まりを明らかにするものであったと言えるだろう。

3 反省

実行委員会としての反省事項は多岐にわたるが、ここでは今後の協会行事にも活かそうな 3 点についてのみ、触れておきたい。

3.1 スケジュール

実行委員会が動き出したのが遅かったことがあらゆることに影響した。

実行委員長が決まったのが 7 月初め。それから記念展実行委員会の協力を仰いで発表者を募り、何とか「サウンドスケープの教室」を実施する目処が立ったのが 7 月終わり。実行委員会のメンバーが決まったのは 9 月末で、最初の「教室」が 10 月 5 日。

実行委員長の力不足は重々承知しているが、これでは十分な準備が出来るわけがない。1 年前から、いや、せめて半年前から準備をすることができたらどれほど違った結果が得られたかと思うと残念でならない。

これは「サウンドスケープの教室」に限った話ではないだろう。企画立案から企画実施までの時間が短いと、関係

者間のコミュニケーション不足を招きやすいし、企画自体のクオリティを下げることに繋がる。サウンドスケープ協会全体の課題として指摘しておきたい。

3.2 広報

20周年記念展もそうかもしれないが、「サウンドスケープの教室」も効果的な広報戦略を打ち出すことができなかったことは否めない。

千葉県立中央博物館は都心からは距離があり、WEB、メール、SNS等で「お金のかからない広報」をしてもなかなか響かない。サウンドスケープ協会の会員であっても、そう何度も通えるところでもない。もっと千葉県に密着した形で広報すべきであったのではないかと考えざるをえない。

結果、「サウンドスケープの教室」のうち何回かは非常に集客で苦戦した。わざわざ時間を割いてくださった講師の皆さんには誠に申し訳なく思っている。

また、数は少ないながらもリピーターまで確保できたことから明らかなように、「サウンドスケープの教室」のような企画は新規会員獲得の絶好の機会であった。その機会を活かしきれなかったことについても責任を痛感している。

3.3 記録・アンケート

全ての回を通して記録として残っているのは博物館に報告した各回の簡単な報告書のコピーのみである。多くの回についてはビデオ、写真の撮影を行ったが、全ての回というわけではない。

こうなってしまったことの理由は、記録要員が確保できなかったことにある。ただし、もし記録要員を確保できていたとしても果たして記録をきちんと取れたかどうかはわからない。

スライド資料と原稿をいただければ記録として成立する回もあったが、音や映像を駆使された発表、実演を交えたパフォーマンス系の発表はどう記録すれば良いのか。家庭用のビデオで撮っても、それで「記録した」と言えるのか。中途半端な記録を取っても、実行委員の仕事を増やすだけで後から使われることはないのではないか。

始まる前に議論する時間も少なく、結果、見切り発車的に前述のような記録を取っていったのだが、研究発表会ではないこうしたイベントをどのように記録しておけば協会の財産になるアーカイブと出来るか、検討する必要があるように思う。

アンケートも同様で、開催することで手一杯だった中で参加者にアンケートを取ることを考える余裕はなかった。だが、公正な評価のためにアンケートが必須であったことは否めない。惜しい機会を逸したのは偏に実行委員の責任である。

4 「教室」のこれから

本報告をもって「サウンドスケープの教室」実行委員会

は解散するが、色々と反省点はあるものの、「教室」自体はとても魅力的なものであったことから、今後へ向けての展望を述べて本稿を閉じたい。

4.1 サウンドスケープの教室 vol.2

サウンドスケープ協会の会員数は約200名であるが、これは「音」に対する人々の関心の度合いから考えれば非常に少ない数字なのではないかと「サウンドスケープの教室」の実施を通して考えさせられた。

「サウンドスケープなんて知らない」「音の世界って何のこと？」と考えていたような人が、「サウンドスケープの教室」を通じて、音の世界に目覚めていく場面が期間中、幾度もあった。ここまで連続的な企画でなくても良いので、こうした一般に開かれた「教室」を各地で開催できれば、日本のサウンドスケープはより大きな広がりを見せるだろう。第二、第三の「サウンドスケープの教室」が開催されることを期待したい。

4.2 サウンドスケープの教科書？

先に述べたように「サウンドスケープの教室」については全ての回を通じて詳細な記録を取ったわけではないので、公式記録集とも呼ぶべきものは残念ながら作成できそうにない。だが、「サウンドスケープの教室」実施を通して繋がりを得た発表者各位と協力して、何らかのまとまったものが作れるのではないかとすることを夢想する。

例えば、電子書籍はどうだろうか。紙の書籍ではテキストや写真は載せられても音声や映像は載せられない。だが、電子書籍ならそうしたものを取り込んだインタラクティブなものを実現できる。言わば「サウンドスケープの教室」から「サウンドスケープの教科書」が生み出されることになるかもしれない。

いざ実現しようとなれば、マンパワーは？ 予算は？ と多くの問題が立ち上がることは間違いないが、今度こそ時間をかけてそうした問題を乗り越えていけば、サウンドスケープ協会は、一歩新たな領域に踏み出せるのではないだろうか。

「サウンドスケープの教室」実行委員会
実行委員長 鈴木 秀樹
実行委員 兼古 勝史
小菅由加里
佐藤 宏
土田 義郎
鳥越けい子

編集後記

『サウンドスケープ』15巻2号をお届けします。特集「サウンドスケープのこころ」は、サウンド・エデュケーション WG 代表の土田さんが述べておられるように、同じテーマで例会が2度異なる年度と都市で開催された関係から、内容が一部重なる部分もありますが、それぞれに違った味があります。またポスター発表の内容が多岐にわたっていて、いかにもこの協会らしい、と感じさせてくれます。フォーラムでは、話題提供者が多かれ少なかれ音の教育に携わっておられて、サウンド・エデュケーション関連の発言が充実しています。また掲載された論文もサウンド・エデュケーションに関する論考で、さらに創立20周年関連行事の報告も音の教育に関するものでした。本号は、その方面に関心のある方には、大いに参考になるのではないかと思います。

協会誌編集委員 第15巻2号 編集担当 平松幸三

<前編集委員会からお詫び>

本号に掲載されている神林哲平氏著論文は、論文原稿受理後、前編集委員会の責により査読手続きが11か月間中断し、採用決定までに長時間を要しました。著者・読者の皆様に大変ご迷惑をおかけしましたことをお詫びし、ここに記させていただきます。

前編集委員長 川井敬二

日本サウンドスケープ協会誌

『サウンドスケープ』第15巻2号, 2015年5月

SOUNDSCAPE

Journal of the Soundscape Association of Japan (JSAJ) Vol. 15(2)

発行: 日本サウンドスケープ協会

発行人: 西江雅之

編集委員: 土田義郎, 鳥越けい子 (委員長),
平松幸三, 箕浦一哉 柳沢英輔

日本サウンドスケープ協会事務局:

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学総合研究所ビル N703 吉仲研究室内

FAX: 03-3409-7546 E-mail: office@soundscape-j.org

本誌の内容を無断でコピーすることを禁ずる

Journal of the Soundscape Association of Japan

Soundscape

Vol. 15(2) (2015)

President: NISHIE Masayuki

Editors: HIRAMATSU Kozo, MINOURA Kazuya, TORIGOE Keiko (Chief), TSUCHIDA Yoshio, YANAGISAWA Eisuke

<http://www.saj.gr.jp>

CONTENTS

Special Articles: Spirit of Soundscape

TSUCHIDA Yoshio: The Spirit of “Spirit of Soundscape”

KANEKO Katsushi: A Report of “Spirit of Soundscape” at the Annual Meeting of SAJ, 2012

Part 1 Poster Session

Part 2 Forum:

Chair: KOBAYASHI Tazuko

Facilitator: TSUCHIDA Yoshio

Speakers: IKEDA Kunitaro, SUZUKI Hideki, KOSUGE Yukari, KAMBAYASHI Teppei, KANEKO Katsushi

KOSUGE Yukari: A Report of the 2nd meeting of “Spirit of Soundscape.”

Part 1 Poster Session

Part 2 Forum: Sound in Environmental Education

Moderator: KANEKO Katsushi

Speakers: SHIMA Kazuhiko, OHNO Yoshiaki, IWATA Marie, TSUCHIDA Yoshio

Original Paper

KAMBAYASHI Teppei: A Practical Study about Aims of Sound Education: Exploring New Possibilities for Modern Issues

Reports

FUNABA-NAKAMURA Hisao: The Outline Report about 20th Anniversary Exhibition

SUZUKI Hideki: Report “Classroom of Soundscape”

From the Editorial Board